
Re-birth:最後の一枚を

佐雪隼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R e - b i r t h ..最後の一枚を

【Nコード】

N 4 4 9 0 S

【作者名】

佐雪隼

【あらすじ】

高校2年生の中原勇人は小学校時代から一緒に幼馴染、藤野理衣に恋心を抱いている。しかし、勇人を取り囲む環境はそんな淡い日々を送らせてはくれなかった。編入生の飛鳥原彩音、一つ下の後輩出雲凜、そして勇人と理衣。

4人は歪んだ物語の中へと迷い込んでいく。

それぞれの過去と想い。自らの信条を突き通すことが出来たのか。苦悩と挫折、そしてSFを孕んだ重たい恋愛。あなたは認める？
認めない？

※受験に忙しくてしばらく更新できそうにもありません。皆さまにはご迷惑をかけてしまい、本当にすみません。

S c e n e : 1 現実に（前書き）

初投稿なので文章はまだまだ拙いですが、読んでいただければ幸いです。

Scene 1 現実

白無白

ウサギは寂しがり屋で孤独を感じると死んでしまう、これはよく耳にするお話。根拠があるのかどうかは知らないが、ウサギは無慈悲にも弱虫扱いされている。

そして僕はそんな弱虫ウサギと同類の人間。

寂しさが僕を弄び、むなしさが僕を殺した。こういっただけ聞こえがいいんだろうか。

実際は僕の精神が脆弱だったただけだし、世間についていけないというのもあった。でも、「大事な人を失うという事態が襲いかかってきたから、僕は自殺した」なんていうのは、何度考え直してもあまりにも滑稽でバカだ。愚かしい。弱々しいにもほどがある。

僕はなんてことをしてしまったのかと、今更ながら戦慄を覚えてしまった。

病院の屋上、フェンスを越えて、コンクリートをしっかりと踏みしめ、眼下のアスファルトに向かって、ただ一直線に落ちた。それは一瞬のことだった。風が気持ちいいと快感に酔いしれたり、ごめんなさいと罪悪感に溺れる暇などまるでなかった。

地面にドサリ。

視界にはもう何も映らなかった。

「自分はとても可哀相な境遇にあっていて、報われない」だなんて自らの境遇を正当化する行為、よくある話だよ。自殺している人なんてそんなもんだよね。

自分は不幸だ、可哀相、報われない、こんな世界にいたってしょうがない、無意味。ジャア、シノウ。そうすればいいんだ。ソウダソウダ。死ねばみんな僕の苦しみを分かってくれるんだ。シノウ。あはは、良い考えだ！ シノウシノウシノウシノウシノウ。

ただの現実逃避。浅はかだった。

僕は悲劇の主人公気取りだったんだ。情けない。

そう。今考えると……。

今考えると――？

そういえば、僕は何故「今」という言葉を使っているんだ。僕に「今」なんて無いはずなんだ。

「一体どういことなんだ……？」

それは僕の口唇から出た言葉。そして気付いた。

手がある。腕がある。お腹も、膝も、かかとも、尻も、耳も、目も、鼻も、髪も、アソコも。一糸纏わぬ僕の体がある。怪我はない。完全な僕の体。

正直な話、何が何だかさっぱり理解が出来ない。そんな中もう一つ重大な事に気付いた。

「なっ、地面が、ない……！」

見渡す限りの白。穢れのない白。眩しいほどの白。

試しに動こうともがいてみたが無駄だった。糠に釘。豆腐にかすがい。まるで自分の体が大量の牛乳の中に沈んでいるような無重力に近い感覚。上下左右など存在しなかった。ただ僕がこの空間に一人。

これはある種の拷問ではないのか、と勘繰ってしまう。

自らの命を投げたした者に対する罰。永遠の孤独。

「それはちがう」

声がした。どこから聞こえてきたその声は不快感を催す粘着質なものだった。

声の主を探すが見当たらずもなく、眼前は見渡す限りの虚無だった。

「探してもムダ。アンタは拙者のなかにいる。だから見つけるのは無理」

「は……？」

状況が、一切飲み込めない。

「すみませんが……あなたは誰ですか」

「教えられない」

「へ？」

「拙者も知らないのだ」

一拍の沈黙の後、再び言葉が紡がれた。

「だが拙者はアンタの名前を知っている。中原^{なかはら}勇人^{ゆうと}。そうだろ？」

「ええまあ……」

「自殺した弱虫。現実から目を背けた愚人」

「う……！」

断定された。もちろん自分でも理解していたつもりだったが、他人の口からそういうことを聞くのはあまりにも心臓に悪く、ショックを受けた。

湧き上がる後悔と自責の念。だがそれよりも今は――怒りだ。

「誰なんだよっ！ 何も知らずにそんなことを言わないでよ！」
理解しているはずなんだ。自分が弱いから悪いって。何を今更反論してるんだ、とは思っている。けど、やはり第三者の視点からの意見というのは何とも腹立たしかった。

「フン……アンタが怒っているのはなんとも滑稽な気がするがまあいい。だが拙者に怒りの感情をぶつけてもらわれるのはいささか不愉快だ」

なぜ相手が不愉快になるのか見当がつかない。僕を苛立たせるような言葉を吐いたのはそっちじゃないのか？

「……どうということ？」

「拙者は自ら命を絶った愚人に、もう一度だけ機会を与えようとしているのに、だ。アンタはそんな拙者に目くじらを立てている。親切にしてやろうとしているのに、牙を剥かれるのは心外だと言っているのだ」

機会を与える――？

何を言っているんだ。そんなことを突然に言われても――。

「理解出来ないんだろ？」

「くっ……！」

心を読まれている。恐らく僕の考えていることすべてが感知されている。なんとも気分が悪い話だ。

「アンタは世界の理から外れたものと逢った。アンタは死ぬはずではない人間だったんだ。だがアンタは死んだ。そして自殺をしたというのに、今、とてつもなく後悔をしている」

前半部分の言葉の意味がよくわからなかったが、最後の言葉だけはしっかりと耳に残った。

自殺を選んだのは僕の判断だ。それは間違いし揺るぎない事実。でも、違いないけど、揺るぎないけど、それ以上に後悔をしているのも、僕、なんだ……。

「だからな」

わざと沈黙を置き、そいつはこう断言した。

「ラストチャンスだ。もう一度現実^{リアル}に堕ちろ。やり直せ。アンタが望んでいる未来に書き換えろ」

言葉が耳朶を打つ。

ラストチャンス。その言葉が脳内で反芻されている。

「……それは信用していいのかな」

言葉が返ってこない。返事が皆無だ。だがその沈黙が、僕の中に少しの希望を生んだのも事実だ。

「こんな僕に……いいの？」

「欲しくないのか？」

そんな言い方は反則だと思う。だって、そんなふうに言われたら――。

「欲しい、です」

って答えるしかないじゃないか。

「フン。最初からそう言え、愚人が」

言葉が聞こえなくなる。あのねばねばとした声はもう耳に入っていない。

と、しばらくすると身体が不思議な感覚に包まれていく。否、包

まれているのではない。これはその逆。まるで剥ぎ取られていくよう
うだ。

そして気付いた。「僕」が足の先から徐々に消えているのだ。
消しゴムに消されていくように僕の体が無くなっていく光景は恐
怖心を駆り立て、僕はただひたすらに発狂していた。

「うぐあああつあああああああああああ！！」

腹から下がきれいに消えた。両手の指先も遂に削れ始める。

肘、腕、肩、喉。

キエルキエル。

「うううううあ——」

口が無くなった。叫ぶことが出来なくなる。

そして目が消え、視界という概念も同時に消失した直後、僕の意
識はプツンと途切れた。

Scene 2 岐路に

黒現黒

「さすが勇人先輩です！ まさか本当に金賞を取れるとは思いませんでした！」

「おいおい出雲氏。その言い方ではまるで『勇人に才能が無い』と言っているように聞こえるんだが」

「ち、違います！ あたしは心の底から称賛してるんです！」

「本当かー？」 性の悪い笑みを浮かべる飛鳥あすかねえ。

「本当です！ 飛鳥先輩、イジワルです！」 むっと頬を膨らます出雲さん。

突然目の前で繰り広げられる光景に、一つも声が出せない。あれ……？

「私も勇人ゆうとくんはすごいと思うよ。昔から勇人くんの写真には人を魅せる何かがあるんだよね」

「確かにまあ、この写真からはスピリチュアルな何かを感じるな」と言っ、額縁に入れ飾られた写真付きボードをこれ見よがしに両手で掲げる飛鳥ねえ。

あれは僕が以前に写真コンクールに応募して金賞を取った作品だ。一枚のボードに、テーマに沿った写真を数枚張り付けるという形式。ちなみにテーマは「街」。僕はこの街のみんなに知らせたい、見せたいと思った場所を数か所選び抜いて撮影した。様々な技法を駆使したのだが、そのボードの中で最も評価されたのはモノクロの写真だった。寂れてしまった人のいないシャッター商店街を白黒で写し、寂寥感を表現した一枚だ。その一枚は自分でもうまく撮れたと思っている。

でもまあ、そんなことはどうでもいい。今は。

「勇人、また別のコンクールに写真を応募だ！ 勇人だったら絶

対金賞をもらえるさ」

「そうですよ勇人先輩！先輩が有名人になってくれたら、あたしとても嬉しいです！いろんな人に自慢も出来ますし！」

「ほう。出雲氏は、勇人のことをただの話のタネとしか思っていないだな」

「違いますよ！！」

当然のようにみんながいる。僕の周りで、共に歩いている。制服姿でこの通りを歩いているということは下校途中に違いない。

「飛鳥先輩はあたしをいじめるのが好きなんですか？！」

「うーん……好きというか、趣味、かな」

「尚更悪いです！！」

この会話の内容も、記憶に新しい。確かに一度こんな会話があったのだ。僕の脳裏にはしっかりと記憶されている。

「私は勇人くんが有名人になると困っちゃうな」

「理衣、それはどうしてだ？」

「だってさ、もし勇人くんが有名になっちゃったら一緒にいる時間が少なくなる気がして……」

最初、頬を紅潮させながらこの言葉を言う理衣に僕の心臓が跳ね上がったのだが、今こうして2度目のその言葉を聞いて、理衣の真意が全くもってわからなくなってしまった。

理衣だけが僕に何も語らずにいらなくなった。なぜ？どうして？僕は幼いころから理衣に好意を寄せている。もちろん理衣の気持ちを僕が理解することは出来ない。それでも共に過ごした時間は短くは無いはずなのに、どうして理衣は何も言わないで消えちゃったんだよ……。

「あ、あたしも勇人先輩が有名になると困りますですっ！」

「おやー出雲氏。さっきと言っていることが違うのだが、どういうことかな」

「ち、違ってませんよっ！」

「ふーん、そっか。勇人、こいつなお前のことがす痛テテテテ

っ！」

飛鳥ねえの、後ろで一つに束ねられた綺麗な長髪をぐいっと勢い良く引っ張る出雲さん。

「な、何を言ってるんですか！！！ もうっ！」

「ごめんごめん。あやまるからさ、拗ねるなよー」

飛鳥ねえが膨らんだ出雲さんの頬をちよんと突いている。それが嫌らしく、出雲さんはぶんぶんと顔を振る。

この微笑ましい光景が続かないことを僕だけが知っている。否、みんな理解しているはずなんだ。ただ現実から眼を背けているんだ。そうでもないかと一瞬にしてこの幸せな日常ががらがらと音を立てて一斉に崩れてしまうから、誰も何も言えないんだ。それは優しさ？ それとも……何？

思考がネガティブになっていたせいか、＜僕が自殺して死んだ＞世界で経験したことが一挙に脳内に蘇ってくる。あの日あの時、僕は何故もっと動かなかったんだ。気付いた時には手遅れで、もう何も出来なくて、ただ悲しむことしか出来なくて――。

「勇人くん、どうしたの？ さっきからずっと黙ったままだよ……？」

隣を歩いていた理衣が不意に僕の制服の裾をきゅっと掴んできた。え、と震えた声で返事をして振り向くと、理衣の顔は明らかに僕を心配してくれている表情だった。

「ゆ、勇人くん！なんで泣いてるの？」

僕はおそらく、今ものすごく情けない顔なんだなって思う。だって視界が涙で歪んでしまっただけで声も出せず、呆然と立ち尽くすのみで頬を伝う水が冷たい。

「おい、勇人！ どうしたんだ？」

「勇人先輩、大丈夫ですか……？」

飛鳥ねえと出雲さんも僕の顔をのぞき込んでいる。

陽が沈むまで幾分か時間が残っている故に、国道沿いのこの歩道にも絶えず車音が鳴り響いている。人の数も少ないとは言えないこ

の時間帯、どう考えても僕は道行く人々の邪魔者なんだろうけど、それでも僕の足はしばらく鉛のように重かった。

「ありがとう、みんな……。僕は、大丈夫だよ」

心配させちゃ、だめだ。今はまだ、笑っていたいんだから。

分かれ道につく。ここでこの四人は飛鳥ねえと理衣、僕と出雲さんの二グループになる。

さっきのは僕のミスだ。一度経験した世界と出来るだけ同じ事をした方がいい気がする。その方が僕も動きやすいし、対策もとやすい。

だからここは以前と同様にとりあえず笑って分かれる。

じゃあね、と口々に言い合って僕らは別れた。

僕はこれから取る自分の行動について、脳内で幾度もシミュレーションしていた。

さっき聞いていた会話の内容を手掛かりに、この日が一体いつであったかは既に見当はついている。そしてこの日が恐らく重要な日であろうと僕は考えた。わざわざこの日に僕の記憶は跳ばされたのだから、それも何かの意味があつてのことだろうと推測した。

「勇人先輩、そのですね。あ、あたしは勇人先輩が有名人になつても――」

出雲さんがぼそぼそと呟いているのだが、ん、と聞き取れなかったフリをする。「いえ、何でもないです」と首を横に振った。

そろそろ、頃合いだ。

「出雲さん」

「え、あ、はい。何ですか？」

「僕ちよつと用事忘れてたから、今来た道に戻らなきゃいけないんだ。だから今日はここでお別れ」

「用事、ですか……。わかりました！ それではまたです！」

「うん、じゃあね」

と手を振る頃に、僕は既に駆けだしていた。

僕のこととは一つ。さっき別れた飛鳥ねえと理衣を追跡すること。推測が正しければ、この日に何かあるはずなのだ。幾度も考えた末の僕の中で立てられた一つの仮説にしか過ぎないが自信はある。この世には因果関係が必ずあるのだから。

この日に絶対何かがある。飛鳥ねえが、部屋から存在を消した何かが――！

S c e n e : 3 追跡へ(前書き)

少々駆け足になってきましたね。気をつけます。

Scene：3 追跡へ

4月、桜が僕と理衣の高校進学に彩りをつけてくれた。和光^{わこう}高等学校写真部の門を叩いた時、部員は3年生が3名のみ。部活動として認められるのは部員が4名からなので、僕を入れてギリギリだった。理衣が僕についてくるようにして写真部に入り、5名に。それがこの学校に入って最初にあった出来事。

僕と理衣は偶然にも同じクラスになり、互いに喜んだ。しばらく学校生活は順調であり、とりたてて大きな出来事は無かった。あったとしても同じ学年の奴が不登校になったり、僕の家で近所で交通事故があったりなどで、直接的に僕に関わる大きな事件などは皆無だった。

先輩たちが卒業し、再び桜舞う時候。部員数が2名となってしまう、絶体絶命の時に新入生^{いすもりん}の出雲凜が入部して3名となる。

そして高2に飛鳥^{あすか}原彩音^{はらあやね}という女生徒が僕のクラスに編入生として加わった。飛鳥ねえはいろいろと部活を見学した末に写真部に籍を入れてくれて、なんとか写真部の存続が決まる。

写真部としての活動をする傍ら、わいわいと楽しく騒がしく過ごす日常が続いていた。休日には共に遊びにいたり、写真部でかたまつて行動する時間が1年生の時よりも格段に増えた。

もともと病気がちだった僕は、友達と一緒に活発に動き回るといふことが出来なかったので、騒がしい日々には憧れていたのだ。時間が経つにつれ僕の身体も成長し、今はこのように楽しく暮らしている。

ずっと続くんだろうなって思ってた。

でもそれは間違いだった。

蝉が鳴く頃、僕のそばには誰一人いなかった。楽しかった日々が一瞬にして水泡に帰した。

だが、それは確かに一瞬だったが、兆候がないわけでは無かった。皆がいなくなる前に異変は起きていたのだ。

飛鳥ねえが部室に顔を出さなくなった。皆勤賞をあげてもいいけど、僕らは誰一人部活を休んだことのある人はいなかったのだ。

今にして思えば、あれは静かな訴えだったのかもしれない。なのに僕は、取り立てて何も行動を起こさなかった。そのうちやってくるだろうと勝手に思っていたのだ。

僕はもう選択を間違えない。

飛鳥ねえが部活に来なくなる最初の日が、明日。さっきの会話からすると、これは間違いないのだ。

だから今日、飛鳥ねえに何かあるはずなのだ。

例の分かれ道に戻ってきた僕は迷わず飛鳥ねえと理衣が進んだ方向へと走る。

しばらく道なりに駆ける。

飛鳥ねえと理衣の家はそこまで離れていない、らしい。僕は理衣の家は知っているのだが、飛鳥ねえの住所は知らないのだ。しかし飛鳥ねえ本人曰く、お互いの家の距離は歩いて数分の距離だと言っていた。だから理衣の家の方面へずっと進んでいけば、そのうち二人の背中が見えるはず。

とは言ったもののそう簡単にはいかず、もともと体力に乏しい僕は走るのに疲れて、とぼとぼと歩いていた。

「はあ……、こんなもんで……へばって……たまるもんか……！」

気合いを入れ直す。

僕は言われたんだ。「未来を書き換えろ」と。努力なしで出来るようなことじゃないんだ。

既に棒のような足に喝を入れて、また走り始める。

口から出る息が熱い。喉から蒸気が出てきているみたいだ。

「あ」

不意のことだったので、思わず口唇から声が漏れ出ていた。

見つけた。飛鳥ねえの背中が遙か前方にあるのが確認出来る。ただ不可解なのは理衣の姿が無いことだ。理衣の家まではまだもう少しかかるはずなのだ。こんな早々にあの二人が別れるのはあり得ないと思ふ。

しかもルートがおかしい。そっちは自宅の方向ではないはず。

僕は気付かれないように且つ見失わないように、飛鳥ねえの後を追う。

飛鳥ねえが角を曲がる。壁に背を張り付け、僕はそつと慎重に角から顔を出した。

するとまた不可解な状況を目にした。僕が追跡している飛鳥ねえは、なんと理衣のことを追跡していたのだ。僕と同じようにして、そろそろと理衣の後ろについていく姿が見える。

「どういうこと？」

あまりにも意味不明だったのでついつい言葉を発してしまった。

二人の後をついていこうと、僕も角から身を出そうとしたところ突然それは起きた。

あまりにも一瞬のことですそれは幻のように思えたのだが、飛鳥ねえの姿が忽然と消えてしまったのはそれが紛^{まご}うことなき真実であるという証明だ。

飛鳥ねえが僕の目の前で連れ去られていった。突然どこから現れた白いバンが飛鳥ねえの前に停車し、中から数人の恰幅の良い黒スーツの男たちが飛び出してきて、飛鳥ねえを車に無理やり押し込み猛発進していったのだ。それはまるで嵐のようで、あまりにも手際が良すぎる所業だった。

動けなかった。僕は何も出来なかった。しかも気付けば理衣の姿もない。

何も分からなかった。

でも情報を2つほど手に入れることが出来たのは事実だった。

1つ目は飛鳥ねえが誰かに連れ去られていること。飛鳥ねえの無事が気になるが、明日の学校に飛鳥ねえはちゃんと登校しているか

ら、心配はいらない。ただ部活動と、部室を避けるようになるはずだ。

2つ目は、あの黒スーツ達を僕は一度目撃しているということ。あいつらは確かに僕が自殺した>世界で、目に触れたはず。僕の記憶の中の彼らは、信じ難いことに理衣と同じ車に乗っていたのだ。

この2つの手がかり、特に後者は理衣に関係している重要な情報、この収穫は大きい。

飛鳥ねえが部活に来なくなった理由は恐らくこの誘拐行為の後に何かがあったからなのだろう。その何かにはもしかしたら理衣が絡んでいるかもしれない、という仮説を立てることが出来る。現に今、理衣の姿も突然消えている。

疑問に疑問が重なって脳内がパンク寸前になっている。

解は一向に出ず、その場に呆然と立ち尽くす僕。

「一体、何があるっていうんだ……」

理衣、教えてよ。

Scene 4 決心を

佇んでも何も始まらないと思い、行動に移そうと僕はその周辺を歩き回った。もちろん消えた理衣を探すためである。しばらく彷徨ってはみたものの、手掛かりとなるようなものは一つも見つからず、この場での理衣探索を断念した。

車を人間の足で追いかけることが無駄であることは至極当然なので、とりあえず彼女の家へと向かうことにする。彼女が家にいるという希望を携えて。

しかし結果はバツ。

理衣はセキュリティに定評のあるマンションに住んでおり、そのマンションに入る際、鍵で開けるかインターフォン越しで中から操作してもらわないと、その門扉は開かない。僕はインターフォンで理衣の家の番号を押してみるも、応答は一切なかった。このことから理衣は家に帰っていないことが分かった。

心の底に不安が募っている。

もちろん、明日の学校に理衣と飛鳥ねえが登校することをしっかりと記憶している。だから、心配はそこまでいらなはずなのだが、変な胸騒ぎがするのだ。

しばらくそのマンションの前で理衣の帰りを待つことにするも、通り過ぎるのは下校中の他校の生徒や奇抜な格好をした若者たちだけで、理衣は一向に現れなかった。陽がほとんど沈みかけで辺りも暗くなってきたこともあり、僕は仕方なく家に帰ることにした。

比較的新しい住宅街で、時折どこかの家の住民とすれ違う道だ。整えられた庭や、新調されたりしき色艶やかなカーテンなどが垣間見える。

僕の家は母子家庭である。

父が交通事故にあい、僕が小学生の頃にはもうこの世にはいなかった。母はそれまで父とともに経営していた花屋を一人で切り盛りすることになった。まだ分数の足し算が出来ない頃の僕でも、母が多忙であることは見てとれた。

そんな中でも忘れずに家事をこなし、僕の甘えを聞き入れ僕を食べさせてくれる母には頭が上がらない。

それなのに、一時の感情に流されて僕はこの世から逃げたのだ。情けない。何も親孝行などしていないというのに……。僕は本当に大馬鹿者だ。

フラワーショップ「茜^{あかね}」と飾り気のないシンプルな文字が表記された看板が目に入る。これが僕の家。家の前にたどり着くと、自らの家の扉をくぐるのをためらってしまった。いくらこの世界が僕が自殺した世界ではなくとも、一度犯した間違いは深く僕の胸に突き刺さっていた。

ただいま、と申し訳程度に言っただアを開けて中に入る。

満遍なく散らされた花の匂いとともに「おかえり」と早速、店じまいのための片づけをしていた母が笑顔で迎えてくれた。

実際はいつもの変わらない光景なのに、なぜか今だけはその光景がとても愛おしいものに思えてしまった。と同時に、母の優しさに対してどうしようもない懺悔の気持ちが僕を襲っているのも確かだ。声は震えていないだろうかと心配しながら出来るだけ平然を装って「片づけ手伝うよ」と肩に下げてた荷物を放り、母の横に立って作業を手伝う。

「ありがとう」とまたも顔を綻ばして言ってくれるが、今はその微笑みが胸をちくりと棘のように刺してきていた。

お礼なんて言わないでいいよ、母さん。僕はただこれっぽっちのことしか出来ないバカ息子だよ。

ごめんね。

様々な出来事が起こりすぎて精神的に参っていたからだろうか、

僕はベッドの上で横になるとすぐに泥沼のような眠りに堕ちていった。

気付いた時には目覚まし時計が僕を必死に起こそうと努力している最中であり、アラームをさっと止めると、布団からがばっと飛び出る。いつもならば「あと5分……」などと妥協しているのだが、流石に今の僕にはそんなふうには気持ちを緩くする余裕など無い。

カーテンを勢いよく開き、陽光を部屋内に招き入れる。太陽の恵みによって体中が覚醒するのを感じる。

寝巻きのまま階下へと向かう。リビングでは既に朝食が用意されていたのだが、用意をしてくれた本人の姿は見当たらなかった。だがよく耳を澄ますと遠くの方で足音が聞こえ、それは店の方からだったので大方開店の準備でもしているのだろうと推測する。

「母さん、ご飯食べてるよー」と母に聞こえるように大きな声で言う。

はい、と返事が聞こえてきたので僕はそのまま食卓の椅子に座り朝食を黙々ととり始めた。

しかしだんだんと味気なくなってきたので、テレビのリモコンに手を伸ばし、特に見もしないのに適当なチャンネルにあわせてリビング内を賑やかにする。

ちなみにテレビでは遺伝子組み換え食品関係がとりあげられているらしく、画面上には、根でじゃがいも、土から上でトマトを生成するということなんとも奇怪な植物が映し出されていた。それを造ったのが、僕の住んでいるこの街にある大都生物科学研究所と知った時には驚いたが、それ以外に僕の興味を惹くものは特に何も放送されなかった。

朝食を食べ終え食器を台所に持っていくと、テレビのスイッチを消してから、歯磨きなどの身支度に勤しむ。

支度も終え、制服に着替えた僕は鞆と愛用のカメラを手に持ち、靴を家の玄関側から持ち出して、母のいる店側にまわる。

店の中は綺麗に整えられていた。昨日は無かった花があるところ

をみると入荷したてなんだろうか、よくよく注視すると花の配置も大幅にかわっている。

「母さん、行ってくるね」

「あ、ちょっとまって」と僕を留めると、どこからか花束を持ってきて手渡してきた。

「はいこれ。例のところに、ね」

「あ、うん」

「お父さんにはちゃんと挨拶してきた」

「うん。怠ってないよ」

「おっけ。じゃ、いつてらっしゃい」

「行ってきます」

カランカランと店の扉を開けて歩きだす。

空がとてつもなく青い。僕が手にもっている花も、そんな青に負けじと瑞々しく誇らしげに蕾を開かせている。

母は店の中の花が余ってしまうというも僕にこのようにしておつかいを頼んでいる。まあ別に悪い気はしないんだけど。

僕の家から数百メートル離れた場所で交通事故があった。飲酒をしていた運転手が無事なくせに、轢かれてしまった少女はこの世から去ってしまった。即死だったらしい。母はそんな少女を悼んで僕にこの花を供えさせている。

問題の事故現場には、線香をたてる小さな石鉢と花束が道脇に置かれていた。そこに僕も手にしていた花束をそつと添える。

手を合わせ、しばらく黙想をする。

心を落ち着けて僕は、はっきりと言う。

「待ってて。今行くよ」

迷いはない。今日することが今、この場所で決まった。

「次は、出雲さんだ」

S c e n e : 4 決心を(後書き)

ありがとうございます……

Scene::EX 納豆のような声のあいつ

白無白

「やっとシフトしてきた。拙者は待ってたぞ」

「ってか、まさか、本当に来れるとは思わなかった」

「何？ 望んで来たんじゃないのか」

「そういう訳でもないけど、ただ授業が暇だったからこっちに来れないかなってちよっと考えてたら、なんかここに来ちゃってた」

「は……。アンタは何という愚人なのだ……」

「ねえ、ちよっと。勝手に落胆しないでくれる？」

「……」

「おーい、黙らないでよ」

「……」

「ねえってば」

「……。ちなみに言っておくが、ここに来たとして現実の時間が勝手に過ぎるわけではない。いわばゲームのP A U S Eと同じような感覚だ」

「え、そうなの？！ ちょっとショック。けどまあいいや。一応聞きたいこともあるし、ここに来たついでに教えてよ」

「ほう。何だ」

「僕は今いる世界でやることを果たしたら元の世界に戻るの？ だとしたら僕、死んで――」

「いや、言っておくがその世界は今までアンタがいた世界だ」

「う、ん？」

「アンタが何を勘違いしているか知らないが、拙者は時間を戻しただけ。記憶付きという特典でな」

「そう、なんだ……。ちよっと僕の認識が甘かったみたい」

「まあ、それは仕方のないことだろう。ただの人間には、すぐに理解出来るわけがないだろう」

「その言い方、腹が立つなあ」

「そうか？ まあ指摘されても直さんがな」

「意地っ張りめ」

「どうとでも言うがよい。それより何だ。他に聞きたいことがあるのだろうか？」

「うん、まあ。とりあえずこの空間に僕の体がないんだけど」

「それはそうだ。何故ならアンタの身体は今、現実には落されているではないか」

「じゃあ、僕はどうやってここに？ 正直、原理がわかんないよ」

「原理なぞここでは通用せぬが、とりあえずはお前の心の一部分がこの空間内に保存されているという感じだろうな」

「ちょ、勝手に人の心を削ったの?!」

「安心しろ。生きてる上では問題ないから」

「そういうことじゃあないんだけど……」

「……じゃあこうしよう。アンタがもうここは不必要だと感じたら返そう。二度とここには来れなくなるがな」

「そうして。いつまでも依存してるわけにはいかないし」

「フン。大層な自信じゃないか」

「自信ってわけじゃないけどさ」

「……」

「……。ねえ」

「何だ」

「君は、僕が『未来を書き換える』だなんてこと出来ると思っているの？」

「……」

「僕はね、本当のところ、そんなことは無理だと思ってる」

「……」

「出雲さんや飛鳥ねえを引き留めることは僕の力では到底及ばな

いし、理衣に至っては消えた理由すら分かってない」

「……。あきらめるのか」

「ううん。ただ、みんなと一緒にいつまでも笑いあって過ごすつてのは、叶わない願いなんだって思い知ったんだよ」

「それで、お前は何の為に現実で奔走しているんだ？」

「うーん……。何でなんだろうね」

「おいおい。そんなんじゃ、拙者が時を戻した意味が無いじゃないか」

「意味はある、と思う」

「曖昧だな」

「人間だからね」

「フン。アンタも言うようになってきたね」

「まあ、ね」

「当面の目標だけ聞かせてもらおうか。それ以外は問わないと思う」

「目標か……」

「……」

「……さっき僕は『みんなでいつまでも笑いあって過ごし続けるのは無理だ』って言ったよね。だったら、最後はみんなと笑いあってさよならしたいな、って思ってる」

「そんなもんでいいのか？」

「そんなもんって言うけどね、これも結構大変だと思うよ」

「……フン。精々頑張るがいい」

「そうさせてもらうよ」

「……」

「……」

「……」

「……ねえ、どうやって帰るの？」

「締りの悪い奴だな、全く。来たときの逆をすればいいじゃないか。帰りたいって念じろ」

「それもそうだね」

「理解力に乏しい奴め」

「ふふっ、だって――」

「人間だから」

黒現黒

はっと目が覚める。

黒板に書かれた文字数は、僕がシフトした前と後とでは全然変化が無い。

本当に残念だ。

S c e n e : 5 学校で (前書き)

> i 3 0 2 5 1 — 3 8 7 8 <

主人公、中原勇人を簡単に絵にしてみました。

Scene : 5 学校で

気付いたらいつのまにか放課後になっていた、だなんて世界というものはナマぬるいものではない。僕としては、写真部として集まれる放課後の時間が一番活発に動けるベストタイムなので、授業や休み時間が余計なのだが、仕方がない。

朝、いつもと同じように自分のクラスに入り、自分の席に着く。他の生徒たちも続々と教室に入ってくる中、僕は例の二人だけを心待ちにしていた。

理衣と飛鳥ねえは来る。それは知っているし、もっと言えば二人とも登校時間ギリギリに教室に入ってくることも既に思い出している。まだHR開始までの時間が30分ほど残っているから、二人が来るにはもう少し時間が経たなければならぬ、と脳内では理解しているはずなのに、気持ちは落ち着かない。

ソワソワしている自分がいる。そんな僕が明らかに挙動不審だったらしくクラスメートが「大丈夫？」と心配をしてくれた。

これじゃあ精神が持たないと思い、心配してくれた生徒に礼を言っ
て、とりあえず写真部の部室にちらっと寄って気持ちを落ち着けることにした。

和光高校写真部部室は今いる新校舎の2階から渡り廊下を移動して廊下を直進すると、旧校舎2階西側にぽつんと存在する。ちなみに部室が旧校舎にあるのは、この学校の写真部創立が新校舎が出来る前だからだ。ようするに伝統ある部活なのだ。一応、ね。

余談だけど、この街は構造改革特区に指定されており、医療・街作り・教育関連には特に力が入っている。外国人の医師を招いたりしたりして医療技術の底上げを図り、街中にはバリアフリーな個所や幾何学模様のようなデザインの建物が多数建ち始めた。挙句の果てにこの学校もスーパーサイエンス指定校なるものになり、理系の

人にとっては嬉しい設備が整っている。写真部部室と同じ大きさの部屋が、理学研究部という部活動の物置に使われていると知った時には、少し哀しみを覚えた記憶がある。

閑話休題。

僕は部室に入り、扉脇のスイッチに手を伸ばして部屋の電気をつけた。

残念ながらこの部屋は日当たりがあまり良くないので、電気のお力添えがないと、日中でも少々薄暗い。

整頓された部屋。カメラ関係の部品やそれらを扱うための工具、現像液や乾かすためのクリップやひもなど、すべてが綺麗に片付いている。これは全て理衣や飛鳥ねえ、出雲さんのおかげだ。僕は元来ものを整理するというのが苦手なので、みんなのおかげでこの部屋の見栄えは保たれているのだ。

「ふう……。ちよつと休もう……」

部屋内の椅子に座らず、そのまま地面にぺたんとへたり込む自分。扉を背にして、部室内をじっくりと見渡し、その風景を目に焼き付けておく。

今までここであつた出来事が次々と脳裏に思い浮かんできた。理衣がここに入部した時の先輩達（全員男だった）の沸いた様、飛鳥ねえのとんちんかんな撮影方法にみんなで笑ったこと、先輩たちの卒業の時に行った打ち上げ会、現像液が眼にしみて泣きはじめた出雲さんの顔。本当に色んな事があつた。

「ははっ……」

なんでそれらが遠い日のように感じるのだろうか。子供の頃、壊れてボロボロになったおもちゃを眺めて涙した時のように、すこし胸がきゅつと締め付けられて苦しかった。

教室に戻ると二人は自分の席に座っていた。

飛鳥ねえは教室の入り口から遠く、僕の席からも離れているので僕には気付かない。席の近い理衣はすぐに僕の方を向いて「おはよ

う、勇人くん」と挨拶をしてきたので、僕もやや大きめな声でそれに応える。すると飛鳥ねえはちらっとこっちの方を一瞥したが、すぐに前に向き直ってしまう。飛鳥ねえにも挨拶をと思ったところで、先生が教室に入って来た。

仕方なく僕は自分の席に座る。

普段は快活に「おはよー、勇人！」と言う飛鳥ねえが、挨拶をしてこなかった。この感じ、同じだ。

たぶんこの日の放課後から飛鳥ねえは部活に来ない。

そう思うと、どうにかしなきゃ、と急に焦燥感に駆られてしまう。落ち着け、落ち着くんのだ、僕。焦ってもどうにもならない。

放課後まで待つんだ――。

同じ内容を、同じ言葉で、同じ説明の仕方展開されていく授業は究極的につまらなかった。

日本史、古典、英語、生物、数学。どれもかれもが、退屈だった。戻した時間の中で生きている僕が悪いのもあるが、寝なかった僕は褒め称えるに値する気がする。一度、現実逃避はしたけど。

それから授業をやって思い出したけど、先週は学期末考査だった。授業中にテストが返却された科目があったおかげで思い出した。夏休みも目前で、終業式が来週の火曜日に控えている。ちょうど今日から一週間後で長期休暇にはいるのだ。ということで本日、火曜日である。

ということは僕に残された時間がぴったし一週間ということになる。なぜなら、飛鳥ねえは終業式の日になくなくなることが確定的なのだから……。

ちなみに各休み時間、何度か飛鳥ねえとの接触を試みたけど、彼女は明らかに僕を避けているらしく、授業終了とともに教室から風のようにいなくなり、授業開始時刻になると教室内に帰ってくる。残念なことに、まったく近づけなかった。

結局そのまま流れていき、遂に6時間目。

授業終了間際になってから、焦る気持ちが抑えられなくなつてしまい、貧乏ゆすりが止まらない。

時計を凝視するにもつかれ、先生の見えないところで手持ちの一眼レフのカメラのレンズを綺麗に拭いて、カメラの手入れに勤しむことにする。

そして時は来た。

チャイムが、鳴る――！！

S c e n e : 6 存在を（前書き）

書きたかったシーンまで来れた……

Scene 6 存在を

6時間目が終わった。

清掃が始まる。教室内の生徒たちが皆、慌ただしく動き回る。机たちは一旦すべて教室の端へと寄せられ、箒やぞうきんを手に持ち、掃除を始める。

飛鳥ねえを監視していたけど、特になにも異質な行動を起こすこともなく、教室の窓を丹念に拭いていた。

掃除に決着がつき、教室の中は普段と変わらないものとなると、生徒たちは席に着き、先生は淡々と連絡事項を述べはじめる。

何も変わらない、いつも通りのSHR。ショートホームルーム先生が連絡し終わると、

日直の「起立、気をつけ、礼」という号令と共に放課後が始まった。生徒たちが部活動に向かうため次々と教室から出ていく騒がしい中、飛鳥ねえにやっとの思いで声をかける。

他の生徒に交じり教室から出ていく途中だった飛鳥ねえはびくくと驚き、「なに？」と口を開く。

「今日、部活来る？」

「……ごめん勇人、用事あるからいけないんだ」

「あ、うん。わかった」

もしかしたら部活に来てくれるかな、などというちょっとした僕の希望は即座に打ち砕かれたが、もともと分かっていただけに落ち込みはしなかった。

そのまますたすと教室から飛鳥ねえは出ていってしまった。

その後ろ姿を見送っていると、きゅっと制服の袖を引っ張られる感覚。理衣だ。

「勇人くん、一緒に部室行こう？」

僕の袖を掴んでいるのは右手、理衣の左手は既に鞆を持っていた。
「うん、行こうか」

僕は理衣から眼をそらして自分の席に戻り鞆とカメラを取りに行

く。ちなみになぜ理衣から眼をそらしたかと言うと、僕が一緒に行くのを了承した後の理衣のほころんだ顔が反則的に可愛いので、それを見てしまうと僕の顔が赤くなってしまうからだ。

廊下を二人並んで歩く。夏の音と香りと日差しが、十分すぎるほどに廊下内に充満していた。今日は風が強いのか、開け放たれた窓から入ってくるそれらが涼しくてとても気持ち良い。肩より少し下程度の毛先が軽くはねた理衣の黒髪が宙を舞い、仄かな良い香りが漂ってきたことには、少し気分が高揚してしまった。

この瞬間は、授業と違ってたとえ2度目であっても、悪いものではないとつくづく思ってしまう。

お互い沈黙なのが少しむず痒いところだ。

理衣はもともおとなしいので、基本ぎゃーぎゃー騒いだりはしない。寡黙なのはもったいないけど、そんな理衣が僕はいいと思っている。

ガチャリ。

部室に入ると、そこにはすでに出雲さんがいた。

「ここにちわです、勇人先輩、理衣先輩！」

「やあ、出雲さん」

「こんにちは、凜ちゃん」

挨拶をすまし、僕と理衣は荷物を端に寄せて置く。

トテトテとその小柄な体で近寄ってきて「先輩！今日はなにするんですか？」と出雲さんは瞳をらんらんと輝かせながら訊いてきた。

「今日は久々に屋上にでも行こうか？」

「屋上ですか？！ふふふ、あたしの腕の見せ所ですね！」

部活中、部員には僕がみんなにカメラを貸している。（みんなとは言っても理衣は自分のカメラがあるので、今日は実質出雲さんしか貸していない。）それで僕が撮影方法を教えてみんながそれに倣って撮るのが習慣である。それでいつも誰の写真が一番心に響くかと行く勝負をしているのだが、この学校の屋上でそれをやるのは

確かに久しい。

だがその前にやることがある。

「理衣。ちょっと僕と出雲さんで道具取ってくるから、理衣はここで行く準備しておいてくれないかな？」

「私？ うん、わかった」

「あたし、なんか手伝うんですか？」

「うん、ちょっとね」

僕と出雲さんは理衣を残して部室を出る。

「何処に行くんですか？」

出雲さんは容赦なくその質問を僕にしてきた。それは仕方のないこと。僕だってこういう状況だったら必ず行く場所を聞くに決まっている。

ただ訊かれたくない質問であるのも事実。

しばらく無言で歩くも、出雲さんから向けられる視線に耐えられなくなり、ついに口に出してしまった。

「出雲さんのクラス、だよ」

出雲さんは目を丸くして「え？」と心底驚いてた。

「出雲さんは確か1のCだよね？」これは以前出雲さんの口から得た情報。

「は、はい……」だから本人も頷くしかない。

新校舎の1階、1-Cの教室の前に僕らは立っていた。

扉を開くと、この時間帯の生徒たちは皆、部活動に精を出しているため、もちろん中には誰もいない。

しんと静まり返っている。沈黙が教室を支配していた。遠くで聞こえる生徒たちの掛け声が、まるで別世界から流れてきているかのように、この誰もいない教室という空間は異質で、寂しさが滲み出ている。

僕はこんなことしたくない。けど、言わなきゃ、何も始まらない。
「出雲さんの席って、何処かな？」

この空間に適切な少し抑えた声量で、僕は言葉を発した。

「席、ですか……？」

「うん」

出雲さんは見るからに戸惑っていた。どうすればいいかひたすら
思案しているようだった。そんな出雲さんの表情は暗い。

出雲さんは一步一步ゆっくりと、すぐにくずおれてしまいそうな
ほどに不安定な歩調で教室内を彷徨いはじめる。やがてとある机の
前で止まった。

「こ、ここです」

教室の外からその姿を見守っていた僕は、居た堪れない気持ちに
なっていた。

僕は出雲さんが指さす席へと向かうため教室内に入ろうとしてい
る。これはもう、攻撃に近い。相手の隙をついているようで、自分
のしている行為が外道のように思えてくる。

他の机をよけて、出雲さんのもとへと寄る。

あ、あ、と出雲さんは両手を伸ばして僕に來ないでと言わんばか
りの仕草をしている。

「あれ？　ここ山内さんの席って書いてあるよ？」と机の端に貼
ってある名前シールを指差す。

「そ、そういえば席替えしたんだった！　あはは、間違えました
！」と出雲さんはおどけた様にして言う。

そうして再び彷徨いだす出雲さん。今度は僕から最も離れた、ベ
ランダ側、教室の一番後ろの席に座る。

「ここでした！」バンバン、と着席しているところの机を、取り
繕うかのような笑顔で叩いた。

その席に近づこうとすると、出雲さんはすくつと立ちあがって僕
を妨害してきた。ぎゅつとその両腕で縛られてしまった。

「だめです！　近づいちゃだめです！！」

それは必死の懇願だった。出雲さんの腕にさらに力が入り、僕の
身体が締め付けられている。

「出雲さん、あの席は――」

「なんで！　なんでこんなことするんですか！　あたしの席なんかどうだっていいじゃないですか！！　どうしてあたしの席が知りたいんですか！　勇人先輩、ひどいです！」

僕の腕に何かが付着した、と思って確認するとそれは出雲さんの涙だった。彼女の双眸からは幾粒の涙が溢れ出していた。

ごめんね、出雲さん。謝らなきゃいけないと思う。けど、今は君に伝えなきゃいけないんだ。僕が何を知っているかということを協力してほしいから、こんなことをしてしまう僕を許してほしい。

「出雲さんの席なんて、ないよね」

出雲さんが涙を流して少し充血した眼を僕に向けている。その眼は僕に伝えている。その言葉の先を言わないで、と訴えている。胸が痛い。

「だって出雲さん、死んでるんだから……」

日中のくせに、教室の中は暗い。

S c e n e : 7 協力を（前書き）

遅くなつてすみません！！

Scene：7 協力を

出雲さんは交通事故にあっていた。

飲酒運転による暴走運転が原因であり、運転手は怪我を負いつつ助かったものの、轢かれてしまった出雲さんは即死だった。

僕の家から数百メートル離れた花の添えてある例の場所が、出雲さんが命を落としてしまったまさにその現場なのだ。

この世に未練があるからこそ、魂は現世に留まり、行動を起こすための動く体のようなものを必要とし、幽霊という存在に昇華する。全く浮かばれなかった人生があっけなく終わってしまい、出雲さんは自分の生きてきた日々が滑稽に思えたらしい。

もっと楽しくて、面白い日常が欲しい――。

そこで目をつけたのが、ほとんど毎日のように花を持ってきて黙想してくれている僕だと本人は言った。

僕が死んでしまったその時間で、出雲さんは自らが消える前に、僕に全てを打ち明けてくれたのだ。

そのときの出雲さんは泣きじゃくりながら、「黙っていてごめんなさい」と何遍も何遍も頭を下げたのだ。騙していてごめんなさい、ずっと隠していてごめんなさい、と。

その姿は、今も僕の網膜に焼き付いている。

そしてこの暗い教室内で、出雲さんが涙目ながら僕のことを見詰めてくるその表情が、かぶる。かぶってしまう。

ただこの告白は必要不可欠だ。僕が「出雲さんは幽霊だということを知っている」ということを口に出さない限り、出雲さんは協力をしてくれない。

実際、僕が死んだ時間で飛鳥ねえが部活に来なくなった時に、出雲さんは飛鳥ねえのことを特に気にする様子を見せず、ずっと僕にひつついてきていた。

それは避けなければならぬ。出雲さんの力がなければ、飛鳥ね

えを捕まえられないのだ。

ここ巫女寺市みこでらは、構造改革特区に指定された都市であり、都市の人口と建築物は年々増加している。いわば小さな地方都市と言うべきか。

そんな街で一人の少女を探しぬくことは、不可能に近い。だが出雲さんは違う。出雲さんにはおよそ障害物なるものは存在しない。幽霊だけあり、自らを透かして移動することが可能なのだ。また、この街にとり憑いているため、街の全貌を彼女は把握している。事実、僕が賞を取った例のシャッター商店街の写真などは、出雲さんの協力があつた。

出雲さん。

彼女の協力は、必要なんだ――。

全ては密接にくっついている。

飛鳥ねえが消えるから、出雲さんも消えてしまう。

では、どうやったら、良い「終わり」を迎えられるのか。

明確な答えはまだない。だからこうして奔走しなきゃいけないのだ。

出雲さんへの説明は困難を極めた。

僕が一度死んでいること、世界をやり直したこと、飛鳥ねえが消え出雲さんが消え理衣が消えること。

すべてが突飛な話で、妄想だと言われても仕方のない内容。

でも、これらが真実。

彼女はしばらく目を丸くしっぱなしで、僕が説明している間もどこかに意識がとんでいるかのようだった。

説明し終わっても、呆然と彼女は前を向いていた。

今、僕ら二人がいるのはこの街のなかでも特に外観に力が入っている大きめな公園だ。木々が立ち並ぶジョギングコースには最適な道が、公園の外周に沿っている。大きな噴水もあり、夜にはライトアップされて美しいウォーターショーが繰り広げられるため、陽が

完全に落ちてからこの公園に入るのは避けなければならない。アベックが急増して、公園に居辛くなってしまう。

そんな公園の端にある子供たちの遊び場に設置された大きくて頑丈なブランコに、僕ら二人はぶらんぶらんと揺られていた。

今日の部活は予定通り、屋上で行った。部活動終了時間まできっちり写真を撮り続けた。もちろんあまり実は入らなかったけど。

部活が終わり、理衣と例の分かれ道で別れた後、僕は出雲さんと一緒にこの公園にやってきた。

空はまだうっすらと明るい。夜の噴水まで時間はまだある。

「……あたしは、何をすればいいんですか……？」

静かに口を開いた出雲さん。

「……信じてくれるの？」

「まだ半信半疑ですけど……。ほんとのところ、飛鳥先輩が突然いなくなるだなんて信じれません。けど、勇人先輩はあたしのことを知ってました。だから、信じてみようとは思います……」

嬉しかった。跳びあがりたいほどに嬉しかった。

正直言って僕は不安だった。協力してくれなかったらどうしよう、とネガティブなことばかりが頭に浮かんできてしまい、頭を掻き毟りたくなってしまうほどだった。

胸をなでおろす自分。

「ありがとう、出雲さん」

僕は自分のブランコを降りて、隣の止まっているブランコに未だ乗り続ける出雲さんの前に立つ。

「本当に、ありがとうっ!!」

出雲さんの両手を握りしめて、僕は頭を下げた。

風が僕らを撫で付けていく。木の葉を揺らして、かさかさと辺り一面が葉の擦音で一杯になる。

「勇人先輩」

「ん？」

名前を呼ばれたので顔を上げると、出雲さんは何かをぼそっと呟

いた。頬を紅潮させながら。

「先輩は——」

聞き取れなかった。

「いま、なんて言ったの？」

風が出雲さんのショートヘアも小刻みに震わせているのが目に入る。

彼女は首をぶんぶんと横に振って、笑顔で、

「やっぱり、なんでもないです！ 気にしないでください！！」

いつもの彼女よろしく、元気一杯に言った。

「あたし、頑張ります！ なにしたらいいですか？」

ありがとう。出雲さん。

「出雲さんは——」

一歩前進した気がした。

Scene：8 思考を

全ては密接にくっついている。

一つが崩れると、まるでドミノ倒しのように不和の波紋が一瞬にしてまわりを巻き込んで、日常は崩壊していく。

飛鳥ねえがいなくなると、出雲さんは消える。そして二人がいなくなった後、理衣がいなくなってしまう。この連鎖を僕は喰い止められるのだろうか？

出雲さんと別れた後、僕はそのまま帰路についた。

ご飯を胃に流し込み、せかせかと身体を洗って湯船につかり、慣れた自分のベッドに沈み込み、枕に顔を埋め、思考の闇に堕ちる。考えることはたくさんあるし、それ以上に不安や心配が僕を圧迫してくる。

しかもあの言葉。「ラストチャンスだ」という言葉が、幾度も幾度も耳に蘇ってくるのだ。あと一度だけとアイツは言っていたのだ。じゃあ、失敗したらどうなるのか？

そもそも、失敗とはどういうことか？

何が、成功なのか？

僕はアイツに向かって、「みんな笑顔で別れたい」と言った。

うん、そうだ。確かに笑顔で別れたい。もう少しうまくいくのであれば、ずっと一緒にいたい。

でも、それは無理なんだと思う。飛鳥ねえには、タイムリミットが存在するからだ。その時間を過ぎたら、強制的に飛鳥ねえはいなくなってしまう。

これは覆せない。だから、さよならしないといけないことは理解している。

ならせめて、飛鳥ねえに何が起きて部活に来れなくなったその理由を知りたい。それに、これは僕の勘だけど、飛鳥ねえは理衣の秘

密を握っているはずなんだ。

飛鳥ねえが黒ずくめの男たちによって、強引に車に押しやられて何処かへ連れて行かれたあの事件。あの男たちが理衣と一緒にいたのを、僕が死んだ時間^{せかい}で目撃している。ならば、飛鳥ねえと理衣に何かあるのではないかと勘繰るのが正当だと思う。

ううっ……。

頭の中で色んな事柄がぐるぐる廻っている。

理衣。飛鳥ねえ。

この二人に何があるのか。

今は出雲さんの力に頼るしかない。

一刻も早く、飛鳥ねえを捕まえるしかない。

学校で飛鳥ねえが僕との接触を拒絶しているのは一目瞭然だ。

何故？

どうして？

飛鳥ねえは僕を避ける理由がまったく見えてこない。

「あああー！！！！！！！！！！」

考えるのが嫌になって、発狂しながらじたばたとベッドの上で暴れてみる。

暴れ終わると室内が妙に静かに感じられ、空しくなってしまった。思考を中断すると手持ち無沙汰になってしまい、おもむろに立ち上がり勉強机に向かって座ると、愛用の一眼レフのカメラに手を伸ばしてかちゃかちゃといじくり始める。

結局僕にとって、カメラが時間を忘れさせてくれる一番の特効薬のようなものだった。

幼少時代の僕は病気がちで、病院に入院や通院を繰り返した、親からしてみれば迷惑な子だったと思う。両親は二人とも各々の好きな職場で働いていたのだが、それでは僕の世話が出来ないということで辞めてしまって、自らの家を店にしたのだ。それがフラワーシヨップ「茜」である。

両親のそんな事情を知ってしまった僕は軽いショックを受けた。僕が父と母の夢を奪ってしまったんだ、僕は迷惑な子供なんだ、と。

ふさぎ込むそんな僕を見て、父はカメラを僕に与えてくれた。

「父さんが学生時代にハマっていたんだ。一緒に綺麗な写真撮って、母さんをびっくりさせてやろう」

とベッドの上の僕を連れ出して、どこか知らない山に強引に連れていかれた。それは本当に突然のことで、寝巻きのままの僕は、父が運転する車が目的地の山に着いた時には驚いた。「うわ、本当に山に登るんだ」と僕は啞然としながらも、父は、まだ小さかった僕の体を抱えて、舗装されたならかな斜面を登っていく。

着いたのは街の全貌が見渡せる高さ。崖上にはがっちりとした鉄製の柵が並んでおり、「乗り越えないでください」という注意書きが添えられていた。

そこで見た光景は今でも忘れない。

巫女寺市全体が橙色に包まれ、夕日が空を赤く染め上げるその光景には、何も言葉が出なかった。

その夕日を前にして、

「どうだ、勇人。綺麗だろ？」

と父は訊いてきた。

僕はただ、うん、と頷いた。

「お前が悩んでいることは、バカバカしいことだ。父さんと母さんはお前が好きだから、仕事を辞めたんだ。だから、気にするな」

そう、はっきりと口にした。父の言葉に僕は黙ってることにした。なにかを口にするという行為が憚られた。

「ほらほら。この折角な風景を写真に撮ろう。一度綺麗な写真撮るとハマるぞー」

と僕の小さな手では明らか不釣り合いな一眼レフカメラが、渡される。

「ここをこうやってだな――」

一生懸命説明をしてくれるその横顔が、優しいその表情が、好きだった。

「――よし。押してみろ」

教えてもらった通りに操作して、シャッターを切る。

ピピッ、カシャ。

「懐かしいや……」

あの時撮った紅く染まった巫女寺市の写真は、勉強机に3段ある引き出しの一番下の段にしまっている、アルバムの一番最初に収められている。

不慣れということもあったが、小学生でまだ非力だったせいもあり、盛大にブレている。

父さんと一緒に撮った写真はあまり多くはない。

カメラを触り始めて、数ヵ月後に父さんは花の配達中に事故に遭って死んでしまったのだから。

ぺらぺらと当時撮った写真を眺めながら、僕は感傷に浸っていた。

「下手だね、コレ。フレアが酷いや」

ぶつぶつと呟き、自分の下手さ加減に呆れながらも写真達を眺め続ける。

アルバムのページを捲るうち、ある人物が写真に写っているのを発見した。

「あ、理衣」

理衣は小学生からの付き合いで、僕のクラスに理衣が転校してきたのが始まりだ。あの時通っていた巫女寺小学校がとても懐かしく感じる。

その写真の理衣は、とっても幼顔だった。三つ編みにした髪を垂らして、カメラに向かって恥ずかしそうにピースサインをしている。

「理衣……何でいなくなったんだよ……」

その写真に写されている人物が、唐突に愛おしくなってしまった。胸がきゅっと締め付けられて、一瞬思考が真っ白になってしまった。

理衣――。

アルバムの次のページを捲る手が止まる。これ以上は捲れない。もう過去に浸るのはやめよう。

明日だ。

明日の僕の行動を決めなきゃ。何をするべきか考えるんだ。ラストチャンスなんだ。

どうするべきか模索していると、ある事に思い至った。

「証拠が欲しければ現場に赴くしかない、か……」

現場。

それは――。

理衣の家、だ。

Scene 9 探索へ

本日は水曜日。

学校の授業が終わり部活動に勤しむ時刻へと突入する。

残念ながら本日も飛鳥ねえに話しかけることはたったの一度も出
来ず、彼女はそのまま荷物を持ってそそくさと何処かへ行ってしま
った。一緒に話をしようとするにもこの様子では、無理だ。やはり、
出雲さんに頼るしかないだろう。

飛鳥ねえに対して何か僕にも出来ることはないかと思案してみた
が、結局良い案は浮かばなかったのだ。飛鳥ねえの件は出雲さんに
任せるとして、僕は今日のこれからの行動を一応決めてはいる。

昨日の夜、悩んだ末に出した案だが、うまくいくかどうかはわか
らない。

が、するしかないだろう。僕に残された道はもともと少ないんだ。
躊躇している暇など一秒もないのだから、立ち止まっている余裕
なんてないのだから、突っ走るしかない。

只今、理衣と部室で二人きり。

飛鳥ねえは部活に来ず、出雲さんにはそんな飛鳥ねえを搜索させ
ているので、僕らが二人きりでいるのは必然なのだ。

静かな室内でちょこんと椅子に座って向かい合う二人。

「凜ちゃん、大丈夫なのかな……？」

理衣には、調子が悪いので出雲さんは休みだ、と伝えてある。

「心配はいらないです、って言ってたよ」

堂々と嘘を吐いちゃってる自分に嫌悪感を抱く僕。

「うん……それならいいけどね……」

仮病の（僕が嘘ついたわけで、出雲さんは悪くない）出雲さんに
心配を寄せる理衣の表情が目に入ると、またさらに深い嫌悪感を抱
いてしまう。

あー……理衣、ごめんね。

「じゃあ、勇人くん。今日は何するの？」と理衣は首を傾げた。

「うーん……」

しまった、先に質問されてしまった。

本当ならここで僕が「今日はこれからどうしようか」という話題を振り、僕が望む方へと徐々に話を路線変更していこうって思ってたのにな。

あー……。

なかなか言い出せない。自分で考えついたことなのに、やはり本人を前にするところも話に切り出しにくいのかと、悔んでしまう。というよりこんな勇氣のない自分が憎い。名前には「勇」って入ってるのに。

「ん？」

不思議そうに僕を見つめてくる理衣。

ああ、クソ。もうこうなったら自暴自棄になっちゃえ！

「あ、あのさ、理衣」

「うん。どうしたの？」

「こ、これからさ、理衣の家に遊びに行くこと出来る、かな？」
全体的に語調が弱いのが否めないが、それでも今だけは、言い切った自分を称賛したい。

「へ？」

突然のことに驚いた理衣は、目を点にしていた。まあ、当然の反応だろう。

「ほら、昔はよく一緒にお互いの家で遊んでたけどさ、中学生になっ
てからそういう機会が無くなり始めてさ――」

遊びに行く機会が無くなったのは僕が理衣のことを異性として意識し始めたからなんだけど。

「そ、それでさ、久々に理衣の家に行きたいなって思ってさ。お母さんとかにもしばらく会ってないしね」

理衣がぴくっと反応した気がした。

理衣は性格が優しいので、何かを頼むとあまり断れない子なのだ。だからといって決してそんな理衣の優しさに付け込んでるんじゃない、と声を大にして言う自信が僕には無かった。

正直言うと、理衣の性格に賭けた作戦のようなものだ。

今思うと、少し姑息な気がする。手段を選ぶ暇なんてないんだから仕方が無かったんだ、と自分に言い聞かせることにする。

「うん……」

思い悩んでいるようだった。そんな理衣の表情に見惚れている僕がいることは秘密です。

「ちよつと待っててね」と言って携帯電話を取りだした。

ちなみに部活メンバーで携帯電話を持っているのは理衣だけである。

飛鳥ねえと出雲さんにはしかる事情があり、僕は母のことを考えて遠慮したのだ。しかしこの頃の高校生で、4人中1人しか携帯電話を所持していないってのはなかなかお目にかかれないことだとは思う。

どうやら親と連絡を取っているようだ。

その細くて可憐な指でぽちぽちと携帯電話を操作している。

理衣が連絡をするときはいつもメールだった。親と電話をしている姿を見かけたことが無いことに気づくが、大したことじゃないなと思って、流した。

機械音が鳴った。返事が返ってきたらしい。

それを確認して理衣は、

「……勇人くん、来る？」と訊いてきた。

「いいの？」

「うん……勇人くんが来たいのなら、いいよ」

「あ、ありがとう」

良かった。断られて気まずい雰囲気になって鉛のような重い空気に押しつぶされていく自分を想像していただけに、僕の提案が受け入れられて本当に安心した。

道中、残念ながら会話はあまり弾まなかった。

こりゃあこの後が思いやられるぞ、と自分を後押ししながらも結局口から出る言葉はどうでもいい上辺の話ばかり。

僕の話に相槌を打って素直に聞いてくれている理衣に申し訳なくなっていました。

ああ、やっぱりニガテだ。

好きな女の子と淀みなく会話できるような能力を僕は持ち合わせていない。そんな自分が、好きじゃない。

理衣のマンションに到着する。

エントランスで理衣は鍵を取り出し、呼び出しのインターフォンの脇にある鍵穴に差し込みガチャリとまわす。すると重々しい外観で固く閉ざされていた門扉は、難なくすりと開いていく。

そのまま入口を通過し、エレベーターに乗り込む。

1から7と表記されたボタンから理衣は即座に5と書かれたボタンを押す。

エレベーターは少しも音もたてず静かに移動しており、これは本当に動いているのかと疑いたくなるほどにだった。

不意に、チン、という機械音と共に扉が開く。

エレベーターを出ると右に折れ、その廊下の突き当たりに理衣の家はある。「藤野」と表記された表札が扉にかかっていた。その光景が非常に懐かしく感じられた。

理衣の鍵で扉が開く。

「失礼します」

さあ、探索の開始だ――。

Scene 10 質問を

率直に言うと、来るべきでは無かったのかなと後悔していたりもする。

というのも、理衣の家にあがるとまず理衣の母親が「いらっしやい。懐かしいわね、中原君」とリビングの方から現れた。

これは想定内だ。

「お久しぶりです」とお辞儀をする。

理衣の母親とは面識もあったので、気軽に挨拶を交わすことができた。いつ見ても若々しい気がする。皺が目立たない外見もそうだが、一つ一つの所作に初々しさが感じられ、まるで新婚であるかのように錯覚させられる。

理衣とその母親は僕をリビングへと招いた。とりあえずお茶でも、と母親が提案したのだ。

そしてリビングに入ると、早速気になることが一つ。

リビングには食事をする際に使用するであろうと思われる木製のテーブルと椅子、向かい合う形で設置された座り心地のよさそうなソファ、備え付けられた液晶の薄型テレビ、ベランダと色の抑えたカーテンが目に入る。

そして座ったら、もふっと音を立てそうなソファに新聞を読みながら鎮座している人物がいた。

「今日ね、お父さんもいるんだ」

え、理衣、嘘だよね?!

「ふうー……」

トイレを理由にして、席をはずした。トイレの個室からも、遠くでかちゃかちゃと食器同士が擦れあっている音が聞こえる。恐らくお茶とケーキの用意をしているんだと思う。

まさか両親がいるとは思わなかった。少し気まずいな。

実を言うと理衣の父親に会ったことは無かった。

理衣の家に遊びに来た時に遭遇したことはなく、学校行事などへの出席はほとんど母親だけで、父親が来ているところを見たことは一度もなかった。そのことを理衣に訊ねても「ちょっとね」と曖昧にされるだけで、もしかしたら複雑な事情があるのではないかと考え、胸の内にその疑問をしまっていたのだが、長い時間かかったけどやっとその疑問の答えが出た。

理衣の父親は存在した。

ただ、その答えが出たのが今日って言うのもな……。

この年になって、彼女でもない異性の家にあがるって、どうなんだろう。あんましよろしくない様な気はするんだけどな……。

もともと重い空気から少し逃れたかったための口実だ。用は足りてないが水を流し、便所を後にする。

リビングに戻る前に家の中をよく見まわしてみる。

何か理衣が消えてしまう理由のヒントとなるものはないか。失礼とは思いながらも、閉まっている寝室の扉を音を立てないようにそろりと開いて、室内を舐めまわすように見る。ベッドのサイズを見る限り両親の寝室のようだ。

勝手ながら、寝室以外にも風呂場や洗面所、沓脱ぎなど隅々まで見回っていく。

まだ理衣の寝室が残っていたが、そろそろ戻らないと怪しまれると思い、後ろ髪引かれる思いでリビングへと踵を返した。

食卓につき、理衣の母親が偶然にも調達してきたというショートケーキを僕と理衣は二人で、向かい合って座りながら咀嚼する。その間も僕は念入りにリビング内を見回して気になる点を探した。

そんな僕を不思議がって、

「どうしたの、勇人くん」と理衣は訊ねてきた。

「あ、ううん、なんでも」と僕は首を横に振る。

調べた結果、残念ながらこれといった収穫はなかった。ただ、こ

の家の中はずいぶんと整っていた。物が少ないからだろうか、何処を見るにしても綺麗に整理されていたように思う。特に両親の寝室なんかはそうで、あまりにも物が無さ過ぎて生活感が見受けられない、と思ってしまう自分がいた。いや、まあ、大きなクローゼットがあったし、無駄なものは綺麗に仕舞われてるんだろうと思うけどね。

皿の上のケーキを食べ終えると、

「どう、中原君、おいしかった？」と理衣の母親が訊いてきた。

「はい、おばさん。ありがとうございます。おいしかったです」

「それは良かった。偶然買っておいたのが役に立ったわね」

理衣の母親が僕のお皿を下げてくれる。

「あ、すみません。僕が――」

「いいのいいの、気にしないで」と理衣のお皿も同時にシンクに運んでいく。

申し訳なさに理衣の母親の背中を見送る。

……。折角遊びに来ているんだし何か話しかけなきゃな、と考え込む。

目の前の理衣がお茶をちょびちょび飲んでおり、そんな仕草に見惚れてしまうが、駄目だ駄目だ。とりあえず、僕が家から持ってきた話の種を出すことにしよう。

「あのさ、昨日これを久々に見て懐かしんでただけど……」

ガサゴソと学校鞆の中から一冊の本を取り出す。

それは、昨日の夜、僕が眺めていたアルバムだった。

理衣が興味を示してくれて、僕の向かいから隣の席に座ってきた。

「アルバム……？」

「そう。一番最初に埋めたアルバム。だからちよっと下手っぴだけれどね」とページを捲りながら言う。

そして理衣が、あ、と声を発した。

そこにはカメラに向かって俯きがちにピースをする理衣が写っていた。

「あら、理衣じゃない。小さいわねー」

いつの間にか理衣の母親も僕の近くに寄ってきていた。

理衣は小さい頃の自分の写真を見られるのが恥ずかしいのか、顔を紅潮させて、あーあー、と僕と自分の母親の前で両腕を振って僕らの視界を妨害し、しまいにはアルバムの上に覆いかぶさってしまった。

「ああ、ちょ、理衣ー。それじゃ、写真が見れないよ」イジワルめいた声で僕は言う。

「み、見なくていいよ……!」

「理衣の小さい頃の写真、もっと見たいわ」と理衣の母親もワルノリしてくれた。

僕らが騒がしくしているので、ソファに座っていた理衣の父親はこちらが気になったらしく、ちらちらと横目で確認してきていた。が、すぐに視線を新聞に戻した。と思ったら既に新聞は読み終えたらしく、何やら難しそうな内容の文庫本を読んでいる。

そのタイトルがちらっと目に入った。「ISP細胞の真実と革新」いやはや、僕が一生懸けても読まなそうな本の名前だな。

どうにか理衣を説得して、僕と理衣と理衣の母親の3人でアルバムの写真を吟味していった。

そういえば中原君の写真はないのね、と理衣の母親に言われて気付いたのだが確かに僕自身の写真は少ない。撮影者が僕なのだから仕方が無いんだけどね。

逆に言うといつも一緒にいた理衣の写真は多かった。理衣の写真が現れるたびに彼女が頬を紅く染める姿にはちょっとした優越感を覚えてしまう。この優越感は、小学生が好きな子をからかいたくなる気持ちと同じなんだろうなと思ってしまい……。僕はまだまだ幼いらしい。

アルバムの最後のページを捲り、一通り見終わると、

「なんで、これ持ってきたの、勇人くん!」と拗ね気味の理衣が

頬を膨らませる。

「面白いかなと思って」我ながら卑しいニヤつき方で口を歪ませてる気がする。

「実際、おもしろかったわよ」と理衣の母親は微笑む。

うん、楽しい時間を過ごせた気がする。ただ、僕の目的は楽しむことじゃなくて、理衣が消える原因を探すことだったんだけどな。まあ、だけど、悪い時間ではなかった。

本来の目的を思い出して、再び部屋の中を見回す。

「そういえば」と、あることに気が付いた。たぶんこれは、先ほどまで写真を眺めていたから気付いたのかもしれない。

「そういえばこの家、写真、ありませんね？ 家族写真とか飾ってないんですか？」

これには偶然気が付いた。

僕の家にも家族写真は飾ってある。父が生きている時の大事な思い出でもある家族写真は、写真立てに入れて綺麗に飾られていた。他にも僕が中学生に入学する時の記念写真など、母が色々と飾っていたことも思い出す。

僕の質問で、空気が変わった気がした。

リビング内の雰囲気が一瞬にしてぴりっと緊迫したものになった。理衣の母親はびくっと反応して目を大きく見開き、父親はこちらを睨みつけている。理衣は何も言わずに、暗い表情でうつむいていた。静かだった。

先ほどまで和気藹々とアルバムを眺めて談笑した空間だとは少しも思えなかった。

これは、核心をついた質問、なのか……？

S c e n e .. 1 1 理衣が（前書き）

遅くなって、すみません……

Scene 11 理衣が

あの凍りついてしまった雰囲気は、なんだったんだろう。

結局僕がああ質問をした後は、理衣と一言二言だけ言葉を交わして、その家を出た、というより追い出されたに近いのかもしれない。

理衣の母親の形相と、父親の睨みがまだ頭から離れない。理衣の暗い表情も引かかる。

さほど重要な質問をしたわけではなかったんだけど、あそこまでガラッと空気が変わるということは、タブーな質問だったんだろうか。

何とも言えない。

あれこれ考えながら、僕は車道脇の広めの歩道を一人でとぼとぼ歩いていた。あちらこちらで、環境のためにとうたわれて植えられた植物が意識しなくとも目に触れる。

「あー……」

今は夏、陽が落ちるまでの時間は4つの季節の中で最も長い。うだる様な熱が外気を支配していたので、暑苦しくて呼吸しにくかった。

理衣の家は冷房がきいてとても快適で汗とは無縁の環境だったのだが、今では額からだらだらと汗が噴き出している。車道を走る車はどれも窓が閉まっており、その中のはがんに冷房を利かしているのだらうなと思ってしまうと、羨ましげにその運転手たちを目で追ってしまう自分がいた。

「やっぱり、制服は暑いや……」

夏服の襟部分を指でつかみ、ぱたぱたと煽る。脚をすっぽりと隠してしまうスラックスが鬱陶しく感じる。

陽が真上にあるわけでもないのにここまで暑いとは、太陽もなかなかのものだ、と今更ながらに感心した後呆れる。

コンビニの前を通る際に中から人が出てきたために自動ドアが開

き、冷気が外に押し出されてきた。す、涼しい……！

ちらっと目にとまったコンビニ内の時計の短針が4と5の間を指している。

コンビニによって涼もうかと思ったのだが、もう少し経てば部活を終えて、帰宅する生徒の姿が嫌でも嫌でも目に入ってくる時間だ。

「帰るか……」

人が多い道は、残念ながらあまり好きではないし、ただでさえこの気温なので、もっと暑苦しい思いをするのは避けたかった。

そのままコンビニをスルーする。

「あー……暑い……」亡霊のようなかすれた声をだしながら、恨めしそうに空を見上げる。

いつも写真部メンバーがふた手に分かれるY字路にたどり着き、自分の家の方へと続く道に曲がる。

立ち並ぶ家々の塀を何をするでもなくじっと眺めながら歩いていると、道の先に見知った姿が確認できた。

「出雲さん！」

大声を出して呼びつつ、早足で出雲さんに近づいていく。

「あ、勇人先輩」

呼ばれて振り向いた出雲さんの息は穏やかで、汗一つかいていなかった。彼女の周りだけは涼しいのだろうかと思ってしまうほどだったが、近寄ったところ決してそのようなことはなかった。

「どうだった？ 飛鳥ねえは見つかった？」

「いや、まだです……」悔しそうに俯く出雲さん。

「これだけ広い街なんだから、仕方ないよ。もしかしたら電車とかに乗って隣の市に行ってるかもしれないし、出雲さんのせいじゃないよ」

いろいろと言葉を並び立てて出雲さんを励ますものの、内心では結構焦っていた。ただ、僕から頼んでおいて焦らせるのも失礼だから、顔には出さないようにする。

「あの、飛鳥先輩以外のことで一つ気になることがあったんですけど……」

「うん、どうしたの？」

「今日、勇人先輩は理衣先輩の家に行っただけですよ。」

「そうだけど、それが？」

「実はつい先ほど、偶然ですけど理衣先輩を見つけたんです」

「え？」

理衣を？　僕が追い出された後、理衣はすぐに出かけたってことか？

「赤信号で停まっていた車の一つに理衣先輩が乗っていたんです」
出雲さんは、飛鳥ねえを探している最中、偶然にも理衣の乗る車を見つけたという。中に同乗していたのは運転手と理衣を合わせて3人だったらしい。もう一人は女性らしく、出雲さんの話を聞く限りでは、理衣の母親だろうとおもった。

では家族で出かけたのか？

しかし、運転手は黒いスーツで身を纏い、サングラスで目元を隠していたという。それは飛鳥ねえを強引に連れ去らった連中と、風貌が合致していた。

さっき理衣の家で見たあの父親は、いったいどこへ行ったのか？
謎が深まるばかりだ。

「それですね、あたしが気になったのは――」

出雲さんは自らを透かして行動していた。それは出雲さんにはいかなる障壁も存在しないということだが、また誰にも知覚されない存在になるということだ。出雲さんは理衣のことが気になり、その車の中に自分の頭を入れた、と言う。

そして、その時に目撃したのは――、

「理衣先輩、泣いてました……」

涙を流していた理衣だ、と言う。

「すみません……。明日は、駅とかをまわって探してみます」

「ありがとう、出雲さん」

「いえ、あたしが役に立てると言えばこれ位のことしか出来ませんし……」

「そんなことないよ」と否定したが、出雲さんは俯いたままだった。

何か声をかけなければ。

「出雲さんの写真、僕は好きだよ」

「あ、あたしの写真なんてそんな……」

「謙遜しない！」と諭すように言う。

「え、あ、はい！」何故か敬礼のポーズをとる出雲さん。手をびしっと伸ばして額に付けるその姿が滑稽で、僕は思わずくすっと笑ってしまう。

「あー、笑いましたー！！ ひどいですー！」

「ごめんごめん、あまりにも似合わなさすぎたからさ」

「むー！ ひどいです！」ぷくっと頬を膨らました。

こんな他愛もない会話が出来る日々が、不変の真理として、いつまでも続いていく日常となればいいのに、と考えてしまうのはいけないことなのかな。

冷房を利用した自分の部屋のベッドの上で大の字になって天井を見据える。

ぼーっと頭をクリアにして、ただひたすらに天井を見上げていると、先ほど出雲さんが言っていたことが脳裏をよぎる。

理衣先輩、泣いていました、か……。

その姿を想像しただけでも心が千本の針で刺されているかのようにチクリチクリと痛む。

僕はいままで理衣が泣いているところを目撃したことはない。心優しくて静かな子だけど、芯は強かったのでそういう弱みを見せたりはしなかったのだ。

そんな理衣が泣いている。

僕はなんだかやるせない気持ちになってしまった。

明日はとうなるんだろうか。飛鳥ねえは、理衣は、僕の死んだ時^せ間^{かい}ではきちんと登校していた。けどなんだか、不安だ。

バタフライ効果^{エフェクト}という言葉を考えて出した。

僕が起こした行動は蝶の羽ばたきなんて軽いものではなく、もつと重度な干渉だ。だから一度僕が経験した通りに世界は動いて行かなくなるだろう。

だから、そろそろ僕の経験した時間^{せかい}に頼るのは難しくなってくるかもしれない。けど、理衣には学校に来てもらわなきゃ困る。じゃないと、理衣がいなくなってしまうのを止めることも、その原因を探ることも出来なくなってしまう。

「理衣……学校、来るよね……」

か細い呟き声に僕の弱さが滲み出ていた。

Scene..12 作戦を（前書き）

いよいよ、核心に近いづいてきました。
書いている僕もハラハラですW

Scene 12 作戦を

太陽が月に入れ替わり、空は一旦黒く塗りつぶされていったかと思うと、またすぐに空は青く澄み渡っていく。水曜日から、木曜日になった。

結局、あまり眠ることは出来なかった。昨日のことが引っかかって、思考の闇に埋もれてしまい、ベッドの上でじたばたと動き回った末、気がついた時にはカーテンの隙間から陽光が部屋の中に差しこんでいた。

起きて一階に降り、用意された朝食に手をつける。

眠いのと頭がいっぱいので、黙々とただ食べ物を胃に押し込んでいた。食事がただの作業となりつつある。

淡々と支度を済ませ、学校へと向かう。たとえ眠くても、父の遺影に向かったの挨拶はもちろん忘れずに行った。

教室内は幸いにも冷房が既についており、学校に到着したばかりの僕にとっては嬉しい限りだった。

汗を拭って、一番最初に確認した飛鳥ねえと理衣の席には、しかし残念ながら二人の姿はなかった。それを知った瞬間に、心臓がはねて不安が一気に高まった。

自分の席につき、静かに考え始めたことは、やはり二人の安否だった。あれこれと二人のことについて考えていると、しまいには嫌な想像までもが脳に浮上してきて、どうにかそんな妄想を払拭ふっしょくしようとして手持ちのカメラをいじってはみるものの、気持ちは収まりそうになかった。

そわそわとして、二人を待ち続けていると、クラスメイトに「最近、朝の中原君、顔が怖いよ。なんかあったの?」とまた心配をかけられてしまった。

「ううん、大丈夫。心配してくれてありがとう」と問題ないフリを

してみせるけれども、心中は穏やかではなかった。どうしても二人が気にかかってしまうのだ。

黒板の上に設置されたシンプルな丸い形のアナログ時計を見つめる。秒針が進むさまをひたすらに見ていた。

結果から言えば、僕の心配は杞憂に終わった。

二人はまた授業開始ぎりぎりに教室に入ってきたのだ。飛鳥ねえはそのまますたっと自分の席につき、僕と席が近い理衣は「おはよう、勇人くん」と挨拶をしてから、椅子に座った。

昨日の理衣の家で最後に感じた緊迫した空気と冷やかな雰囲気、また出雲さんから聞いた理衣の涙が、僕の頭の中でぐるぐると渦を巻いて、僕はひよっとしたら理衣との関係になにか不和が生じてしまったのかもしれないと心配していたのだが、それも杞憂に終わってくれた。

理衣は、いつもと変わらず、僕に微笑むようにして話しかけてくれたのだ。そのことは大いに僕を安心させた。

けど飛鳥ねえは例のごとく、僕を敬遠していた。

そんな飛鳥ねえを見て僕は用事を思い出し、昼休み、昼食を摂取し終えると、屋上へと向かった。事が事なので、一緒に飯を食べた理衣を連れては行かない。

屋上の重々しい扉を開くと、大きな音と共に一陣の風がふわっと僕に吹きつけてきた。

夏の屋上はあまり人気スポットではない。かんかん照りの太陽に自ら当たりに行こうとするモノ好きは少ないのだ。しかし、風が強い日の給水タンクによってつくられた日陰に居座るのは結構快適なものだった。

僕は日陰に入り、静かに、

「出雲さん、いる？」

と声をかけてみた。

すると、ずっと僕の横にその小柄な体が現れた。その現れる瞬間は、なんとも不思議なもので、今まで見えていなかったものが突然

知覚できるようになった、そんな奇妙な感覚だった。

「どうしましたか、勇人先輩？」

「ちょっと、いろいろと話したかったんだ。突然呼んじゃってごめんね」

「あ、いえ、いいんです。どうせ暇してたんで——はうっ！」

風が僕ら二人を撫でていく。出雲さんは舞いあがろうとする制服のスカートを両手で押さえるので必死になっていた。

とても心地よい風だった。屋上のむき出しのコンクリートたちはじわじわと吸収した熱を放射していたので、見ているだけで暑く感じるのだが、日陰はむしろ涼しいものだった。このように風の恩恵を肌で目一杯受けることが出来る場所だった。

僕らはゆっくりと、今日の放課後のことについて話し合った。

「昨日は正門で待ってたんですけど、飛鳥先輩は出てこなかったんです」

出雲さんは、自分の正体を知っている人（僕以外にはいない）の前以外では、突然姿を現すということは出来ないといった。だから正々堂々と姿を現して、校門で待ち伏せていたが、なんと飛鳥ねえは出てこなかったという。

「じゃあ、飛鳥ねえはずっと学校にいたってこと？ でも昨日僕が理衣の家へ行くために、部活終了時刻よりもずっと早い時間だったけど、そのときには飛鳥ねえの上履きがあったから、おそらく街に出てったと思うんだけど……」

「あたしもよくわかりません。ただもしかしたら、正門を避けて違うところから抜け出したのかもしれないです。ほら、裏門とか——」

「そうだとしても、なんでそんな面倒なことを……？」

「さあ？ 校門から出られない様な原因でもあるんでしょうか？」
原因？ なんだらうか。見当がつかない。ただ飛鳥ねえが、裏門や学校の塀をよじ登って学校の敷地から出ようとする姿を想像するのは容易だった。飛鳥ねえは持ち得た運動神経を生かして、とても

アグレッシブに動く人なのだ。

しかし、やはり正門から帰ろうとしない飛鳥ねえの行動原理は意味不明だった。

「とりあえず、今日は正門じゃなくて、他の出口で待ち伏せてみます。それでダメでしたら、昨日のように街をまわります。駅の方も重点的に見てみますね」

「あ、ありがとう」

軽い作戦会議も終え、僕は教室へ帰ることにした。

「ごめんね、出雲さん」

「気にしないでください。あたしは全然大丈夫なんで」
ここで5時限目開始の予鈴がなった。

「ほら、先輩！ 授業始まっちゃいますよ！」

背中をとんとと出雲さんに押された。

「あ、うん」

微笑む出雲さんを背に、僕は教室へと戻った。

正直、今日の部活動はどうしようか迷った。どうせ部活メンバーは僕と理衣の二人だけ。写真を撮ろうとしても、出雲さんが飛鳥ねえを探索していることが気にかかって、どうしても何かを撮影しようという気持ちにはなれないのだ。

理衣にも部活のことを相談すると、「勇人くんに任せるよ」と言ったので、結局、今日の部活動はナシという形を取った。ただ流石に、理衣は僕の写真に対する意欲の減少に気づいて「具合、悪いの？」と心配をされてしまった。

あまり理衣を怪しませるのも得策ではないと気付いて、部活をしないと宣言したことには後悔したが、もう仕方が無いので、とりあえず、大丈夫だよ、と言ってその場をしのぐことにした。

理衣が今日は暇だと言うので、涼みがてらにファーストフード店で何か食べていくか、と提案したところ、意外にもOKをもらったので、二人でその店に入ることにした。

全国にチェーン展開がなされているファーストフード店だけあって、内装は凝っていたし、広々とした店内で雰囲気も悪くはなかった。

コーラを飲みポテトを齧りながら、僕らは談笑した。

店内の客の数が多くも少なくもない適度な人数だったので、気兼ねなく会話することが出来た。

しばらくして、理衣が手洗いに席を立った。

1人取り残されて、所在なさげに目線を動かしていると、窓の外に見知った姿があった。しかも、その人物も僕に気づいて、こっちを見つめてきた。その表情はとても険しく、しかも口を大きく動かして、何かをこちらに伝えようとしているのがわかった。

僕はさっと席を立て、理衣に注意を払いながらも店を出た。その人物がばたばたと僕に駆け寄ってくる。

「ゆ、勇人先輩！」

「どうしたの出雲さん、そんなに急いで」

「あ、あ、あああ、飛鳥先輩を確保しました！」

Scene 13 背筋が

「あ、あ、あああ、飛鳥先輩を確保しました！」

出雲さんの急ぎ様と突然のことに驚いて即座に理解出来ていない僕を見た出雲さんは、少しいらついたのか、顔を赤くしてまくしたてるように、

「ですから、飛鳥先輩をつかまえたんですよっ！」と言った。

「ほ、本当に?!」

「本当ですよっ！ 嘘なんてつきませんっ！」

ひ、一息ついて落ち着こう。

スー……、ハー……。

よし。

「飛鳥ねえはいま何処にいるの？」

「今は駅前の噴水公園のベンチで座って待っていてくれます」

駅前の噴水公園。そこは僕が出雲さんに飛鳥ねえを探して捕まえるお願いをするためにと、落ち着いて話すことのできる場だと思って選んだところだ。そして今、その公園で飛鳥ねえは待っていてくれるという。

しかし、こんなにもあっさりと飛鳥ねえを捕まえられたことに、少し違和感を覚えた。飛鳥ねえとこんなにも容易に逢う手筈が済むのなら、なぜ学校で彼女は僕を徹底的に避けようとしたのか、その疑問に説明がつかない。

「それですね、勇人先輩。実は、逢って話すためには一つ条件があるらしいんです」

だから出雲さんの口から出てきた「条件」ということについては、ある程度予想していた。何か異なったアクションが無ければ飛鳥ねえとすんなり逢うことなんて出来ない、と僕は勝手に思考していたのだが、やはりその通りだった。

「……どんな条件だっ？」

「それが――」

一旦言葉を止めて、静かに言った。

「理衣先輩を、連れて来てはいけない、と言っていました……」

その語調がとても寂しそうだったのが、とても印象に残った。誰かを省く、という行為が出雲さんを悲しそうな顔にさせている。ましてや僕らには、ほんの数日前までしゃべりあって共に笑いあうという、なんの歪みもない友情が、確かにあったはずなのだ。

なのに現状はこんなになっている。

辟易している。

吐き気がする。

嫌悪している。

頭痛がする。

「理衣を？」

「はい……」

相変わらず出雲さんの口調は重くて暗く、まるで鉛のようだった。理衣を連れてはいけない理由は未だ判然としないが、僕の視界の外で理衣と飛鳥ねえの間に何かがあったということは推測できる。

僕が追跡していた飛鳥ねえが黒服の何者かに連れ去られたあの日、理衣も忽然と姿を消していた。

「理衣と飛鳥ねえには一体何が……」

「あたしにも、よく分かりません。なんで、理衣先輩を除いて話し合わなければいけないのでしょうか？」

「僕にもわからない。理衣がいるとダメなのは――」

一つのこと集中していると、周りが見えなくなるのは僕の悪い癖だ。カメラを手に持つと周囲の音が聞こえてこなくなってしまうように、出雲さんとの会話に心を傾けていたので、ついつい警戒を怠ってしまったことがあった。

肩にぽん、と細くて淡い雪のように白い手が置かれた。

「勇人くん？」

総毛立った。全身から血が引いていくのがわかる。

だって後ろにいるのは――、

「理衣」

「勇人くん、店内からいきなりいなくなったから、びっくりするよ、もう。あ、凜ちゃん。具合の方は大丈夫なの？ 風邪気味だっ
てきいていたけど……」

「あ、はい、理衣先輩。今は、全然大丈夫です。ばっちり治りましたよ。あはは。ほんと、風邪って困りますよね」

取り繕うかのように喋りだす出雲さんが、傍から見たらなんとも不自然だった。

「そっか。よかった。2日間部活を休んでたから心配したよ、凜ちゃん」

「あはは、全然心配ご無用です！」

「うん、そのようだね。あ、勇人くん、これ。店内に置きっぱなしだったでしょ」

「ああ、うん」

僕の荷物を手渡してきた理衣。

僕は、静かに考え込んでしまっていた。さっきの会話で少し違和感を覚えたから、だ。理衣は、出雲さんのことを「2日間休んで心配」と言ったのだが、それ以上に部活に来ていない飛鳥ねえのことについて、理衣は話しの論点にしたことが無かった。出雲さんが心配ということは度々聞いていたのに、飛鳥ねえのことについては何も聞かない。意図的なのだろうか？

「それとさ、さっき、凜ちゃんと勇人くんは何を話してたの？」

「え、いや、別になにも……」

「そう。でも、ちらっと私の名前が聞こえた気がしたんだけどな」
僕の今の顔はどんな表情をしているのだろう。おそらく緊張と緊迫で引きつっているに違いない。その証拠に、出雲さんは引きつった笑みで目を丸くしていた。今がヤバイ状況だということを顔に出さないように努力はしているが、耳の内では、理衣の言葉が反芻されていて、心はぐらぐらと動揺していた。

「それはたぶん聞き間違いですよ理衣先輩」

「……そっか。うん、そうだね。凜ちゃんがそう言うのなら、私の聞き間違いかもしれない」

くっ！ さっきから心臓がバクバクと波打って止まらない。このハラハラする会話と状況を早く打開したい！

「あ、あのさ理衣」

「何？ 勇人くん」

「僕さ、用事が出来ちゃったから、ここでお別れでもいいかな？」
え、と目を泳がせて逡巡している理衣。それを目にして僕はとても哀しい気持ちになった。

僕とここで別れる、ということについて理衣は迷ってくれているのだ。それはとても嬉しいことのはずなのだが、理衣を連れていけないがために「用事」だなんていう曖昧な言い訳をしている自分が嫌いで、無性に腹が立った。決していい気分にはなれない。

「……うん、わかった。用事があるんだったら仕方が無いよ」

「ありがとう、理衣……」

承諾してくれた優しい理衣。

「じゃあ、私、帰るね」

「うん、おつかれ」

「おつかれさまです」

理衣が僕らから離れていく。数メートルほど歩いて突然、立ち止まったかと思うと、くると僕の方を向いて、

「今日は……楽しかったよ！」と微笑みながら言った。

そんな理衣の優しさと言葉によって、僕は彼女を直視することが出来なくて、視線を逸らして手を振った。

そんな言葉と表情は、反則的だよ。

胸が、痛い……。

理衣と別れて、出雲さんと共に飛鳥ねえのいる公園に向けて並んで歩く。

太陽は傾きつつあり、歩道には帰宅途中の生徒がよく目に触れた。暑苦しい空気のなかを、人々が機械的に歩いている。中には自転車に乗っている人もいる。ウォークマンを聴きながら自転車を運転している人がいて危なっかしい。

無言でただ歩いていると、出雲さん横からちらちらと僕のことを窺っていることがわかった。

「さっきの、理衣先輩のことなんですけど――」

「お願い、何も言わないで」

「え、すみません……」と俯いた。

ごめんだけど、今は理衣のことには触れないでほしい。僕は今にも泣きそうなんだから。

公園につくと、巨大な噴水のあるあたりへと足を運ぶ。

そしてその後ろ姿を見つけた。

漆でも塗ったかのような純粋な黒の長い髪が、後ろで一つに束ねられている。

噴水を囲むように円の陣形で並べられた幾つかのベンチの一つ、そこにその人物は誰も寄せ付けないがごとく独りで座っていた。

その人こそが、僕の探していた人物。

「飛鳥ねえ!!」

後ろ姿にそう呼びかける。

すると、その長い黒髪を風になびかせて、彼女は振り向いた。

「勇人……」

物憂げで、悲しげで、儚げな表情だった。

S c e n e : 1 4 真実へ(前書き)

来ました来ましたー！
ついにここまで来ましたー！！

Scene 14 真実へ

極小な水の粒を振りまきながら、目の前の巨大な噴水は水を豪快に空高く垂直に打ち上げた。その水の恩恵を受けて、夏だというのに、この噴水の周囲はほんのりと涼しい。

「約束通り、理衣は連れて来ていないよ」

そう告げて僕は飛鳥ねえの隣に座る。一緒にいた出雲さんは、僕とは反対側の飛鳥ねえの隣、つまり僕と出雲さんで飛鳥ねえを挟むようにして、座った。

僕ら以外にベンチに腰掛けている人の姿は少なかった。

唯一確認出来た人の姿と言えば、この大きな噴水の向こう側に見えるベンチに、くたびれたスーツ姿の年老いた男性が哀愁漂わせて座っていること。故に、公園内はやけに静かで、風で木々がこすれ合う音や噴水の音以外には際立った音は聞こえてこない。

陽はまだ完全に沈んではいないのだが、空が徐々に光を失いつつあったのには気付いた。でも、そんなことは遠い世界のことにように思えてしまう。

3人かたまって座ったは良いものの、誰も口を開こうとはしなかった。

何かを口に出したら、瞬時に何か壊れていくような、そんな不安定な不確かなバランスの上にいる様なものだった。

飛鳥ねえが喋ろうとしないのなら僕から語った方がいいのかなと思ひ、何からどう話そうかと頭の中で言葉を整理していた時だった。

「勇人、怒ってる……？」

真剣な面持ちで僕の方を見つめてきた。

「僕は、怒ってなんかいないよ。ただ、分からないんだ。飛鳥ねえが、なんであそこまで必死に僕を避けようとするのか分からないんだ。僕は、何かしたかな？ それとも――」

「違う！ 勇人は別に何も悪いことはしてない！」

「じゃあ、なんで僕から逃げたの？」

「私だって勇人と話したかったよ！　けど、ダメなんだ」諦観した口調で飛鳥ねえは言った。

「どうして？」

「それは……」と言葉を止める飛鳥ねえ。

どうして、そこで言葉が詰まるんだよお……。

何か言ってくれないと、分からないじゃないか！

心の中でどれだけ叫ぼうと、僕の意味が伝わるはずもなく、飛鳥ねえは再びだんまりと静寂に身を任せてしまった。

これでは埒が明かないと思い、僕は打ち明ける覚悟をした。

「このままだとね、全てが哀しいままに終わるんだよ……。僕は知ってるんだ……」

その言葉の意味がよく分からなかったのだろうか、飛鳥ねえは恐る恐る僕の方を向いて、「……どうということ？」と訊ねた。

出雲さんの顔がちらっと目に入った。「遂に打ち明けるのですね」とでも言いたげな表情だった。

出雲さんには僕が経験したことを既に克明に教えている。皆がいなくなってしまうことやその後の苦しみ、出雲さんの正体について、そしてもちろん、飛鳥ねえの正体も。

物々しさを帯びているデジタルの腕時計が飛鳥ねえの左腕についていることを確認した。

「飛鳥ねえはさ、ここ時間軸にいられる時間が限られているんですよ」

「……お前は一体何を言っ……？」

「来週の火曜日、つまり5日後にある終業式の日までしか、飛鳥ねえはここにすることが出来ないんだ」

飛鳥ねえは、はっとした表情になった。そこには驚愕の色が窺えた。

「勇人？　もしかして、お前も未来から……」

「僕はこの時間軸を1周したんだ。そして分かってしまった。僕

は何も知らず、終業式の日突然皆がいなくなってしまったんだ。そして、一番最初に姿を消したのは飛鳥ねえ、君だよ」

一拍置いて、緊張感を持って、静かに、厳かに、言う。

「飛鳥ねえは、未来からやってきた過去への遡行者。これに間違いはないよね」

僕が今生きているこの時代の日本は「機械依存社会の初期状態」オートマ・ンサエティと言われているという。極端な機械への依存、それが始まったのがこの時代だという。ロボットやアンドロイドの開発、ハイテクに頼り切った日常生活が僕らを待っており、それらは裕福さを現すのと同時に人々の怠惰の象徴である、と僕が死んだ時間せかいの飛鳥ねえは言っていた。

この時代の社会をについて深く学ぶため、飛鳥ねえは時間遡行が可能となった未来から跳んできたのだと言った。

こんな話を聞いた時、最初は飛鳥ねえが何を言っているのかをすぐに理解することはとても難しかった。話があまりにもとっぴすぎて現実味が無かったからだ。

確かに、ロボットの開発は進んでるし、テレビやエアコンなどの家電製品も日に日に進歩しているのは知っている。

だからといって空想じみた話を鵜呑みに出来るほど、僕の頭はメルヘンではない。高校生なのだ。残念ながら疑ってしまったのが事実。

飛鳥ねえは過去への「留学生」として選ばれ、一定期間過去へ留まることが許された。そしてその期間の終了が、終業式の日。

飛鳥ねえにはタイムリミットが存在するというのは、こういうことなのだ。

終業式のある5日後、午後3時に飛鳥ねえは未来へと強制的に帰される。現に、女には似合わない黒くてでかい腕時計が飛鳥ねえの腕につけられている。これは、未来への帰還の足掛けになるという。以上が未来に帰る寸前の飛鳥ねえが、遺言のようにして僕に話し

てくれた内容だ。

僕が経験したあの苦い時間を全て話した。

飛鳥ねえが未来に帰った後、出雲さんはこの世にとどまることが出来なくて消失してしまったこと、理衣が何も言わずに僕の前から姿を消したこと。

全部伝えた。全部全部、本当に全部、話した。

喉がからからに乾いて、涙が溢れそうになって、胸がはち切れそうそうなほど痛くても、僕は一心不乱に言葉を放っている。

飛鳥ねえに事情を打ち明けたら、何かが変わると期待しているのだ。だってそうだろう？　僕が経験した時間では、僕は何の行動も起こさなかったんだ。

でも今回は違う。日常が続かないと知っているのから僕はこんなにも必死に足掻いて、もがいているのだ。

変わってほしい。いや、変わる！

何かが変わる。

何が変わるかは分からないけど、この行動が良い方向へと進むための一步になっていると僕は信じているんだ。

話し終えていた頃には、僕の手は震えていた。熱がこもり過ぎて、感極まってしまったようだ。

そんな僕の手を、飛鳥ねえは優しく自らの両手で包みこんでくれた。その肌の温もりが、とても懐かしくて心地よかったのかもしれない。揺れていた心が、少しずつ落ち着いていくのがわかった。

飛鳥ねえは瞼を閉じて、深呼吸をした。背筋をぴんと張って、静かに息を吸って、吐いた。

「勇人には悪いことをしてしまったな」

覚悟を決めたかのように、僕の手をぎゅっと力強く握った。

「私が何故勇人との接触を避けたか、その理由を教えるよ」

唾を仰々しく飲み込んだせいで、ごくりと音がしてしまった。

「理衣に禁止されていたんだよ」

……今なんて――？

「理衣、に？」

「そうだ。だから理衣のいる前で勇人に近づくことは出来なかった。勇人は気付いていないかもしれないが、勇人が私に近づこうとして来たいかなる時も、理衣は私のことを監視していた。まるで別人のような怖い目つきで、私のことを見ていたんだ。『近づいてはいけない』とその眼で訴えていた」

「でも、どうして理衣は、飛鳥ねえが僕に近づいてはいけないと言ったんだ」

「……それはな、私が理衣の秘密を知ってしまったからだよ」

S c e n e : 1 4 真実へ（後書き）

この次の話は、僕が一番書きたかったシーンです。
乞うご期待です！

Scene 15 崩壊す

理衣の秘密。それはこの時間を一周している僕でさえも掴めなかった真実、否、答えた。

だから理衣が何故消えたのか僕にはまだ見当もついていない。

そして今、飛鳥ねえはその口で「理衣の秘密」と言ったのだ。これはまさしく僕が望んでいたことだった。目の前に答えがある、そう考えただけで気持ちを押さえつけるのが難しくなってしまった。早く知りたい、そう思った。

「その『理衣の秘密』っていうのを、訊いてもいいかな？」

ぷしゅーっと目の前の噴水の中央から、まるで一本の糸のようになった水が宙に向けて豪快に打ち放たれた。それに次いで中央の台座の縁に開いた十数個の穴から、追いかけてこのように順々に水が放射されていく。

風によって煽られた水が僕の頬に飛び散ってきて、冷たい。

出雲さんは固唾を飲んで、静かに飛鳥ねえを見つめていた。

僕も同様にして飛鳥ねえに視線を向ける。

「勇人は、この街にある大都生物科学研究所だいとを知っているか？」

「うん、一応知ってるけど……」

大都生物科学研究所はこの街が構造改革特区に指定された後に出来た施設であり、設立されたのは僕が生まれるよりも3、4年前の話である。この街の他の建物に比べるととてもシンプルで無駄のない造りから荘厳さを感じられ、それ故に僕の記憶の中にその施設のことはきっかりと残っている。

「その研究所がどうかしたの？」

「……その研究所で、どんな研究が行われているか知ってるか？ うーん、と唸りながらしばらく記憶からいろいろと引っ張り出してみると、つい先日、朝食を摂っている時に偶然見たテレビの番組を思い出した。」

「確か……遺伝子を組み換えた植物とかそのあたりの研究だったと思う」

「……うん、そう。遺伝子だ。その研究所では遺伝子についての研究を主としている。あそこは生物学と銘打った遺伝子工学研究所なんだ。そして、その研究所ではな、決してやってはいけない禁忌に手を伸ばしてしまったんだよ……」

日常ではあまり聞き慣れない「禁忌」という単語が重々しい余韻を背負っていた。谷のように深い心の奥底にどすんと鈍い音を立てて落ちたかのような、そんな言葉。

不安に駆られる。

胸騒ぎは、止まらない。

「一体、どういう意味？」

「あたしも飛鳥先輩が何を言いたいのかが、よくわかりません」
ここまでずっと寡黙だった出雲さんがしびれを切らして、「禁忌ってどういうことですか？」と質問した。

「日本では2000年の11月にある規制が出されて、それは私
がいる未来でも施行され続いている。どんな規制かわかるか？」

僕と出雲さんは互いを見つめあうと、ぶんぶんと同じタイミングで首を横に振った。

「それは『クローン技術規制法』という。そしてこの法律ではな、
あることを禁止にしたんだ。……それが『ヒトクローン』、つまり
人間の複製を禁じた」

僕は信じたくなかった。でもこの話の流れから、僕は既に悟ってしまった。

何があるのか、僕は理解してしまった。

「ま、さか……」

僕は半ば茫然自失な状態だった。

「勇人、おそらくもう分かっただろう。理衣はな、複製クローンされた人間なんだ……」

僕はもう何も言えなかった。飛鳥ねえがそう断言したのだから、

頭の中でどれだけ否定しても無駄なんだ。答えを聞いてしまったからには、もう知らないフリは出来ない。

「え、う、うそ?! 理衣先輩が……?」

驚愕する出雲さんが目に映る。瞼を大きく開いて、瞳は焦点が定まっていない。

僕は肘を腿に付け、両手で自分の視界を閉ざして、深く息を吐いた。打ちひしがれる思いで僕は、目を閉じた。この行為は現実からの逃避に違いなかった。僕は前を向くの少し疲れてしまったのだ。知ってしまった。本当の理衣のことを。

理衣はこのことをずっと黙っていたのだ。僕にそんなことを一切口には出さなかった。小学校の頃からずっと一緒に関わらず隠し続けてきたこの事実を、僕は……知ってしまった。

果たして僕は、正しい選択をしているのだろうか。今更ながらに迷っている自分がいる。

何とも、言えない。

僕はため息を吐いた。

それは、本当に些細な音だった。

ドサツと何かが地面に落ちた音。僕らの後方から聞こえた。一斉に振り向く。

地面に落とされたのが学生鞆であることに気づく。そして、その鞆の主は――、

「彩音ちゃん、ひどいよ……!」

そこにいたのは、鮮やかに紅い夕陽を背景に、涙を流して歯を食いしばっている理衣だった。

「言わないって約束したのに、何で……どうして! どうして、言うの……!」

震えながらも荒々しい口調で、理衣は言った。

僕ら3人はまるで金縛りにあったかのように身動きが取れずにいた。理衣がどうしてここにいるのかという疑問があったとしても、理衣が会話の内容を聞いていたということの方が僕らを焦らせてい

た。

「理衣！　これは僕から望んだことで、飛鳥ねえが悪いんじゃない！」

そう言うてはみたものの、理衣の耳には届かなかったようだった。理衣は僕の言葉を見殺し、落した鞆から何かを取り出したかと思うとゆらりゆらりとこちらの方へ歩み寄ってくる。

僕らは動揺の末、何故か3人とも同様に立ち上がった。

「言わないって約束したよね。約束したんだよ。なのに、彩音ちゃんはどうして……」

そう呟きながら理衣はベンチを挟んで飛鳥ねえの前に佇む。

理衣の異常な様子に僕は心配になり「理衣？」と声をかけてみた。

「……絶対に許さない！！」

憎悪を瞳に滲ませた理衣のその表情は、とても怖かった。

そして理衣が背中隠していた自分の右手を振り上げたとき、その右手に握られていたものがちらっと見えて僕は目を見張った。

「理衣、何で――！」

ガチャリ。

禍々しい音と共に飛鳥ねえの胸にそれは突き付けられた。

黒々と鈍い輝きを放つそれは、少女の華奢で細い手には釣り合わない、拳銃だった。

「な……！」

突き付けられた飛鳥ねえは、ただ驚きの声をあげた。

ほんの一瞬の出来事だった。

僕の真っ白な制服には、血が、真っ赤な血が、飛び散った真っ赤な血が大量に付着する。べしやりと赤に染め上げた。

どさりと糸の無くなった人形のように、力を無くして地に倒れる飛鳥ねえ。

「きゃああああああああああつ！！」

出雲さんが叫ぶ。

がしやんと、拳銃がベンチの上に落される。

理衣は血塗れの自分を目にし、嗚咽しながらその場にくずおれる。僕はどうすることも出来なかった。動けなかった。

何故理衣は拳銃を持っているのか、何故飛鳥ねえが撃たれているのか、何故出雲さんは泣きながら飛鳥ねえの体をゆすっているのか。僕には全てが理解出来なかった。

何かを間違えた。僕は失敗したのだ。そう、思った。

理衣はベンチに載っている拳銃に震える自らの手を伸ばした。そして、その銃口を自分に押しつけたのだ。

なんでだよ、おかしいだろ、どうしてそうなるんだヨ……。

僕がその拳銃を取り押さえようとしている時だった。飛鳥ねえの傍で泣いていた出雲さんの様子がおかしかった。

「あれ、あたし、体が……」

僕が出雲さんを確認した時、出雲さんの胴より下が消えているのだ。徐々に出雲さんの体が、無くなっていく。

出雲さんが自らの具現を保てないのは、この世に飛鳥ねえがいなくなったときであり、それはつまり飛鳥ねえの完全な死を示しているのだ。

「勇人先輩！」

出雲さんが腫らした目で僕の方のみつめてきた。

こんなの……こんなの、狂ってる!!!!!!!!!!

僕は、僕はあああああああああああああああああああああ
!!!!!!!!!!!!!!!!!!

Scene：—995143214567891 墮落へ

白無白

「アンタはいつまでここにいるつもりなんだ？」

ここは相変わらず何もなかった。空も、地面も、木々も、建物も、僕さえも存在しなかった。

ここにあるのは僕の意識だけ。

周囲は真っ白な空間。あえて言うなら、虚無、だ。

「おい、聞いているのかー？ アンタはいつまでここにいるのか、って質問してるんだけど」

僕は現実から逃げた。一度自殺して現実を逃避した僕は、目の前で起こった惨劇を信じることが出来ず、ここに逃げ込んできた。

だからあの後なんて、知らない。僕の服が血で塗られてしまった後のことなんて、僕は知りたくもない。

もう嫌だ。疲れたよ。

「無視してんじゃねえよ。聞こえねえワケねえんだからよ、返事しろって」

「う・る・さ・い」

「アンタ、この空間の主に対してその態度と言うのは、些か失礼ではないか？」

「そうですね」

「ちっ、これだから最近の若いやつはダメなんだ。まあ、こんなことはどうだっていい。拙者の質問に答えろよ。いつまでここにいるつもりだ？」

むしろ僕には現実に帰る気力が無かった。けど、それを伝えるのが億劫だったから、僕は黙ったままだった。

「お前の以前の自信は一体何処へ行ったのやら」
くくつとそいつは嘲笑しやがった。

ここでずっと寝てよう。起きる力なんて、僕にはもう無い。

「チッ。しゃあない。拙者は少し遊んで来るとするか」
行ってらっしゃい。そして二度と帰ってくんないな。

「他人の精神内干渉旅行へとしゅぱーつ。さいならー」

Not Scene

〔出雲凜の想い…1〕

つまらなくて何の中身のない人生だったのかな。

正直、たった15年程度しか生きてないからよくわからないけど、あたしは無駄に生きて無駄に死んでいる気がします。

あたしは一人っ子だから、親の期待という重しをたった一人で全部背負っていました。

勉強、勉強、勉強。お父さんとお母さんの口から並べたてられる勉強という言葉。

お父さんもお母さんも世の中で言う「高学歴」という枠からは外れてしまっていて、あたしの家は決して裕福と言える家庭ではありませんでした。だからこそそんな二人は、あたしの将来を案じて何度何度も忠告してくれていたんだと思います。あたしにとっては苦痛以外の何物でもなかったけど……

学校が終わればすぐに塾へ向かい、夜の9時ごろまで缶詰状態。ひたすらに数学だの英語だの古典だのを、将来のためになるかどうかさえ分からないそれらを必死で勉強させられました。まるで脅迫させられているかのように勉強しているから、何も楽しくはありませんでした。

本当は、部活動をやってみたかったです。

学校の人たちと一緒に何かをやりたいかったです。運動でもいいし、文化系のクラブでもよかったんです。あたしは一緒に何かを共有できる友達が欲しかっただけででした。

でもあたしの願いは叶わず、親に強制されて塾通い。

学校では、そんなあたしのあだ名がクラスの男子の手によって「ガリ子」となってしまい、顔には出さなかったけどあたしは傷ついていました。別に勉強が好きじゃないのに、あたしはみんなと同じような中学生でいたかったのに、ダメでした。

毎日あたしは、機械的に、受動的に生きていました。

お父さんとお母さんの言うことに従って、勉強、勉強、勉強。

あたしは中学生3年間をすべて勉強に費やしました。いや、費やされていたのです。

特に希望のない毎日でしたが、高校受験が近づくにつれて両親の態度はまたさらにあたしを圧迫しました。

「お前は良い高校にいかねばならない、良い高校だぞ！」怖かった。

それはまるで洗脳されているみたいで……いや実際にはすでに洗脳されていたのかもしれませんが。

あたしは言われるがまま、シャーペンを手に取り、参考書を広げ、果てしない数の文字を読み漁り、覚え、計算し、解き、採点し、間違いをチェックして――。

あたしという人格が日々削られていくような錯覚を覚えました。

受験日当日は親と第一志望高校の受験会場に向かいました。

結局、終わりはあっけなかったのです。

出来なんて覚えていません。

第一志望以外の高校受験も順々とこなしました。最初の受験ほど難しくはありませんでしたし、3年間を無駄にただけあってあたしは第一志望の高校に合格しました。

親はすごく喜びました。あたしはあれほど笑顔だった両親は一度も見たことがありませんでした。

そんな二人を目にしてあたしも段々、これでよかったのではないかと思うようになっていきました。

二人の言うことは正しい。良い高校に行ったほうが、将来有利に決まっている。

だからほんの少しずつだけど、この3年間を見直すようになってきました。もしかしたら、無駄ではなかったかもしれないと、思えるようになってきたのですよ！

それは成長、というか進歩だと思います。

あたしは中学校の卒業式の日、みんなと同じようにして泣きまし

た。

泣くということは、中学校生活が充実していたからこそ感じる悲しさからくるものだ。あたしが勝手に思っていたからです。

だからあたしは泣くことにしました。

中学校生活を充実していたことにしたかったです。

桜の下で卒業証書を持って、クラスのみんなと一緒に写真を撮りました。お父さんがカメラを持ってあたしを一杯写してくれました。卒業式のあと、クラスのメンバーでどこか遊びに行こうという流れになり、驚くことに、携帯電話さえ持っていないあたしが、それに呼ばれたのです！

嬉しかった。本当にうれしかったです。

だからお父さんに甘えました。「行きたい！」って本当に久々に自分の希望を言いました。

そしたらお父さんは、「いいよ」と言ってくれた上に、お小遣いまでくれたのです。

勉強勉強、と呪文のように繰り返すお父さんはもうそこにはいませんでした。

そしてあたしは、クラスメートと一緒に遊びに行くことになりました。

夢のような時間でした。

友達と遊ぶことが、ここまで楽しいことだとは思いませんでした。初めて口を交わすような人も中にはいました。

「出雲さん、ぜんぜん変わったね」

そんな言葉ももらいました。それは以前と比べて元氣にあふれているという意味らしいです。

確かに変わったのかもしれませんが。

今はこんなに気持ち晴々としているのですから。いつも心が梅雨の時期の空模様のようにどんよりと鉛色に暗かった以前と大違いなのです。

遊び終わりみんなと別れても、ほわほわとした気分から抜けませ

んでした。まるで地に足がついていないようで……。

暗くなった帰り道、あたしは何も間違ったことをしていません。

あたしはただ舗道を歩いていただけなんです。

猛スピードで遠くから走ってきた車が車道からそれて、舗道に乗り上げて来て……。

激痛を感じたのはほんの一瞬でした。

気付いた時、あたしには身体というものが無くなっていました。生きていなかったのです。

飲酒による暴走運転などというものに、あたしは……あたしは――
――！

何のためにあたしは勉強したんでしょうか。

何のためにあんな楽しかった時間を犠牲にしてまであたしは塾に通ったのでしょうか。

何のためにあたしは生きたのでしょうか。

全部が虚しくなって、あたしは自分が轢かれたその現場で、誰にも知られずに、ただひとしきり泣いていました。

未練たらたらなんです。

この世の中に。自分の人生に。

だからこそ、あたしは幽霊としてこの世に残ってしまっているのでしょうか。

あたしは、楽しい時間が、欲しかったんです……。

あたしはただ泣いていました。

雨が降っていても、構わずあたしは泣いていました。だって、雨が当たる身体が無いんですから……。

誰もあたしを見つけることはありません。

人知れず、あたしは自分が轢かれたその場所で、座っていました。車の運転手を恨んでます。

あたしを殺した人がとてもとてもとてもとてもとてもとても憎いもとてもとてもとてもとてもとてもとても憎い
っ……。

でも動く気力さえないあたしは、そこでただじっとしていました。歩く人々を見て、行き過ぎる車を見て、あたしは何を思っていたのでしょうか。

少し前までは自分もあの中の一人だったのです。

機械的に日々を過ごして、あたしは一体何をなし得たというのでしょうか。

この目の前を通って行く人たちは、何のために生きているのでしょうか。

たった15しか年を重ねることが出来なかったあたしには、わからないことがたくさん出来てしまいました。

あたしが死んでからどれ位経ったのでしょうか。

時間や日にちの感覚が曖昧になってきたのです。

こんな風にしてあたしはだんだんとこの世界から消えていくのだなと思うと切なくなり、全てが虚しく思えてきました。

けど、クラスメートと遊んで「楽しい」と感じたあの時のことだけは、まだ鮮明に覚えていたのです。

ただ、それを覚えていただけに、もうあんな感覚を味わうことが出来ないを思うと、胸を打たれたかのように苦しくて哀しくて、涙

が溢れてきました。

ある日制服を着た高校生が事故現場にお花を供えていきました。あたしの知らない人でした。

花束を添えていく人は一杯いました。

お父さんやお母さん、親戚の人もいたし、あの時遊んだクラスメイトや、担任の先生など、花を添えていく人は基本あたしが知っている人たちでした。

けどその高校生は違います。

霽のかかった記憶の中からなんとか頑張って探し出そうとしましたが、やはりその高校生の顔を見たことがありますでした。不思議に思いました。

「あの人は誰なんだろう」そう思いました。

その人は次の日も、またその次の日も、またまたその次の日も、現れました。花を持って来ていない日には、あたしのために静かに手を合わせてくれました。

知らない人のためにここまでするその人にあたしはびっくりしました。でも、それと同時にちょっぴり嬉しかったのです。

あたしはその人のことが気になり始めました。

だから、ある日あたしはその人の後ろについていくことにしました。

制服を着ていたので、やはり行先は学校なのでしょう。

この制服はこの街でも有名な高校のものであることは知っていました。「スーパースイエンス指定校」であるその学校、残念ながらあたしは理系よりも文系に向いていたので受験はしませんでした、悪い学校ではないという話でした。

思った通り、着いた先は学校でした。

その男の人以外に制服を着たたくさんの人たちが、校門を通って行きます。あたしはその男の人を見失わないよう、おずおずとしながらもしっかりと憑いていきました。

とても大きい学校だなと思いました。この街に合わせて校舎が特

殊な外形をしていました。全体的に丸みを帯びたその校舎は来るものに柔らかな印象を与え、取っつきやすくするのだと思います。実際あたしも、その校舎に入って見たいという気持ちになりました。

隣は旧校舎でしょうか。少しくすんだ白やひびの入った壁が年季を感じさせました。こちらはいかにも学校校舎という外見でした。

その人は新校舎の玄関へと向かい、そのまま真っ直ぐ自分の教室へと歩いていきます。

高校生の授業を目にしたのは初めてで、ほんの少し胸が躍りました。

あたしが生きていたら高校でこんな勉強をしてたんだな、とあるはずない自分の未来に思いを馳せるあたしがいました。

それと、数学の授業の時にあたしが追跡したその男の人が指名されました。名前は「中原勇人」と言うらしいです。

この日は土曜日だったらしく授業は午前中で終了しました。結局あたしは勇人さんのクラスで行われた授業すべてに出席したのです。少しでも「未来の自分」というものに触れていたかったんだと思います。

クラスにいた生徒たちはみんな散り散りになり、あたしは今朝から後をつけている勇人さんを追いかけてきました。

このまま帰るのかなと思ったけど、そうではなかったのです。彼は同じクラスの女の人（勇人さんはその人のことを「理衣」と呼んでいました）と一緒に「写真部部室」という部屋に入って行きました。

そこは先ほど見た旧校舎にあった部屋で、旧校舎の外見からその部屋の埃っぽさなどを想像していましたがそんなことは全然なく、物は整理整頓され、とても片付いていた部屋でした。

その部屋で勇人さんと理衣さんはなにやら準備をし始めました。

部屋の中央の机の上にはお菓子やジュースが並び、部屋は飾り付けされていきました。それらはあらかじめ用意していたようで、部屋内は小さなパーティ会場のようなのです。

二人はクラッカーを手にとって構えていました。

誰かを待っているようです。二人とも扉の方を凝視していました。すると話し声が近付いてきて、扉がガラガラッと開かれました。

それを見計らったようにパンツ、とクラッカーは鳴りました。

「先輩、いままでお疲れ様でした!」

そこには3人の男の人がいました。

「うごっ!　び、ビビったぜ」陽に焼けて、ごつごつとした身体つきで、背の大きな人が言いました。

「フッフ、不覚にも驚いてしまいました」眼鏡をかけた身体の線が細い人が言いました。

「歓迎してくれるなんて、うれしいなあ」柔らかな髪と甘い顔をした人が言いました。

なんでもこれは、「卒業の前祝い(部活メンバーで)」と称したちよっとした催し物だったらしいのです。勇人さんや理衣さん、そしてその3人の先輩がお菓子やジュースがのった机を囲んでわいわいを賑やかに話し始めました。

あたしはそんな光景を見て羨ましく思いました。

それは、本当に楽しそうだったからです。

写真部での思い出や通う予定の大学、その大学生活でどんなことをしようかとか、将来は何をしようかとか、そんな会話が続いていました。どれもこれもが希望に満ち溢れた話で、みんな笑顔でした。それを見て、あたしにはこういう時間が足りなかったのだと痛いほどに感じました。

この温かい空間が、あたしの心を溶かしていくようで、とてもつらい。

こんな風に過ごしたかった。楽しい思い出に浸り、未来への期待を語るこんな時間を、あたしは……。

堰き止められていた思いが奔流となり、涙となってあたしの目から次から次へと流れ出てきました。

「こんな時間が、欲しい……!」

願いました。一生懸命に願いました。

楽しいって感じられる瞬間を体験してしまったことが、おそらくいけないことだったのです。何故ならあたしはまるで中毒状態であるかのように、それを求めているのですから……。

この中毒症状こそがあたしの未練なのだと、あたしは認めます。

あたしの我がままなんです。エゴなんです。自分が世界で一番不幸だと誤認してしまっているんです。

だからこそ、あたしは驚きました。

その日、あたしは具現することが出来たのですから……。

N o t S c e n e

く出雲凧の想い..3く

(前書き)

遅れました！

たぶんしばらく、土日更新が主流になりそうです。

Not Scene

（出雲凜の想い：3）

人の魂は、死後49日経つまで現世うつしよを彷徨うと言われています。だからあたしの魂もまだこの世に色濃く残っていたのかもしれない。だからこそあたしはほとぼしる未練の念によって「あたしの体」を形成することが出来たのでしょうか。

勇人さんと写真部メンバーのパーティーを目にしたその日、特に行く当てのないあたしは巫女寺市の街を彷徨っていました。

行き交う人も、排気ガスを吐き出す車も、密集する建物も、綺麗に並んだ木々も、あたしには関係ありません。そのどれもにあたしはもう触れることさえ出来ないのですから。

どれだけの間そうしていたのかはわかりません。

暗鬱とした気分で、まるで底なしの沼にずぶずぶと抵抗することなく自分が沈んでいるかのようにでした。

「あたしも……」

あたしも、あんな風に生きたい。

それだけでした。

もどかしくてもどかしくて、やるせない気持ちになりました。

ふと空を見上げると、鈍色にびいろの雲に覆われていて、気付けばあたりでザアッと雨が降っていました。

どこかもわからない路地に一人ぼつんと立ち尽くしていました。

この雨であたしの魂も洗い流されてしまえばいいのに、と思いました。

こんなに哀しい気持ちのままなら、こんなに羨望の念を強く抱いているなら、こんなに未練たらたらに生きたいと思ってしまうているなら、いっそのことあたしを消してほしかったんです。

なのに――。

「君どうしたんだ、そんな恰好で」

振り返ると、そこには合羽を着た男の人が自転車から降りているところでした。どうやらお巡りさんのようです。

「君裸足じゃないか?! 服もこんなにボロボロで……。もしかして――」

この人は何を言ってるのでしょうか?

裸足? 服? それ以前になんであたしのことが視えているの?

「なんか事情でもあったのなら、いちど警察で保護でを――」

あたしは自分の腕を触りました。

肩も、首も、耳も、髪も、目も、鼻も、口も……。

ありました。あたしが、ありました。

「あ、あは、あははははははははは――」

自然と口から笑い声が漏れていたようです。

そう、あたしには身体がありました。何という奇跡でしょう!

神様が与えくれたのでしょうか? いづれにしても、先ほどま

でのあたしの暗澹あんたんとした気分が一掃されたのです。

「身体があります……! あたしに、身体が!」

目の前の人が何かを言っていました。そんなこともう耳に入っては来ませんでした。

身体に雨が当たっていることが、とても冷たくて、とても気持ちいいのです。雨に当たるだけでこんなに清々しくなるのは初めてでした。

あたしは、走りました。

身体があるのです! 地面につける足があるのです! 冷たさを

感じる肌があるのです!

身体が自然に躍動しているのです。

全てに感謝して、あたしは雨の中をひた走りました……。

他の生徒に紛れて、あたしは廊下に立っています。

同じ制服に同じ靴のあたしのことを気に留める人は誰もいません。

この学校は人が多いため、同学年でもまったくもって顔を知らないということがざらにあるようでした。実際このようにして部外者が校内にいるのに、誰も気がつかないのですから。

時折先生とすれ違ったりしますが、挨拶をすれば、訝しむ様子もなくこちらに笑顔で挨拶を返してくれます。

安心です。心配することは何もありません。

あたしは廊下を歩きます。

そう言えば、以前は肩甲骨の下まで伸びていた髪を短くしてみました。イメージチェンジと言うやつですが、それをやってみました。今では首もとで髪がふわふわとしています。そんな感覚がとても嬉しいのです。

服や靴は一体どうしたのかと訊かれたら、あたしは苦笑いで「いつの間にかあった」と答えるでしょう。実際これらは調達したのではなく、身体を具現化する時に頭で自分の姿をイメージすると、イメージ通りの格好をしているんです。

だからこの制服も、他の人が着ているそれらを見て自分がその制服をきている姿を想像しただけなのです。

なんとも便利でした。もちろん一切ためらわず、あたしはその力を利用して、今こうやって高校の廊下を歩いています。

今どこの高校にいるのか？

簡単なことです。

扉が見えてきました。

ノックをします。

「どうぞー」と中から声がしたのであたしはその写真部部室の扉を静かに開きました。

中には勇人さんと理衣さんがいました。

「どうしたの、君？」

勇人さんが近付いてきます。

あたしは緊張してしまって、なかなか声が出せずにいました。

夢や希望なんていう陳腐な言葉があたしの胸を占めていて、頭は

真っ白になっていました。

「えつとですね……」

あたしは楽しい日々になりたい！ だから……だから、勇気を出して言いました。

「あ、あたし、写真部に入部します！」

写真部。

とっても楽しそうだったから、そこに入ってみたくなっている自分にあたしは気付いていました。

だからあたしは、身体を持ったあたしは、そこに入部してみることと決めたのです。もちろん自分がその生徒では無いことや、幽霊であることは全て秘密にしました。言うとは混乱させてしまうかもしれないですし、何よりあたしは「人間のあたし」として扱ってもらいたかったのです。だから黙っていました。

あたしが写真部に入ってから数日後、勇人先輩や理衣先輩と同じクラスに転校してきた飛鳥原彩音さんあすかはらあやね、つまり、飛鳥先輩もあたしと同じように写真部に入部したのです。

写真部なのでもちろんあたしはカメラに触りましたし、操作もしました。それは初めてのことで少しい緊張していたのですが、勇人先輩が優しく一から教えてくれたので、なんとか自分の手で撮影することが出来るようになりました。

カメラを通して見る世界は今までと異なっているように見えました。

世界からある一角を切り取る。そんな作業がだんだんと楽しくなっていました。

またあたしは勇人先輩の撮る写真がとても好きなのです。

それはあたしの撮った写真とはまったく異なる雰囲気を感じさせているのです。ある時は生き生きと鮮やかで、ある時はさめざめと切なくて、そんなふうに写真を取ることが出来る勇人先輩をあたしは尊敬しました。

理衣先輩は古くから勇人先輩というだけあって、カメラの扱いには手慣れていましたし、飛鳥先輩はとても器用だったのであたしよりも先にカメラの扱いをマスターしていました。

なんだか置いてきぼりな自分が少し恥ずかしかったのですが、このカメラがあたしに、世界の新しい側面を見せてくれているように、ひたすらにカメラを手にとって写真を撮り続けました。

最初、現像液に慣れなくて涙を流してしまいました。

また逆行だったり、ピントが合ってなかったり、フレアが盛大にできたりなどあたしの写真は目も当てられないものばかりでした。でも撮り続けるうちにミスも少なくなってきて、勇人先輩にも褒められるほどに成長したのです。

そんな風に撮影が上達した頃にはとくに49日など過ぎていました。

あたしは死んでから49日経っているのに、魂は未だこの世界に留ま^{とど}まっていて、身体を具現化して、楽しんでいます。

正直言ってあたしはとても不安でした。

いつかあたしの魂がふっと消えてしまうのではないか、と思ったりもしたのです。

でも、ある時あたしの頭の中に――それはまるで神様のお告げであるかのように――突然あるイメージが浮かんだのです。

三角形に切り取られた紙、その上にあたしが乗っていました。三角形の頂点にはそれぞれ勇人先輩、理衣先輩、飛鳥先輩が立っているのです。頂点はこの三人によって保たれていて、誰か一人でも欠けるとその頂点が無くなって、三角形が一本の線分になってしまつて、上に乗っかっているあたしは落ちていくのです。深く深く、どこまでも、落ちていくのです。

そんな場面が一連に脳内に流れて来て、あたしは思わず背筋を凍らせてしまいました。

怖かった……。

ただあたしは、この三角形が崩れることはないと思っていました。毎日^{あて}はこんなにも艶やかに彩られていて、あたしが想像するかのような心配事は起りそうにはありませんでしたから……。

でもそんなある日のことです。

あたしは細心の注意を払ってきたつもりだったのに、正体を見破られました。

それも勇人先輩にです。

あたしは自分が在籍していると嘘をついていたそのクラスへと連れてかれ、自分の席を訊かれました。もちろんそんなものはあるわけがなく、あたしはどうすることも出来ませんでした。

あたしがこの学校の生徒ではないことがバレてしまうのは仕方のないことでした。調べればすぐにわかることなんですから。でもまさか……、まさかあたしが幽霊であるということがバレてしまうとは、夢にも思わなかったのです。

あたしは困惑しました。

どうして勇人先輩があたしのすべてを知っているのか、それが疑問でした。

その日の部活が終わり、理衣先輩と別れた後、あたしと勇人先輩は駅前の噴水公園へ向かい、そこであたしは勇人先輩が未来で経験したというこの内容を、事細かに教えられました。

なぜ未来のあたしから「あたしが幽霊である」という話を聞いたのか、これから何が起こって日常がどう変化するのか、これらを勇人先輩から聞いたとき、あたしは自分の耳を疑いました。

飛鳥先輩が消える？

そしたらあたしが消えるのは必然的で……。

最後に理衣先輩が姿をくらませる？

残ったのは勇人先輩ただ一人で……。

もしあたしが幽霊でなく普通の女の子でしたら、この話を鵜呑みにすることはなかったのでしょうか。

けどあたしは幽霊だから……、しかもあたしがキエルという現実には容易に想像が出来たから……、そして勇人先輩の顔つきがとても真剣だったから、あたしは信じることにしました。

そして勇人先輩の頼みを承諾したのです。

それは「部活に来なくなる飛鳥先輩を捕まえること」。
でも、これが最悪の出来事を迎え入れてしまうことを、誰も知る
由はありませんでした……。

Not Scene

（出雲凜の想い：Last）

「いた!!」

飛鳥先輩捕獲作戦一日目は、自分の姿を不可視化して校門ですつと張り込んでいたのに、どういうわけか飛鳥先輩は現れませんでした。

だから二日目は、正門以外の場所で張り込むことにしたのです。学校の敷地と外とを隔てる塀に沿って歩きまわっているとビンゴ！正門とは真反対の位置で偶然にも飛鳥先輩の後ろ姿を見つけたのです！

「飛鳥先輩！」

あたしの呼び声に、飛鳥先輩は怖い面持ちでさつと振り返りました。

「なんだ、凜か……」と強張っていた顔がすつとほころんだのは気のせいでは無いのでしょうか。

飛鳥先輩のもとへと駆け寄り、その腕を離さないようにがしりと強く掴みます。

「いったいどうしたんだ？」

「どうしたもこうしたありませんよ！ どうして部活に来ないんですか!？」 語調が強めになってしまいました。

「凜は私がいないとさびしくて死んでしまいそうなのか？ まったくお子ちゃまだな、お前は」

「茶化さないでください！ あたしは真剣に訊いているんです！ どうして部活に来ないんですか!？」

先程まで飛鳥先輩の緩んでいた表情が、険しいものになりました。「……用があるんだ。だから出れない。それだけだ」 嘆息気味に飛鳥先輩は言いました。

「本当にそうなんですか？ じゃあ何の用事があるのか言ってみてください!」

「それは……言えないな」

「どうしてですか！ 勇人先輩は飛鳥先輩に逢いたがってるんです！ だから部活に行っ——」

「おい待て。お前は、勇人に頼まれて私を捕まえに来たのか？」

「そ、そうですけど、何か問題でも——、って、あ——！」

飛鳥先輩はあたしの手をさっと振りほどいて、走り去っていきました。

「待ってください！」

あたしもそのまま走って追いかけてようかと思ったのですが、流石にそれではあの運動神経バツグンな飛鳥先輩に追いつけないことは目に見えているので、身体を消して追跡しました。

やはり飛鳥先輩の足はとてつもなくはやかったのですが、障害物のないあたしにとって追いつくのは容易なことでした。

あたしの姿が見えないと安心して、飛鳥先輩は走るのを止めました。このチャンスに、あたしは人の死角で自らの体を具現化します。電柱の陰からずっと姿を現したあたしに、虚を突かれたかのように驚いた飛鳥先輩は再び奔走しはじめました。

それからです。

あたしと飛鳥先輩の長い長い追いかけてが始まりました。

あたしは身体を具現化・透明化の繰り返しで、どう見ても飛鳥先輩を追い詰めていました。

飛鳥先輩は突如姿を現したあたしを目にするたびに、必死に走り回りました。

息が上がっても、先輩はひたすらあたしから逃げるのです。

あたしは人の死角でしか身体を具現化できないため、時にはあまりにも不格好な現れ方もしました。

どこかの家の塀からひよこつと顔を出したり、止められた車の下から出てきたり、ごみ箱の中からはさっと出てきたり……。正直、あまり気が進まなかった場所が多かったのですが、あたしもどうにかして飛鳥先輩を捕まえたくて、必死だったのです。

そしてついに飛鳥先輩は降参しました。

「も……もう……無理だ……私の……負けだ」

はあはあと息を荒くして、飛鳥先輩は膝に手をつきました。全身から勢いよくにじみ出ている汗が、飛鳥先輩の努力を物語っています。ぽたりと、先輩の汗がアスファルトの地面に吸い込まれていきました。

「なんで、お前……汗一つかいてないんだよ……あと、出てくる場所おかしすぎだろ……！」

「まあ、それがあたしの特権みたいなものです。それより、飛鳥先輩は勇人先輩に逢ってくれるんですね！」

渋々といった顔で「もう、好きにしろ……」

やった！

これで勇人先輩も喜ぶ……！！

「でもな……、一つ条件がある」

「条件ですか？」

息を整えた飛鳥先輩は、言いました。

「理衣を絶対に連れて来てはダメだ」

巫女寺駅前みこでらの噴水公園。

飛鳥先輩はそこを話し合いの場として所望しました。

あたしは勇人先輩を連れて来て、二人をやっこの思いで対面させることに成功したのです。

あたしは勇人先輩から、飛鳥先輩の正体については既に知っていました。もちろんこのことは決して口外してはいけない、と勇人先輩に念を押されたので、飛鳥先輩にさえあたしは何も言ってません。だから勇人先輩が飛鳥先輩の正体を知っていると告白すると、あたしたちを取り囲む空気がぴんと張り詰められたようになりました。そして表情が硬くなった飛鳥先輩を横目で見ると、やはり勇人先輩があたしに教えてくれた話はすべて本当のことだったんだと、しっかりと実感することが出来ました。

あたしの中にあつた一抹の疑心は払拭ふっしょくされたのです。

勇人先輩の言うことは正しかった。

だからやっぱり、勇人先輩・理衣先輩・飛鳥先輩、この三人があたしをこの世に留めている三本の画鋲なんだ、と考えました。

飛鳥先輩が消えて、あたしも消える。

それはつまり、あたしにもタイムリミットがあるということ。

飛鳥先輩は来週の火曜日に、未来へと帰る。それは誰にも覆せない決定事項。

それなら必然的にあたしも、来週の火曜日までしかこの世に留まることが出来ないということを指し示していました。

今日は木曜日。

ならば、あたしはあと5日間しか、この世に留まらない。

そんなことばかり考えていました。

あと5日、あと5日、あと5日……。

でも、現実というものはとても残酷なことをしました。

それは本当に突然のことだったのです。

理衣先輩があたしたちの背後で話を聞いていました。しかもとてもタイミングの悪いところだけを、理衣先輩は耳に入れたのです。

あたしたちは戦慄を覚えました。

いつの間にかあたしたちに近寄っていて、いつの間にか飛鳥先輩の胸に黒々と光る鉄砲が突き付けられていて、いつの間にか視界は紅い血に塗りたいくらわいて、飛鳥先輩が地面に倒れて……。

「きやああああああああああっ!!」

あたしは叫んでいました。

焦げた臭いがありました。

鉄の臭いがありました。

「飛鳥先輩! 飛鳥先輩!」

力の入っていない飛鳥先輩の体をゆすりました。生きてることを願って、ただ名前を呼んで……。

世界は崩壊したのです。

N o t S c e n e

く出雲凧の想い：Lastく
(後書き)

出雲凧編の終了です。

あ、それとちなみにこの話は「くく編」を全員分やって終わりではありませんよ！

ラストはしっかりと作ってあるのでww

N o t S c e n e

〈藤野理衣の想い..1〉

(前書き)

理衣編です！
よろしくお願いします。

最初に彼に出会ったのは小学生の時。

社会生活に与^{くみ}する実験体として、私はとある小学校に編入させられた。

いわば、私はただの「データをとるための道具」でしかなかった。でもそんな悲観的な感情を面^{おもて}に出してはいけなかった。

私が複製人間^{クロニ}だということは絶対にバレてはいけない。

私の正体がバレてしまったら、私は処分されるというふうに聞いていたから、学校に行っても自然と他人との深い関わりを避けている自分がいた。

怖かった。

クラスみんなは何も言っていないけど、実は本当のことが知られているのかもしれない。

裏では皆で私のことをバカにしているのかもしれない。

強制的に学校に通わされる前までは、他人との接触がほとんどない研究所内ですと生活していたから、突然人の波に押し出された私は不安で胸が一杯で、いつも疑心暗鬼をしていた。

私はクラスメートとの会話は最小限におさえて、あとは静かにすることにした。

みんなの意向に従い、決してはみ出ようとはしない。

それが最も楽で、他人に不快感を抱かせない生き方だとあたしは思った。

だから何かを押しつけられても、私は首を縦に振った。

「ありがと、理衣ちゃん！ いつもごめんね！」そう言われる度に、私は少しだけ胸をなで下ろした。

誰かに感謝されて、誰かを不愉快にしなければ、普通の子でいられる。

正体がバレたりすることなんてない。

私は何かにびくびくしながら日々を過ごしていた。

そんなある日、飼育係の当番だった私はみんなよりも少し下校が遅れた。

飼育小屋の掃除が終わり、鞆を取りに行こうと教室に戻ると、一人の男の子が誰もいない静かな教室にぽつんと残っていた。

自分の席に座っているその子の名前を思い出す。

授業中はとても静かで、特に目立ったことをしようとしなない。しかも病気がちでよくよく学校を休んでいた。そんな男の子。

——名前は確か、中原勇人くん、だったよね……。

勇人くんは自分の席に座って、何かを机の上に出していじっていた。

いじっているその何かが気になって私は静かに勇人くんに近づく。勇人くんが私に気づく心配がなかった。

どうやら、勇人くんはカメラをいじくってるらしかった。

勇人くんはやつとのことで傍に立つ私のことに気付いて、ふっと私の顔を見つめた。

「それ、カメラだよ」私は“それ”を指さす。

「う、うん。そうだよ」

「勇人くん、カメラが好きなの？」

「わからない……」

「……わからないの？」

「うん」

私の“いじる”という表現には少し語弊があり、それはどちらかといえば慈しんで優しく“撫でている”という感じだった。

「これは、父さんの形見なんだ」

「え……？」

そしてふと思い出した。勇人くんのお父さんがつい最近、交通事故に遭って死んでしまったという噂をクラスメートに聞いたことを。

「そう、なんだ……」

申し訳ない気持ちになってしまった。もちろん私お父さんやお母

さんと呼べる人はいない。いや、いることにはなっているけど、それは形式上であって、私と血が繋がってる人なんていない。だから親が“死ぬ”という哀しみは、私にはわからない。でも、親が“いない”という哀しみは少しだけ理解が出来た。

私は親がいる同年代の人たちを、いつも羨望の眼差しで見ていた。羨ましかった。自分の境遇が恨めしかった。

そして目の前には、親がいなくなって傷ついている少年がいる。

それはほとんど直感のようなもの。

ただ私は、その子と自分を重ね合わせただけ。

もちろん今にして思えば、私と勇人くんなんて似ても似つかない境遇だった。

勇人くんは普通の人間で、私は普通じゃない人間。

でも、その時の私は同じ傷を持った人とかかわり合いが、胸をくすぐられるかのように少し嬉しかったのかもしれない。

「……あの、折角だから、私の写真取って欲しいな」

「君を？」

「う、うん。ダメ……かな？」

「いや、大丈夫だよ。たぶん」

そう言って彼はカメラを手にとって、私の方へレンズを向ける。かちかちと操作をしているようだったけど、まだ不慣れらしくておぼつかない様子だった。

「こう……かな？ い、いきます」

「う、うん」

私には写真を取ってもらうという機会がほとんどなかった。なぜなら私には家族という繋がりが無い。だから私の成長を写真に残そうだなんて考える人はいなかった。

妙に緊張していた。

あまりない撮影の機会に、私は恥ずかしくなってレンズを直視することが出来なかった。私から撮ってっってお願ひしたのに、おかしいよね。

少し下を向いて、ピースをする。

「ハイ、チーズ」

それが勇人くんとの出会いだった。

小学校・中学校・高校、私は勇人くんと一緒にいる。

研究所はここ巫女寺市みこでらにあるために私は巫女寺市内の学校に通わ
されることが決定づけられていて、勇人くんも巫女寺市から離れる
こともなかったので同じ学校に通うことが出来た。

でも実は、小学校は偶然だったにしても、中学・高校は勇人くん
が行くところに私も行きたいと懇願していた。それは複製人間クローンであ
る私に対しての慈悲もあったのかもしれない。

私の願いは叶えられて、勇人くんと同じ学校に行くことが出来た
のだ。

私は本当に嬉しかった。

いつからなのだろう、私が勇人くんを意識し始めたのは。

小学生の頃は病弱で私よりも少し背が小さかった勇人くん。徐々
に徐々に体格が男らしくなっていく勇人くん。だんだんとたくまし
くなっていく勇人くん。

勇人くんは成長していく。

内も外も、どんどんと成長していく。

和気藹々と写真を取る勇人くんが、いつどんな時でも優しい勇人
くんが、私は気になっている。

でも、こんな気持ちを打ち明けることなんて出来ない。

私は勇人くんに正体を知られることは、絶対に嫌だった。

もし知られたら……拒絶されるのかもしれない。口をきいてくれ
なくなるのかもしれない。

そんなの、私には耐えられない。

だから自分の気持ちを抑えて、私は勇人くんから遠ざかると同時
に勇人くんの傍に居続けた。
矛盾している。

分かっていた。

確かに自分の正体が知られるのは怖かった。でも、勇人くんから離れるのはそれ以上に胸が痛かった……。

私は……勇人くんのが……。。

私がしたのは矛盾した、恋。

近づきたいけど近づきたくない。

知りたいけど知られたくない。

結局私はずるずると引きずってしまったただけなのかな？

私の心はまるで綿みたいに、時間を経るにつれて水を吸って重くなっていた。少しずつ少しずつ、私の中で勇人くんが大きく、重くなっていく。

深い関わりを避ける……？

それは出来なかった。

私は何度か勇人くんを家にお邪魔したし、逆に勇人くんを招待して、「私のお母さんだよ」と嘘をついて私の世話係を紹介した。

世話係の由乃ゆのさんはあまり良い顔をしていなかったけど、私の嘘に付き合ってくれた。私のお母さんとして振舞ってくれた。

正直言って、私のこの行動に良い顔をしなかったのは由乃さんだけではなかった。研究所の人たちだってみんな顔をしかめていた。でも私はみんながどんな顔をして、勇人くんとの関わりの方が大切だった。

私の正体を隠して……勇人くんを騙して……、それでも私は勇人くんと一緒にいたかったんだと思う。

気持ちを打ち明けることの出来ないまま……。

高校生活。

二年生へと進級して少し経った後。

予兆はあったのかもしれない。

何者かが研究所のことについて嗅ぎまわっている、という情報があった。

私にも「警戒するように」という命令が来た。

しばらくの間神経が過敏になっていて、誰かの足音や視線、もしくは気配のようなものを感じると、すぐに振り向いたり、周囲を確認するという癖がついてしまっていた。

私の正体が世間に知られてしまったら、私は人知れないところで処分されてしまう。

それは勇人くんと別れを意味し、と同時に私の“死”をも意味する。

それだけは嫌だった。

なんとしてでも阻止しなければならなかった。

そんなふうには通りに注意を振りまく日々は、確実に私を参らせてた。

しかもその疲労からかどうかはわからないけど、体力が落ちている自分に気付いた。

時には突然の目眩めまいに襲われることもあった。

分からない……。

どうしてこんなにも足が重たいのか、どうしてこんなにも腕が重たいのか、どうしてこんなにも指が動かないのか……。

私はそんな自分の症状を由乃さんに訴えると、月数回だった研究所への通いが増えた。

研究所で幾度も検査を受けて、薬をもらってそれでどうにかしなく。

検査の結果はあまり良いものではなかったことが、私を悲しみの底に突き落とした。私は一人で、もがき苦しんだ。涙が溢れて目を腫らした。真夜中でも枕を濡らすほどに嗚咽した。泣き終えるあたりのしんとした静けさに切なくなり、またさめざめと泣いた。

でもつらい顔だけは、見せなかった。

勇人くん達に心配はかけたくなかったから。

私は、一人、頑張った。

そして、そんなある日のことだった。

——いる。誰かが、私を尾行してる。

そう思うと私はすぐに携帯電話で電話をかけた。

小声で「私、つけられているみたいです。場所は――」

今いる自分の場所を正確に述べてから、電話を切った。

助けが来るまで私は、あたかもつけられていることが分からないような素振りです、電話で述べた場所の周辺を歩き回っていることにした。

緊迫した空気。息をのむ私。

私の首筋を一筋の汗がたらりと流れていく。

走り出したいと叫ぶ足を抑えて、私は一歩ずつしつかりと歩む。

しばらくして携帯電話が突然震えだし、肩がびくつと反応してしまった。

携帯電話を取り出すと、メールが来ていた。すぐに開いて内容を確認する。

内容を頭に入れると、携帯電話を閉じ、私は指定された場所へと向かう。

人通りが無いに等しい場所。そこにいるのは私と私を尾行してくる人の二人。

T字路。

私の前にはそのまま真っ直ぐ進む道か、左に曲がる道。

そして私はちらりと左に延びる道へと視線を向ける。そこには二台の車が縦に並んで止まっていた。

私は手前のバンの運転席の人と目が合い、その人が頷くと私も頷き返した。

これが合図となり、私は左の道へと駆けだした。すれ違うようにして、停まっていた白いバンは急発進する。私の横をすぎる際、勢いで風が私の髪とスカートを巻き上げようとしたから、私は両手でがんばっておさえた。

今のは追跡者を捕獲するため、身体が出来上がった人たちが車に乗っている。たぶん、彼らから逃げることはそうそう無理だと思った。

そんな私は停車していたもう一台の車の方へと乗り込む。外の空気とは比べ物にならないくらいに涼しくて、私は思わず安堵のため息を吐いた。

「大丈夫だったか？」運転席に座る源次げんじさんは後部座席の私にバツクミラー越しで目を合わせてきた。

「はい、なんとか……。少し怖かったですけど……」私は目を伏せて言った。

「そうか」

源次さんの声はとても低くて大人の渋さがあった。髪は少し白みがかっていいけど、ぴしっとした黒スーツを着て、そのスーツの形から窺うことが出来るがっしりとした体格によって、決して年老いて見えることはなかった。

「尾行者を無事捕まえることが出来ていたのなら、今から研究所へ向かい、そこで捕えた者への尋問を行うが、異論は無いな？」

「はい」

そう私が頷いた時、源次さんの携帯電話が着信音を発した。

「捕えたか？」

私は相手側の声を聞き取ろうと思ったけど、残念ながら相手の声が小さすぎて無理だった。私はおとなしく変化しない窓の外を眺めた。

「……そうか。了解した」と言って源次さんは電話を切った。

「どう、でしたか？」

「捕えることは出来た」

「本当ですか！ 良かった……」私は安心して思わず微笑んでしまっていた。

「……一つだけ、伝えなければならぬことがあるんだが、良いか？」

「なんですか、源次さん？」

「私たちが捕えたのは、君と仲の良い子だ」

「え……？」

「飛鳥原彩音、テスター、君の友達だろう？」

その言葉は私の安心やら安堵やらを一瞬にしてひっくり返し、突然底なしの泥沼に突き落とされたかのように身動きの取れない思考が、私の頭の中でうごめいていた。

考えようとすればするほどに思考は飲みこまれていった。驚愕と絶望に……。

「どうして……!？」

唇は震え、出てきた声はおよそ言葉とは言えないもごもごとした何かだった。

そんな私を乗せて、車は発進する。

Not Scene

〔藤野理衣の想い…3〕

大都^{だいと}生物科学研究所。

私が生まれた、いや、製造^{つく}された場所。

そして今この場所で、私たちの研究所について調べまわっていた不審な人物に対して尋問を行おうとしている。でも、それはとても不可解な事。なんで、研究所に忍び込んだり、過去の記録を調べ上げたり、私の後をつけたりしたのが、彩音^{あやね}ちゃんなの……？

私はモニターがたくさんある部屋で一人、中央のモニターに映る彩音ちゃんを凝視していた。彩音ちゃんと同じ部屋にすることがためられたから、私はモニタールームから見ていることにした。

画面に映る彩音ちゃんは目隠しをされ拘束されている。

暗い暗い部屋。彩音ちゃんを照らすのはたった一つの照明。それは彩音ちゃんの頭上から、彩音ちゃんだけを照らしている。

暗くしているから画面から見限りでは分からないけど、光で照らされた彩音ちゃんの周囲には、十数人の人が闇に紛れている。

その紛れているうちの一人が彩音ちゃんに質問し始めた。

なぜ？

どうして？

なんのために？

どのように？

いつから？

質問に淡々と答える彩音ちゃんが、とても印象的だった。意思が強い彩音ちゃんの言葉は断定的で揺るぎないものがあったのだけど、この彩音ちゃんの応答は、いつもにも増して語調が強く、威嚇的な何かを感じた。

彩音ちゃんがどこから情報を手に入れたのかは一言も口に出そうとはしなかったけど、この施設で行われている実験の内容については粗方把握していた。

しかしもちろんこちら側としてはそんな事実を否定するしかなく、案の定、研究員の誰かが彩音ちゃんに「そんなわけないだろう、バカか」と嘲笑したけど、彩音ちゃんはそれを鼻で笑って一蹴した。研究所を調べ上げたことも、過去の実験データを手に入れようとしたことも、彩音ちゃんは話した。

彩音ちゃんの口から出てくるこの研究所のことについての詳細や、実験の概要が余りにも的確すぎて、研究員たちみんなが息を呑んだことが、時折スピーカーから流れてくる小さな舌打ちや静かな沈黙が物語っていた。

正直、私も驚いた。

ここまで知っているんだったら、もう私の正体も知ってるんじゃないか。

私はそう思った。

だから思わずマイクのスイッチをオンにして、口を開いてしまった。

「彩音ちゃん」

「……その声は、理衣か……？」

「うん、そうだよ」

彩音ちゃんの表情が変わった。さっきまでは勇ましいライオンが牙をむき出しているかのような威圧感を持っていたのに、それが一瞬にしてしぼんだ。目隠しが装着されているから、何とも言えないけど、少し悲しげな顔だと思った。

「……どうした？」

「彩音ちゃんは、最初から私のこと知ってたの？」

「理衣のこと、っていうのはどういうことだ？ 理衣がここに入りしているのを発見したのは、つい最近のことなんだが……」

「そっか……」

その口ぶりから、どうやら彩音ちゃんは知らないようだった。ならば、と私は言葉を付け加える。

「彩音ちゃんは、ここを調べてどうしたい、の……？」

彩音ちゃんはしばらく押し黙っていた。唇を噛んで、何かをためらっているようだった。

とても長い沈黙がスピーカーから流れてくる。

私はそんな彩音ちゃんを画面を通して見詰めていた。逆に、目をそらすことなんて少しも考えなかった。

「私は、複製人間クローンの実験をやめさせたい。それだけだ。私は何も間違っているようなことを言っていない」

そう、きっぱりと答えた。そこには確かな意思の強さの、覚悟の堅さがあった。

その言葉が彩音ちゃんの掲げる信念。そしてその信念は、私の存在を完膚なきまでに否定するもの。じゃあ、もし私が彩音ちゃんに真実を教えてしまったら、彩音ちゃんはどうするんだろう……？

私は迷った。

でもここまで来たからには、逆にここで私が打ち明けないことに対しての違和感があった。

だから、私は言った。言ってしまった。

「……彩音ちゃん、私を否定するんだね……」

「理衣が複製人間クローンを容認するんだったらな……」

「そういうことじゃないっ！」

思わず言葉に熱が入る。マイクのスイッチを押している右手の人差し指にもぐつと力が入ってしまっ、少し痛かった。

「私が賛成するとか、反対するとか、そういうことじゃないの！」

だって、私が……私が複製人間クローンなんだから！」

一際色の濃い静寂だった。

彩音ちゃんは当惑した表情をしていた。研究員たちも戸惑ったように囁きあい、それらの声はスピーカーを通してすべて筒抜けだった。

すると私の背後で扉が開く音がした。私はさっと振り向くと、それは源次さんだった。

彼は私の肩をポンと叩くと、自らマイクのスイッチボタンを押し

て言った。

「飛鳥原彩音、お前を解放してやる。だがなここでお前が口にしたことは、他の奴に言うな。我々はお前を監視する。もし誰かに喋ったりでもしたら、命が無いと思え」

まるで機械のように無機質で何の感情の起伏も見られない口調だった。そんな源次さんの声にはえもいわれない圧迫感があった。鼓膜ごと押しつぶされていくように錯覚してしまった。

源次さんは私の方を一瞥した。それは私に対しての合図でもあった。「何か言うことはあるか」という無言の問いかけだった。

私は源次さんと代わる。

「彩音ちゃん、出来ればこのことは勇人くんには言わないでほしいの。あと、彩音ちゃんがもしどうしても私みたいなのが許せないって言うのなら、勇人くんには近づかないで……」

震えた声で私はそう告げた。

彩音ちゃんが研究所から出ていった後、私は源次さんが運転する車に乗って与えられているマンションへと帰った。

走行中、私は一言もしゃべろうとはしなかった。

研究所を嗅ぎまわっている人を捕えることが出来た、ということ素直に喜べるはずもなく、嬉々と話すなんてことは到底無理だった。私はショックだったのだ。

そんな私を察してくれたのか、源次さんは何も話しかけてこなかった。ただ黙々と運転していた。

走行音だけが車内に切なく響く。

私は何かから逃げるように、ひたすら窓の外の景色を目で追いかけた。

色んな光景が目に入った。

下校途中らしき生徒たち、買い物袋を提げた女の人、犬の散歩をしながら談笑する人たち、自転車にまたがって颯爽と走る人、手をつないで歩く親子。

世界は、こんなにも平和だった。

この穏やかな世界の中で、私だけが世界にはじかれている気がしてしまふ。

私は生まれてしまった。これは間違い？

「どう、なんだろうね……」自然に口から言葉が漏れた。

翌日、私は普段よりも遅めに家を出た。あまり眠れなかったせいか、朝、いつも通りの時間帯に起きることが出来なかった。

由乃さんが用意してくれていた朝食を食べてから、私は登校した。マンションをでて、歩き慣れた道に行く。

7月だけあって、外はやっぱり暑い。首もとや服の中が軽く湿ってきているのが分かる。夏の気温は遠慮なしに、私たち人間に汗を

かかせようとする。

人間？

そう、人間。

こういう風に他の人たちと同様に、「暑い」という感覚を共有したり汗をかいたりする時、私は少しだけ救われたような気持ちになる。だってそういうふうには他人と同じことをするだけで、私だって真正正銘の人間だ、と思いきむことが出来るから。

周りが認めなくても、私は私。私はひと。私は人間。私は……。

幸いにも私の通学路は木陰で覆われている個所が多くて涼しかった。これもこの巫女寺市が市内緑化のために色んな活動を行っているおかげ。私は心の中で感謝をした。

しばらく歩いていると、私と同じ学校の制服の人が見つけた。

その後ろ姿はともに見覚えがある。すらっと細くてしなやかな体、純粋な黒色をした長い髪を頭の後ろで一つに束ね、髪の下から見える綺麗な首筋。

「彩音ちゃん……」

私の声に気づいて彼女は振り返る。その長い髪が大きく揺れた。

「……理衣、か」

名前を呼びあったものの、お互いに気まずい雰囲気になってしまふ。それは仕方が無いことだった。昨日あんなことがあたばかりなんだから、すぐに気を許して打ち解けるなんてことはあるはずがなかった。

私は何も口にすることは出来ず、いろいろと迷った末に、俯きながら静かに彩音ちゃんの横を通り過ぎた。

彩音ちゃんも私に何か話しかけてこようとはせず、黙々として私の横に並んで歩き始めた。

結局そのままお互いに何も会話することなく、学校に着いてしまった。

下駄箱で靴を替えて、私と彩音ちゃんは廊下をあるく。いつもは気にならないリノリウムの床に反響する足音が、今は異質なものに

感じられた。それは今日という日が、“いつも”とは違うからなのかもしれない。

階段を上り教室が見え始める。教室の扉を開けて中に入る前に私は呟いた。

「昨日のこと、守ってね」

それだけ言って、私は自分の席についた。

放課後。

まず私が驚いたことは、勇人くんが自ら彩音ちゃんと放そうと一生懸命頑張っていたこと。休み時間のときも勇人くんはどうかして彩音ちゃんと会話しようとしていた。でも彩音ちゃんは私との約束通り、勇人くんに近づかないようにしていた。

同時に彩音ちゃんが勇人くんに近寄らないということは、彩音ちゃんはやっぱり私の存在を受け入れてはくれなかったという暗示でもあった。

約束を守ってくれて嬉しかったのか、存在を否定されて悲しかったのか、感情が複雑に混じり合って私にはよくわからなかったけど、ただ胸が何かに押しつぶされるかのようなそんな思いを味わったのは確かだった。

勇人くんは彩音ちゃんを呼びとめて「今日、部活来る？」と質問していた。

振り返った彩音ちゃんと私の目が合う。このことに勇人くんは氣付いていない。

私との無言の会話の後、彩音ちゃんは「……ごめん勇人、用事あるからいけないんだ」と言った。「あ、うん。わかった」と勇人くんは返した。

そして彩音ちゃんは勇人くんに背を向けて去っていった。

この時私はある恐怖を覚えた。

もしこのまま勇人くんが彩音ちゃんと追いかけて行ってしまったらどうしようかと、そう思った。私はそんな想像を追い払って、勇

人くんの傍に寄ってその服の袖をきゅっと引っ張った。

それはとても卑しい行為に思えたけど、引っ張らずにはいられなかった。私には、このまま勇人くんが私のもとから去って彩音ちゃんを追いかけていってしまうことが怖かった。

「勇人くん、一緒に部室行こう？」と私は口にした。

「うん、行こうか」という言葉が帰って来た時、私はとても安心した。よかった、勇人くんはここにいてくれる、と安堵した。

私はまるで子供のように、思わず顔を綻ばしてしまった。

その日の部活動は学校の屋上で写真を撮った。

私は、勇人くんと一緒に写真を撮るこんな時間が昔から好きだった。

ただ今日の勇人くんはいつもより少し集中力が足りないようで、何度かうわの空になっていた。私はそんな勇人くんの隙について何回か勇人くんをフレームの中に収めた。

勇人くんは嫌がってたけど、私はレンズを通して見る勇人くんも好きだった。

この日の活動は、結局私が一番写真を撮ったのかもしれない。

部活が終わって私たちは下校した。

勇人くんと出雲さんは方向が一緒なので、途中で私は2人と別れる。

時々蝉の声が聞こえてくる夕暮れのなか、私はいつもよりも少し上機嫌になりながら、帰路についた。

N o t S c e n e

〈藤野理衣の想い..5〉

(前書き)

遅くなって本当にすみません！
こんな僕の作品を読んでくださって、ありがとうございます……。。

翌日、体調があまりいい状態ではなく、目覚めが少し悪かった。身体全体がだるく、まるで神経が通っていないかのように動かしづらかった。別に今日は重い日ではないはずだから、少し不思議に思っ
て由乃さんに相談した。

すると学校から帰った後に研究所にいった検査をすることになった。もちろん私もそうした方がいいと思った。あきらかに身体に異常がある。なぜか朝食の際にお箸さえ扱えなかった。仕方なくスプーンを使ったけど、手が震えた。

私は、私の手が怖かった。指先が怖かった。

自分のものじゃない感触。粘土のような曖昧としたものが自分の腕の先についているような感覚。

おかしい。

私の手？

私の指？

不安が私を襲った。

この日の登校も普段よりも確実に遅めだった。理由は支度に時間がかかったから。それだけの理由だけど、私にとっては重大な問題。学校に行っても気が気じゃなかったので授業の内容もうろ覚え。彩音ちゃんのことや勇人くんのこと気がなくなったけど、やっぱり自分の身体の変調について考え込んでしまい少し暗鬱になった。

気がつくと放課後。

私は部活に出ないでそのまま帰ろうかと思った。

でも勇人くんの話だと、凜ちゃんは調子が悪くて部活には来れない、という。

つまり私の勇人くんの二人きり。

そんな誘惑に負けてしまった私は部活に出ることにした。

——研究所は夕方でも大丈夫だよね……？

二人きりの静かな部屋。少し埃っぽいけど、しっかりと整理された部屋。窓からは太陽の光が余り入ってこないのので、部屋の中は電氣をつけないと薄暗い。部屋の中央には生徒用の机が4つ組み合わされて、一つの大机となっている。

「——勇人くん。今日は何するの？」

私は何気なく質問したつもりだった。

そして返ってきた答えはとても意外なもの。

「こ、これからさ、理衣の家に遊びに行くこと出来る、かな？」

いつだったのだろう、勇人くんが私の家に来た最後の日は……。

正直私は正確には覚えていない。ある時から、お互いにそういうことは疎遠にし始めた。

勇人くんの気持ちは分からない。そういうのが億劫になっていったからなのかもしれない。けれども少なくとも私は、ただ恥ずかしくなり始めた。勇人くんを友達じゃなくて、異性として認識し始めたからだと思う。

だから互いの家にいくことなんて中学生になってからはほとんどなかった。ましてや今は高校生で、私は私でどんどん成長しているし、勇人くんだって成長している。

もう子供じゃない。

でも、やっぱり勇人くんが遊びに来たいって言うてくれたのは嬉しくって、どうしても招待したい、という内容のメールを由乃さんに送った。

返事のメールの文面は、あまり好意的ではなかった。けど、渋々承諾してくれた由乃さんに私は心の中で精一杯ありがとうって言うた。

「……勇人くん、来る？」

本当に久しぶりだった。

この日は研究所に行く予定だったために、マンションには源次さ

んがいたらしい。

私の突然なお願いにより、源次さんはいた仕方なく私のお父さん役を演じてくれた。でもそれは元々のことだった。母役の由乃さん、父役の源次さん。本当はそう割り振られていた役柄だったけど、源次さんは忙しい人で、マンションにしていることなんてほとんどなかった。

だから勇人くんも源次さんにあった時は目を丸くしていた。おそらくこの機会が初めての対面、私は「今日ね、お父さんもいるんだ」といって源次さんを紹介した。

由乃さんはメールではあまりいい顔をしていない様子だったのに、私と勇人くんのために近くでケーキを買ってくれていたらしい。

本当のお母さんでは決してない。

でも由乃さんはいつも私に対して優しくかった。でもそれは愛情と言うより、同情に近い気もした。

人間ではない人間。

そんな私を、由乃さんはあたたかく見守ってくれた。

感謝しなきゃいけない。

しばらくお茶をしながら、リビングで談笑をしていた。

由乃さんを入れての談笑は滞りが無かった。由乃さんは元来おしゃべり好きな人なのだ。遠慮していつも私をそっとしておいてくれる由乃さんも、勇人くんという話相手ができて少し楽しそう。

いつしか話題は勇人くんが持ってきたアルバムに。

「そう。一番最初に埋めたアルバム。だからちよっと下手っぴだけどね」

そう照れ気味に言ってペラペラとめくると、数ページ目でそれを見つける。私は反射的にそのアルバムの上に体をのりだして、写真を体で覆った。

「ああ、ちょ、理衣ー。それじゃ、写真が見れないよ」

「み、見なくていいよ……!」

「理衣の小さい頃の写真、もっと見たいわ」

ダメだよ！ 私、なんで髪の毛を二つにくくってるの！ しかも三つ編み！！　うう……、恥ずかしい……。

特に問題はなかった。

楽しい時間だったし、実際、時が経つのが早く感じられたほどだった。

そのまんまなにもなければ、私は良い一日で終われたはずだったのに。

何も知らない、知るはずもないそんな純粹の質問。

「そういえばこの家、写真、ありませんね？　家族写真とか飾ってないんですか？」

私も由乃さんも源次さんも、みんな反応した。

家族写真。

そんなものはあるはずなかった。

だって、家族じゃないんだから。

私も由乃さんも源次さんも、誰一人血が繋がっていない、ただの赤の他人なんだから。

だから、私たちは反応した。

空気は一瞬にして張り詰めた。何かが触れればすぐに割れてしまう風船。部屋のなかには不自然な沈黙しかなかった。

結局変な形で、勇人くんを帰した。

私は取り繕うような笑顔だったんだろう。事実勇人くんが帰った後に、私はふさぎ込んだ。

源次さんや由乃さんに研究所に行くようにせつつかれたけど、私は自分の部屋で枕に埋もれた。息が出来なくなるくらいに沈んだ。枕にうずもれた程度の息苦しさなんて、何回も味わってきた。

私は勇人くんと同じ、「人間」なんかじゃない。

複製。所詮、コピー。

私は恨むべきなのかな……？　私をつくった人を？　私がここに
いる運命を？

もう分からない。

頭が痛い。

体の不調がぶり返してきた。

由乃さんと源次さんに言われたとおり、研究所へと向かう。そんな車の中で私は泣いていた。声を上げないで、静かに……。

研究所で検査した結果も、私を地獄のどん底に落とした。

身体機能が弱まっている？

異常発生？

やめて。やめてやめてやめてやめてやめてやめてやめてやめてやめてやめてやめて。

もう、嫌だよ……。

私を押しつぶす何か。

それは肉体的な苦痛と精神的な苦痛の両方。

彩音ちゃんのが私を否定したように、私は否定されるべきもの？

そんなの嫌だよ。ひどいよ。つらいよ。

私は生まれない方が良かった……？

私を製造^{つく}った人を恨む……？

そんなこと出来ない。私を生み出した人がいなければ、私はこの世界にいなかった。勇人くんに逢えなかった。カメラの撮り方なんて知ることが出来なかった。写真部なんて入れなかった。みんなと遊ぶことなんて出来なかった……。

恨むことなんて出来ない。由乃さんは私に優しくしてくれる。源次さんだって私のワガママをきいてくれた。そんな人たちを恨めだなんて、出来るわけがない……！

でも、こんな私を世界は認めなかったらしい。

その証拠に私の身体が静かにその機能を停止し始めている。

なんで？

なんで……私なの？

私は生き足りないよ。もっと生きたいよ。勇人くんと一緒にいたいよ。

だめ？

だめなの？

人のお腹の中から出てこなかっただけで、私は罪を背負ってるってこと？

そんなの……、不公平だよ。

私は悪いことしてない。私は私なんだよ……。

たとえば朝起きるのが遅くて、その上体調が悪くても、私は学校を

休もうとは思わなかった。勇人くんと逢えないのは嫌だった。

由乃さんはもちろん止めたきた。けど、私の気持ちを理解してくれている由乃さんは、私を学校に行かせてくれた。

箸をうまく扱えなくなりつつある私の体調の事を気遣って、お弁当は手でつかんで食べられるサンドイッチにしてくれた。

由乃さんの心遣いは、とても嬉しかった。由乃さんが本当のお母さんだったら良かったな、と思う。私の味方をしてくれる由乃さんが私は好き。

マンションから出ようとしたところで車に乗って私を待っている源次さんにあった。私のことを学校まで送ってくれるという。源次さんも私の体調不良を心配して、マンションの下で待ってくれていたのだ。

そんな源次さんも私は好き。何を考えているかは分からないところがあるけれども、どっしりとした頼れる雰囲気のある源次さんは、世間でお父さんと呼ばれている人たちと合致すると思う。

冷えた車内はとても心地よかった。

源次さんは何も言わずに黙々と運転している。

私は外の景色を、意味もなく眺め続けた。

変わらない街並み。変わらない日常。変わらない世界。

たくさんの人が目に映る。この人たちにも、それぞれの生き方があって秘密があって考えがあって……、自分の命を輝かして日々を生きているんだな、と思った。どうでもいいかもしれないけど、私はそう思った。

様変わりしない風景、でも地球は回る。

不思議だった。

ぎりぎり学校に間に合う。

昨日の気まずい空気を引きずるのは嫌だったから、教室に入って勇人くんを見つけると笑顔で「おはよう、勇人くん」って挨拶をした。

せめて勇人くんという時は楽しい気持ちでいたい。そんな私の願い。

放課後の部活はまたしても二人っきりだった。

だから、

「そろそろこの部活も廃部かな……？」

と勇人くんが切り出した話題で笑いながらおしゃべりをした。卒業した写真部の先輩たちのことなども話に出てきた。やっぱりこんなちよつとした瞬間が私は、好き。

その日の部活はナシになった。部長は勇人くんだったので、そういうところは自由に出来た。

勇人くんの提案で学校帰りに少しファーストフード店に入ることになった。

どうやら勇人くんは少し街の方で時間を潰していたいらしかった。理由を聞くことは出来なかったけど、私は勇人くんに任せることにした。

お店に入って適当に注文して席に座る。

店内の雰囲気は悪くない。私と勇人くん以外のお客さんもちょうどいい塩梅だったと思う。

テストはどうだったとか、いつも利用しているカメラ屋の店長がとか、他愛もない話だった。そういう時こそ時間は早くに過ぎるものなのかもしれない。

時計をちらつと確認するとどうやら1時間ちよつと経っていた。

お手洗いのために少し席を立て、戻ってきたときには勇人くんの姿が無かった。でも鞆があるということはすぐ近くにいるということ、また戻ってくるという意図があるということ。

店の入り口近くを覗いてみると、そこには誰かと話している勇人くんの姿。よく見たら一緒に話している人は凜ちゃんだった。

「あれ、凜ちゃんだ。体調はよくなったのかな……？」

私は勇人くんの鞆を持って、外に出ることにした。

2人の話し声が小さいけど聞こえてくる。

「ん？」

今、私の名前が出てきたような……？

「勇人くん？」

軽く勇人くんの肩をたたく。

たったそれだけなのに、振り返った勇人くんの表情は何かに怯えているかのようにとても硬かった。

「勇人くん、店内からいきなりいなくなったから、びっくりするよ、もう。あ、凜ちゃん。具合の方は大丈夫なの？ 風邪気味だつてきいていたけど……」

凜ちゃんはどうかやら体調が回復したらしかった。元気そうでなにより。私は安心した。

「――さっき、凜ちゃんと勇人くんは何を話してたの？」

「え、いや、別になにも……」

「でも、ちらっと私の名前が聞こえた気がしたんだけどな」

「それはたぶん聞き間違いですよ理衣先輩！」

「……そっか。凜ちゃんがそう言うのなら、私の聞き間違いかもしれない」

確かに、私の聞き間違いかもしれない。もともと今日の私の体調はあまり良くなかったし、やっぱり幻聴だよね……。

「あ、あのさ理衣」

「何？ 勇人くん」

「僕さ、用事が出来ちゃったから、ここでお別れでもいいかな？」
そう言われた時は少し残念だった。

どちらかと言えば本当はまだもう少し一緒にいたかったけど、用事だったら仕方ないし……。

「……うん、わかった。用事があるんだったら仕方が無いよ」

「ありがとう、理衣……」

ここでお別れでも一杯話せたから、楽しい一日だった。

本当は安静に休むべきだった私が無理して学校にいった甲斐があった。長い時間一緒に談笑するだけでも私の活力の補充としては十

分すぎるほどだった。

「じゃあ、私、帰るね」

「うん、おつかれ」

「おつかれさまです」

勇人くんにだってしたいことがあるんだろう。

わざわざ私と一緒にいてくれて優しくしてくれる勇人くんを束縛するなんてこと、私には出来ないよ。

2人に背を向けて歩き出す。

楽しい余韻が私を笑顔にしてくれた。

あることを思い当って立ち止まる。

「今日は……楽しかったよ！」

そう言って私は手を振った。勇人くんも振り返ってくる。

ありがとう、勇人くん。

2人と別れて少し経った後のことだった。

目の前にはもうマンションが視えている。そんな時、私の携帯電話に電話がかかってきた。

源次さんからだった。

なんだろうと首を傾げながらも電話に出ると――。

「飛鳥原彩音が中原勇人と接触している」

「……え？」

楽しい余韻に満ちた輝かしい世界は一瞬にして、暗転する。

N o t S c e n e

〈藤野理衣の想い..Last〉

(前書き)

理衣編終了です。

研究所について調べようとしたことや研究内容を知っているということから、彩音ちゃんには数人の監視者がいたはずだった。しかしどうやらことごとく撒^まかれていたらしい。

彩音ちゃんが捕えられた次の日のこと。放課後、学校の周辺で待機していた研究所に属する黒服の人は、学校の正門から出てくる彩音ちゃんを見なかったという。裏門も同様だったらしい。

源次さんに説明を受けていた車内では、ずっと心が騒いでいた。正直に言ってしまうば、私は腹が立っていたのだと思う。

どうして彩音ちゃんに撒かれるのか？

どうしてちゃんと監視していなかったのか？

どうして……どうして私に教えてくれなかったのか？

今日も同じように学校周辺で待機していたらしい。人員を増やして。でもそんな網もまったくの意味をなさず、彩音ちゃんはするするとすり抜けていってしまったという。

探して探して。見つけたのは駅前の噴水公園、独りでベンチに座り込んだ姿。そしてしばらくして彩音ちゃんに近寄っていく二つのシルエット。出雲さんと勇人くん。

報告はすぐに源次さんのもとへと届き、そして私のところへ。

もちろん、私の心中は穏やかなわけではない。

彩音ちゃんは勇人くんを避けていた。あれはようするに私の存在を否定していたということ。だって私はこの口で言った。

——彩音ちゃんがもしどうしても私みたいなのが許せないって言うのなら、勇人くんには近づかないで……。

じゃあ彩音ちゃんは私のことを認めてくれた？ 許してくれた？

それなら私に話せばいいこと。

じゃあなんで勇人くんに近づくの？

私は巨莫な不安に押しつぶされていき、胃がきりきりと痛んだ。

いつの間にか爪が食い込むほどに手で拳をつくっていた。

信号が赤になる。源次さんが運転する車が止まる。

私は信号に睨む。早く青に変わって！ 早く！ 早く早く！ そう念じた。

もう気が気じゃなかった。このまま車を飛び出して走っていかうかと思ひドアのカギに手が伸びたところで、信号は青に変わり車は動き出す。もし変わってなかったら、私は衝動に駆られて走り出していたに違いなかった。そこまでに私は焦っていた。

「落ち着け」

源次さんはバックミラー越しにこっちを一瞥してから言った。

「……それは、難しい話です」

それ以外の言葉を発することも出来ず、ただただ焦りという沼に体がずぶずぶと埋まっていくような錯覚が私を襲った。体半分はすでに埋まっていて、それでもなお徐々に私を呑みこんでいく。とても息苦しい状態。周辺を手でまさぐるも、捕まるものは藁すらもない。

私は、沈んだ。

日は傾きかけで、空は橙色に染まっている。

この時間帯の駅前には人通りが多い。

車は公園の入り口付近で停車する。

車が止まったその瞬間に私はドアを開けようとしたけど、源次さんに呼び止められた。

「あの女は危険だ。私も同行しよう」

「いや、大丈夫です。一人で行きます」

そんな私の言葉に源次さんは苦々しい顔をした。幾度も監視を潜りぬけた彩音ちゃんを警戒しているようだった。

「そうか……。ならば、これを」

源次さんは常に自分が携帯しているそれを私に渡してきた。

黒く煌めく鈍い輝きを帯びた銃。私はそういうのに詳しくは無い

から、種類とかはよくわからなかったけど、少し小さいように感じた。でも、それを手渡されて受け取った瞬間に、確かなズシリとした重みが私の掌にあった。

これが銃の重さ。人の命がろうそくの火のように視えてしまう、そんな罪悪が私の手の中にあった。

「何度も言うようだが、あの女は危険だ。気をつけろ」

銃を前にしてすらすらと言葉を口に出来るほど私は強くななんてない。

驚きを隠せなかった。

「……はい」

私はそれを学校鞆に押し込み、鞆を肩にかけて、車から降りた。

木々が等間隔に整列し、洒落た石造りの地面や欧州の国を彷彿とさせる外灯が立ち並んだ、巫女寺市が誇る公園が目の前にある。

駅前にあるだけあって、この公園の時計台は待ち合わせによく利用され、ブランコやジャングルジムなどの子供の遊び場は、わんぱくな子供たちとその母親である主婦たちの溜まり場。その二つに属さない噴水ゾーンは、夜になれば2人組男女の人気スポット。

報告を聞く限りでは、彩音ちゃん・勇人くん・凜ちゃんの三人は噴水周辺に噴水を囲むようにして設置された幾つかのベンチの一つに並んで座っているとのこと。

まだ太陽は沈んでいないため、噴水のライトアップまではまだ全然時間がある。たぶん、あまり人はいないんだろう。だったら私は少し慎重に進むべきだ。人が少ない所に、私の気配を晒してしまえばあからさまに人がいますよって教えているようなもの。

私は出来るだけ、3人にバレないように近づきたかった。理由はもちろんある。

彩音ちゃんが勇人くんと“私に隠れて”逢っているということが一番の不安だった。勇人くんが私と別れる寸前に凜ちゃんと何かを話していたことは、もしかしたらこのことなのかもしれない。2人

が私に隠そうとしている仕草や、2人の会話に私の名前が出ていたことも、この仮説で説明がつく。

私は意図的に「はぶられた」ということ。

そういうことをするには、私がいれば悪いことが生じるということ。

そしてそれは恐らく……。

驚かすためとかそんな幼稚な行為のためではない。

3人の会話を聞くために、私は、忍び寄る。

立ち並ぶ木々にそって歩いていたら、ひらけた場所に出る。

中央には噴水。

そして目の前のベンチには、同じ学校の制服を纏った3人の背中。この噴水に至る道は8つあり、そして私は3人の背後から近寄れる道を選んだ。

そっと、本当にそっと。全神経を敏感にして、私は緊張しながら忍び寄る。

風が木の枝を揺らしていき、葉の擦れ合う音が耳に入ってくる。そんな自然の音に混じるように、目の前の話し声も一緒に入ってくる。

頭の中で予想はしていた。けど信じたくない自分もいた。だから私は自分の耳を疑った。

彩音ちゃんの口から聞こえてくる言葉に、どうしてクローンなんていう単語が混じっているの？

——そんなの考えなくたってわかる。

私は信じたくない！

——でも耳は反応してるし、頭で理解してもいる。

だって彩音ちゃんは友達だよ？

——裏切られたんだよ。

嫌だよ。私は、勇人くん知られたくない！ 私は勇人くんと一緒に、普通の人たちみたいにして過ごしたいのに、そんなことされ

たら……!!

——今、彩音ちゃんが話したよ。ほら。

「——理衣はな、複製クローンされた人間なんだ……」

私の理性は私自身によってかき消されてしまった。震える体、頬の上には冷たい涙が流れていた。鞆をその場に落してしまう。

「彩音ちゃん、ひどいよ……!」

押し出されたかのような声。

3人は私に気づいて振り向いた。みんな同じように驚きを隠せない様な色をして、私を見詰めてくる。

「言わないって約束したのに、何で……どうして! どうして、言うの!!」

私は喉が張り裂けそうなほどに叫んでいた。感情の赴くままに動く体。

勇人くんは何か言っているような気がした。でもそんなものはない。聞こえない。知らない。私は私じゃなくなってる。私は私を扱えない。

こんなに怒っているのは初めてだった。

「……絶対に許さない!!」

これは本当に私の口から出た言葉?

私の手にあるものは何?

私は何をしてるの?

私は——。

わた——。

赤かった。

凜ちゃんの悲鳴で我に返ると、そこはまるで異世界に迷い込んだようだった。いや、パレルワールドかな。

同じ風景。変わらぬ葉の擦音。
でもおかしい。

だって、彩音ちゃんが……。

あはは。嘘、だよな？

違うの？

そうだよな、嘘だよな？

勇人くんなんでそんな目をしてるの？

あれ、私の腕が赤色に塗られてるよ。

凜ちゃん、どうしてそんなに泣いてるの？

ゴトン、と重々しい音。

ベンチにピストルが落ちている。その取っ手には私の手の温もりがあるはずで――。

私は再びソレを手にとる。

「もう、嫌だよ」

こんな自分、“世界”はいらないよね。

そんな目で見ないでよ、勇人くん！

私は、私に向けて、私のその手で、私を殺すために、銃の引き金を、引いた……。

N o t S c e n e

〈藤野理衣の想い..L a s t〉

(後書き)

飛鳥原彩音編へ……。

N o t S c e n e

（飛鳥原彩音の想い..1）

（前書き）

彩音編スタートです。

よろしくお願いいたします。

義務教育課程（高等学校までが義務教育に指定されている）期間も折り返し、私が高校2年生を終えた頃だった。進級の前に私のもとへと届いた通知。それは「あなたは過去への留学生に選ばれました」というもの。これは当然の結果である。高校二年次の学年主席を対象とした過去留学権。このために私は時間を余すことなく自分の能力の向上に力を尽くして、学年主席という座を勝ち取ったのだから。

私はどうしても過去に行きたかった。

しかし、その理由は禁忌に触れるもの。

――“過去の改変”。

過去への留学は、簡単にまとめてしまえば「日本史」の勉強の延長線上とも言えるものだ。いや、どちらかといえば「現代社会」や「政治・経済」といった科目だろう。

過去を学び、そこから反省点を見出して、私たちの世界をさらに発展させていく。発展の担い手である若者たちへの教育が見直され、修正が施された今、過去の若者たちの自堕落ぶりを反面教師にするという意味合いも込められている。

過去への留学生に選ばれた者は、遡行までに自らが学びたいテーマを設定し、遡行先での情報や状況などを観察して、レポートを提出する義務がある。私は熟考に熟考を重ねて、上の者たちが好んでいそうなテーマを設定した。

だが私が過去でしたいことは、椅子に座っての勉強や多種のメディアを利用して過去の経済情勢をつかむことなどではない。

私は私のために、過去へ行く。

止めさせるために、過去へ行く。

あの時の悲しい思い出を私は払拭するため。

過去に行って、私は複製人間クローンの実験を止めに行くんだ。

父さん、母さん、そしてユウ。
待ってて欲しい。
行ってくる。

私は半世紀まえへと送られた。

“ここ”での私の身の振り方は、すべて指定されている。何もかもが用意されているのだ。

住居、学校、さらには私の住民票でさえ、“私の時間”の上の人たちによる手配で問題一つなく、私は円滑に留学生活を送れることになっている。

「学校の1学期間」という決められた期間の間に、私は“ここ”の政治や経済の問題点を見出してレポートを書きあげなければならぬ。が、それは苦ではない。恐らくだが、その程度のことはすぐに書きあげることが出来る。私はそんなことに時間を取られなくなかったから、事前に学ぶべきことは学び、たくさん蔵書も読み漁った。

私は過去に來た理由は、勉強がしたいといった本来の学生の主たる意識の類では決していないのだから。

とりあえず、私が通うことが指定されている学校の始業式まではまだ1週間ほどある。私はこの空いた時間を複製人間の調査に使うことに決めた。

とは言ったものの、やはり世間の目に触れることは許されない実験。調べるにしても、闇雲では何の情報も得ることは出来ないに決まっている。だから、私は父さんと母さんが保有していたデータを手に入れてきた。

研究員だった2人の資料から私は様々な情報を得ていたのだが、その中には過去に実験が行われていた施設の名前と住所が記載されていた。そして偶然なことに——いや、もしかしたらこれは偶然ではなく必然なことかもしれないが——私の滞在している巫女寺市に

も研究所があるということだった。

もちろん突然踏み込むだなんて愚かなことはしない。どう考えても外見上から違法な実験を行っていると分かる様にはなっていないだろう。

じっくりと調査を始めることを決心する。

タイムリミットは三カ月弱。

大丈夫だ。そう、大丈夫なはずだ。

私ならいける。私なら止められる。

信じる、自分を。

学校が始まった。

私はとりあえず編入生という扱いで二年生のとあるクラスの一員となった。

ちなみに私は高校2年生を終えているので、一つ下の学年での勉強という形になる。これは過去と現代の勉強内容の違いを比較しやすいからという理由らしい。事実、勉強内容はほとんど異なっていた。これが「ゆとり」というものののだろうか？ 勉強内容の密度とレベルは私の頃と比べてしまうと格段に低いように思えてしまった。

これは社会問題になるのも無理はないと納得してしまったいた。

まあ、この時代はこんなだったとはすでに知っているので驚きはしなかったが。

とりあえず私は無難にクラスに溶け込もうとした。高1から高2になるときにクラス替えがあったらしいから、友達になるのに苦労はしないだろうと高をくくっていたら、そうでもなかった。高1の際に形成されていた友達グループらしきものが、そのまま続いているんだろう。

私に話しかけてくれる人もいたが、それは編入生という新鮮さに群がっているだけであって、始業式の日から数日経った後には、私

を気にかけてくれる人は消えていった。

——まあ何の支障もなく調査が出来るし、別にいいさ。

そう思って私はしばらく一人で行動していた。

しかし。

学校が始まって一週間と少し経って、私は担任の先生に呼ばれた。何故呼ばれたのか見当もつかずに首を傾げ、訝しみながら私は職員室に向かった。

「どうだ、飛鳥原、もう決めたか？」

「……先生、決めたって何をですか？」

「そりゃあもちろん『部活』のことだ。何部に入るか決めたか？」

「部活……？」

「ああ。話してなかったっけか？ この学校ではな、みな部活動に参加しなければならないことになってるんだ。他の奴らは高1の時と同じ部活を続けているから、実質決まっていけないのはお前だけなんだ。それでそろそろお前にも決めてもらわなければいけないんだが……」

私は黙った。

——そんな話聞いてないぞ！

部活をやるということは私が使える貴重な時間が浪費されてしまうということ。それは流石に避けなければならない。なのに、部活は強制だという。

「……了解しました。あと少しだけ時間をもらえますか？」

先生は眉をひそめたが、しぶしぶ了承してくれた。

失礼しました、と言い職員室を出る。

「部活動か……。どうしようか」

時間が取られないものといえはなんだろうか？ とりあえず労力のかかる運動系の部活はパスだな。面倒くさいし。やはりここは文化系だろうか？ 見学していこう。

——吹奏楽部。

「おい平野！ また同じところ間違えただろ！ やる気あるんか

？ 連帯責任でお前らみんなで腹筋200回だ！」

「「「はい、先生」」」

――合唱部。

「いいですか皆さん。いつも言っているように歌唱に大事なのは腹式呼吸です。今日もそのトレーニングをしましょう。今から腹筋を200回やってウォームアップをしておいて下さい」

「「「了解です、先生！」」」

――文芸部。

「インスピレーションを大切にするんだ！ この本を読んでみる！　じわじわとくるだろ、熱い気持ちが……。作者の伝えたいことが胸をゆさぶってくるだろ……。この時の感動を忘れちゃあいけねえ！　そしてお前らも文を書くときには、自分の想いを引き出せ！　感じろ！　大事なのはパッションだ！　だから今から腹筋200回だあ！　私も一緒にやるぞ！！」

「「「押忍！　わかりやした、師匠！」」」

……。

一体この学校はどうなっているんだ？　腹筋を鍛えるのが大好きな学校なんだな。いっそ「腹筋学園」とでも名前を変えたらどうなんだ？

というか、この学校の文学部は時代錯誤も甚だしい気がするし、あの情熱は入れるところを間違えている気がするの、私だけなのだろうか？

「はあ……。困った」

良い部活が見つからない。

いや、一つ思いついた。

「そういえば隣の席の奴、カメラ持ってたよな……。名前なんだっけ？」

教室で私の隣の席の男子の顔が脳裏をよぎった。その手には常に珍しいカメラを持っていた、ということも思い出した。

「写真部か……。行ってみるしかないな」

校舎内を歩き回って見ることに。1階から順に探してみるが、3階まで来ても見当たらない。

「ということは、旧校舎か」

新校舎から旧校舎へと繋がる渡り廊下。

旧校舎という名だけあって、壁の色は少しくすんだりしているが、悪くは無い雰囲気の間所だった。踏むと軽く音を立てる木の床、窓から差し込んで出来た陽だまり、質素だけど排他的な空気を感じさせない壁や教室の扉。

私の頃にはこんなに“暖かい”場所は目にしない。

これも過去留学の特権だな、と私はちょっとした優越感に浸っていた。

するとある文字が目に入った。

「写真部」

そう書かれた看板が部屋の扉の上に据え付けられている。

扉の前に立ち2回ノックをした。

「失礼する」

恐る恐る中を覗いてみる。

が、そこには電気のついていない薄暗い部屋。誰もいない。がらんとしていて寂しさを感じた。

「……いないのか。仕方ない、明日教室で直接聞くか……」

空っぽの部室を尻目に、私は下校することにした。

翌日の朝。

「ちょっといいか？」

登校して教室に入ると、運よくそいつはいた。

「うん。どうしたの？ えっと……飛鳥原さんだっけ？」

いつものように彼の手元にはカメラが置いてあった。四六時中持ち歩くほどに好きなかと呆れていたが流石にそれを表情にはださなかった。大体、それは失礼なことだろう。

「ああ。そっちは、中原勇人だよな？」

「そうだよ。覚えてくれてたんだね。ありがとう」

「いやいや。それよりもだな、勇人、確か写真部だったよな？」

「そうだよ。もしかして、入部希望？！」

「その前に活動内容を確認させてくれないか？」

「そりゃあ写真部なんだから写真を撮ることだけだよ。街に出て写真撮ったり、校舎をうろついたり、屋上にいたりとか、色んな場所に行ってるよ。ようするに気分次第なんだよね」

「……なるほど。それ位ならいいか……」

「え？ え？ もしかして本当に――」

「ああ、入部するよ」

すると勇人は突然私の手を掴んで、ぶんぶんと思いつき振り回した。本人は握手のつもりなんだろうが、私は腕が痛い。というか、この喜び具合は、なぜか犬が尾を振る様子を思い出してしまうな。

「ありがとー！ 実は新入部員が死ぬほど欲しかったんだよね。部の存続が掛かってたんだ！ よっしゃー！」

「あ、ああ、どうも……」

勇人の急激なテンションの上がり具合についていけない。なんか置いてけぼり感を喰らっている気分だ。

つとと、そういえば一つ訊いておかなければならないな。

「なあ、部に入る前に一つ訊きたいことがあるんだが」
勇人は振り回す腕を止めた。

「うん、なにになに？」

これだけは確実にしておかねば。

「写真部って、腹筋200回を強要してないよな？」

「……へ？ 何の話？」

私は写真部に入った。

そしてそこは、意外にも心地の良い場所だった。あまりの心地のよさに、いつの間にか部員との他愛のない日常に浸っている私がい

たのは否めない事実。
 勇人にはカメラの使い方を教えられ、理衣とは帰り道が同じことから仲も良くなり、凜はからかうと小動物のような反応をするので面白い。

しかし、私はすべきことを怠ったわけでもない。

顔は使い分けさせてもらった。

勇人達と遊んでいる表と、複製人間実験クローンの調査をする裏。

そんな生活に徐々に順応していく私。

さして苦でもなかった。もともと私は確固たる意志を持って過去にきているのだから、そこまで過去での出来事に執着する必要もない。写真部との絡みも息抜き程度に私は考えていたのだ。

……否、考えているはずだった。

だが、1か月、2か月と過ごすうちに、写真部と過ごす時間が私にとって重みを持ち始めた。天秤に乗せたら「私の目的」と同等または少し軽い位の重量。

彼らとの日常が私の安息となっていたからなのだろう。

なぜなら研究の調査にはいつも緊迫とした心持ちで臨んでいたからだ。研究所のメインサーバーへのハッキングによるデータの収集はPCの画面に相對する私の心臓は爆発しそうなもので、女スパイさながらの研究所への侵入は寿命が縮むかと思うほど。

危険と安心。

この二つの絶妙なバランスが、私にはちょうど良かったのかもしれない。

そう。

ちょうど良かったのかもしれない“かった”。

その日は目的の研究所周辺に潜んで様子を見ていた。

私は研究所から出てくる人の後をつけては、その人の素性を洗いだしそこから研究内容に近づけるものを探す――といったことを続けていた。それらはある程度続けていたおかげで研究員を大方把握することは出来た。が、残念ながらクローン人間実験を証明してくれるようなデータはまだ乏しい。

やはりもう一度ハッキングをかける必要があるのかもしれない。しかし、一度やってしまっただけでは警戒されているだろうし、うまくいくとは限らない。

私はおもわず肩を落としてしまう。

「いやいや、落ち込むな。まだ時間はあるんだ。頑張れ、私」
そう言っただけで自らを励ます。

頬をぺちぺちと叩いて気合いを入れ直す。

今日は研究所の裏門を監視していた。というのも、正面の玄関には、「清掃中」といった立て札が設置されていて通れないようになっていた。長い時間の「清掃中」を不審に思ったものの、そこを通ろうとする人の姿もなかったので、裏門に回ることにしたのだ。

双眼鏡から見える風景は特に変化が無く、私は暇を持て余してしまっただけだ。

「前回の忍び込みは、あそこに人が立っていなかったら、もっといい成果を上げられたはずだったんだが……」

と、嫌なことを思い出して顔をしかめる。10日ほど前に行った研究所への侵入がうまくいってたら、こんなふうに監視をする必要もなかった。

私が未来から持ってきているデータには確かに研究所の名前はあったのだが、問題はここで行われていた研究資料にはロックがかかっていたのだ。

このロックを取り外そうと努力はしているものの、なかなか解

けず、幾度もP Cの前で私は頭を掻き毟ってため息を吐いてたのだった。

もっと性能のいいP Cがある未来だったら時間は短縮できていたはずだったんだが、このデータを手に入れることが出来たのが。過去にわたる前日だったためにこんな問題にぶち当たってしまったっている。

しっかしまあ、なんとも、苛立たしいことだ。

研究所は目の前にあるのに、ここでのクローン実験の内容は掴めていない。

もしクローン人間の実験がここで行われているのならば、私は早々にここをぶち壊したい。手も腕も脚も、体中が目の前の研究所に対しての破壊衝動を押さえつけられずに、うずうずしている。

だが私は、暴れるのは未来に帰る時間ギリギリにと決めていた。

ここで何かをして、例えば誰かに追いかけられたりなどという面倒事が起きても、未来に逃げる事が出来るからだ。

私は期限が終えると、強制的に私の体は未来へと送られる。裏を返せば、その期間まで一度も未来に帰れないわけだが、だからこそ、タイムリミット間際に暴れなければならない。

――期はまだ熟していない。

私は自分のそう言い聞かせる。

すると。

ポツリ。

ポツリポツリ。

ポツリポツリポツリ。

私を嘲笑うかのような雨が降り出した。しかも緩やかに思えた雨脚は、すぐに激しくなった。音はポツリからザーツに変わっている。最悪だ。

「天気予報じゃ、んなこと言ってなかっただろうが!!」

私は急いで引き上げようとすると、一台の車が建物の裏口に停まった。

運転手が颯爽と降り、傘を広げて後部座席の扉を開いた。そして傘の中に人を招き入れている。

車から出てきた少女に、目を奪われた。胸が弾けたような錯覚を覚える。

私が呆然としている間に、その2人は建物の中に消えていった。雨なんて気にしていられなかった。服は完全に水を吸って肌に張り付いているし、髪を括っていたリボンが解けていて髪全体で雨粒を受けている。

「……理衣だよな……?」

雨は一層強くなった。

この日の夜、私は夢を見た。

ただこれは一度経験したこと。夢というよりかは、記憶の中を漂流しているような気分。

夢の中の私はまだ幼かった。小学生だろう。なぜなら父さんも母さんも生きていたからだ。

2人とも熱心な研究者だったため、2人がいる研究所の敷地内で芝生があるところで私は飼っていた犬であるティフと一緒に遊んでいた。

人はあまりいなかったし、風がよく吹くところで涼しかったし、私のお気に入り場所だった。ティフと一緒に寝転がったり、駆けまわったり、ボールで遊んだり。

ある日はそこで昼寝をしてしまっていた。寝転がっていたらいつものまにか寝てしまっていたらしい。

「……くすぐったいよ、ティフ」

半ば寝ぼけ気味で目を開くと、ぼやけて安定しない視覚が知らない男の子を映した。

さっと半身を起すと咄嗟に身構えて私は、「誰?」と訊いた。

それがユウとの出会いだった。

「――ユウってさ、なんでいつも哀しい顔をしてるの？」

「え？ 僕がかい？」

「うん、そう。ユウだよ」

「そんな顔してるかなあ、僕……」

「してるよー。うん、いつもしてる」

「でも僕はここで彩音とティフと遊ぶ時間が好きだし、楽しいって思ってるんだけどな」

「ほんと？」

「ほんとほんと。僕以外のみんなは外で遊ぼうだなんて思うやつはいないからさ、こうやって人と遊ぶ時間はすっごく楽しいって思うよ」

ユウは私の頭をポンポンと軽くたたいて、撫でてくれた。その手が暖かい。

「ユウ以外の人？」

「……うん、そう」と寂しげにユウは答えた。

「みんなはさ、“外で遊ぼう”とか、“走り回ろう”とか、そんなふうには思えないんだってさ。いつも部屋の窓から外は覗いてるのに、変な話だね。僕はみんなみたいには思わない」

「ユウは子供だもんねー」

笑顔でユウを見つめる。

「僕が子供ー？ じゃあ彩音は？」

「んー……。超子供」

「あ、一応僕が年上っていうことを配慮してくれてるのね」

「それは、どうでしょう？」

わんつ、と威勢のいい鳴き声をあげてティフはユウへと跳び込んだ。

「のわっ?! ちょ、あははははっ、やめ、くすぐったいって!」

ユウを押し倒したティフはユウの顔を舌でぺろぺろと舐めている。尾を忙しなく振るティフを見ると、どうにもユウがくすぐったそうにしているのを楽しんでいるようだ。

「ティフはすっかりユウのことが好きみたいだよ」

「ちょ、ティフやめっ……！ 彩音、とめてよー！」

私は立ちあがってにやりと笑みをつくってユウの傍に仁王立ちし、真上からユウの顔を覗きこむ。

「にひひ、私実は人をおちよくるのが好きなの」

手をわきわきと怪しげな動きを強調する私の顔を確認すると、ユウの顔が強張った。

「ねえ、まさか……」

ティフに押し倒されているユウの無防備な体が目の前に横たわっている。

私はもう一度にひひと笑った。

「その、ま・さ・か」

自分の両手をユウのわき腹に忍び込ませる。そして豪快に――くすぐってあげた。

「ぎやはははははっ……！ や、ちょ……！ む、無理……！ そ、

あははっ……！」

ユウの笑い声。

私の笑い声。

それふと目を覚ました私の耳に残響となったのは、消えた。

部屋の中は真っ暗だ。カーテンの隙間から陽光が差している様子でもない。陽が昇る時間よりも前に目を覚ましてしまうなんて、稀な出来事だ。

「はあ……」

枕に顔を埋める。自然と息がとまるが、それが今は少し心地がよい。

ユウの顔をあんなにくっきりと思い出したのは久しぶりだ。本当に久しぶりに、彼は私の夢の中に現れて来ていた。

頭をあげると今度は、仰向けになって両手を空にかざしてみた。

「ユウ……」

あの時くすぐったわき腹の感触が、少し蘇ったような気がした。
芝生の上で過ごしたあの一時が、鮮明に思い出されたのだ。

あの時笑っていたユウは――。

――もういない。

N o t S c e n e

（飛鳥原彩音の想い：3）

（前書き）

今回は少し長くなってしまいました……。

あの雨の日に見た理衣の姿は私の網膜にくっきりと焼きついていた。

冷たい雨粒の感覚と共に何度も何度もそのシーンが蘇ってくるおかげで、データロックの解除作業にも身が入らない。まるで惰性でキーボードを突っついていくかのようだった。

結局データロックの件は後回しにし、私は理衣についての調査を行うことにした。

最初に調べたのは理衣の生い立ち。

難なく調べ上げることが出来た理衣の生い立ちは、しかし、なにも不自然なところは見当たらなかった。

巫女寺市とは違う町の病院で生まれ、その町で幼少時代を過ごし、小学生が半ばを過ぎた頃に巫女寺市に引っ越し、中学・高校と無難に進学している。

特筆するようなことは何もない。

一般の人と変わらない、普通すぎる経歴。

じゃあなぜ、あの研究所に出入りしているのか？

その謎は未だに解けていない。

仕方なく私は理衣を尾行することに決めた。

私が理衣の行動の監視を始めてからも、理衣は幾度か研究所に通った。

その姿を見る度に私は不思議に思ってしまう。

もしあの経歴通りならこの研究所への関わりなんてものは一切ないはずなのだ。手に入れた資料によれば、理衣の父親も母親も「研究員」という職なぞに就いてはなかった。

謎が深まるばかり。

経った一度の訪問ならまだしも何度も通っているとすると、私の錯覚だったなんていうことはもうありえない。

理衣は何かしら研究所と関係のある人物。

このことが私の足枷とならないようにして欲しいと、今はそう願うしかない……。

その日の空は曇っていた。

私とティフはいつものように遊んでいた。あの草はらの上で、穏やかな日々を満喫していたのだ。

途端にポツリ、と雨が降ってきた。

「あゝあ。降ってきちゃったね、ティフ」

寝転がっていた私は、立ちあがって服に付いた草を払う。

「おいで、ティフ」

同じく寝ころんでいたティフが主の腕の中に納まる。

そしてそれは突然起こった。

地が揺れるほど大きな爆発音。しかも1つではなかった。3、4

回ほどそれは響いたのだ。

「きゃっ！！！！！」

耳を抑える。ティフを抱えていた両腕を放してしまった。

「……何？ 何が起こったの？」

警報が大きな唸りをあげた。あたり一面に音を鳴らしている。それは私の不安感をより一層つのらせた。

振り返ると数十メートル離れた研究所のほうから黙々と黒煙が立ち上っている。

私は思わず叫ぶ。

「お父さん！ お母さん！」

私はいつの間にか研究所へと走り出していた。

そんな私を妨害するかのように雨足は強くなっていく。

爆発したと思わしき所では、火が燃え盛っている。もはやパチパ

チといったレベルでは無い。火は炎となり徐々に徐々に研究所を呑みこんでいる。雨が降っているのにも関わらず、炎の勢いはとどまるところを知らなかった。

「おとーさん!! おかーさん!!」

大きく声を張り上げる。でも、返事は無かった。

何回も、何回も、2人を呼んだ。

「お父さんお母さん、どこ? どこにいるの? 返事してよ!

ねえ! お父さん!! お母さん!!」

研究所に近寄ろうとする。

熱い。

中に入りたいののに、入れない。

「おとーさん!!! おかーさん!!!」

頬を伝う雨粒に涙が紛れ始めた。それほどに私は、怖かったのだ。お願い、お父さんお母さん返事してよ! 出て来てよ! 嫌だよ

……。一人ぼっちは嫌だよ!

必死の叫びも虚しく、雨と炎の音しか耳に入ってこない。

私は呆然と立ち尽くしていた。ティフは足元で吠えていた。

すると、爆発で建物に空いた穴から誰か出てくる。

最初は炎でよく見えなかったが、微かに見え隠れし始めたそのシルエットを私は知っていた。

「……ユウ!」

私はユウの近くに駆けよっていった。

「ユ……ウ?」

炎の中から出てきたユウの目は何も映していないかのように虚ろだった。いつもとは違うユウの絶望に満ちた表情を目にした私は言葉を失ってしまった。

ユウが私に気づくと、ハッとした面持ちで私の肩を掴んで言った。

「彩音! 今すぐここから逃げるんだ! はやくっ!!!」

ユウがいつも着させられている白い服は至る所が破れ、ところどころに血の赤や煤の黒が目立つ。ただユウの服はこんなにも汚れて

いるのに、ユウ自身には傷が1つもなかった。

「な、何があったのユウ？ お父さんとお母さんはどこ？」

ユウはしばらく困ったような顔で黙っていた。

「ごめん彩音。とりあえず今はここから逃げて欲しい。お願いだ」

「嫌だよ！ お父さんもお母さんもまだ中にいるんでしょ？ そ

んなの——」

「頼む彩音！ じゃないと——」

ガサリ。

ユウの背後で何かが動く音がした。私はそっちの方を注視する。

ユウと同じ衣に身を包んだ、ユウと同年代の顔立ちが目に入る。

私はその人の表情を見て凍りついた。

憎悪に満ちた眼。歪んだ笑みを浮かべ、ぶつぶつと何かをつぶやきながら、熱い炎の中を飄々を歩くその姿が、まるで悪魔のようで、「ひっ……！」と私は声にならない悲鳴をあげた。

「あん？」

その男が私に気づく。

「あつれー、人間だー。まだ生きてたのかー。そうかそうか。なら——殺さなきゃね。キシシキシ」

その人は壊れていた。何かが外れている。

私は足がすくみ、動こうにも動けない。ティフが怯える私の代わりに、必死に唸り声をあげていた。それでもその男は私に近づいてくる。

ユウが立ちはだかってくれた。

「だめだ！ こいつは殺させないっ！」

両腕を広げて私の前に立つユウ。その後ろ姿を私はただ見ているだけしか出来なかった。

「どけよ、カス。お前は裏切るのか？ 一生こんなところにおいて満足出来んのかって訊いてんだよ……！」

「それとこの子を殺すことには、何の関係もないじゃないかっ！
！ お願いだよ、もうやめて！」

「邪魔だ。邪魔だ邪魔だ邪魔だ！！！！俺は人間が憎いから殺す。どかねえってんなら、お前の胸にも俺の腕を突き刺してやるよおおあ！！！！」

男が自らの右腕を手刀にしてユウの心臓目掛けて走ってきた。

ユウは間一髪でそれをかわす。どうやら擦れたらしく、ユウの服に新たな破れ目が出来て、そこから血が微かに滲んでいる。

手刀を捉えきったユウは、男の首を片腕だけで掴んだ。

「う、っぐああああ……」

ユウは何も言わない。ただ無情に男の首を握り締めていった。苦しさに喘ぐ男。

その時のユウの顔は、怖かった。

「彩音、目を瞑って」

私は言われた通り、すぐに目を閉じた。

ぐちゃり、と何かが潰れた生々しい音。私は何が潰れたか考えないようにした」

「彩音」

名前を呼ばれて目を開けた時には、ユウが私の顔を覗きこんでいた。

「ユウ……」

私の体は震えていた。

「仕方が無いね。僕が彩音を外まで連れて行ってあげるよ」

そう言ってユウは私をおぶってくれた。ティフのことも丁寧に抱えてくれていた。

「大丈夫、彩音？」

「……ちよっと寒い」

「そっか。ずっと雨に降られているもんね。すぐに外に連れてってあげるよ」

走るスピードが上がった。

どのくらい揺られていたのかは忘れてしまった。

けど、突然聞こえてきたその声は鮮明に覚えている。

「動くなっ!!」

私は何事かと辺りを見回した。

銃を持っている人の姿が目に入る。それも一人だけではない。数十人もの人が私とユウにその禍々しい銃口を向けていた。人々の姿から、どうやら警備団の人たちであるのが分かった。

その中の一人が言った。

「お、おい。あの子、飛鳥原さんのお嬢さんだぞ」

「何？ それは本当か？」

どうやら私のことを知っている人がいるらしかった。警備団の方でざわめきが生まれていた。その間もこちらに銃口は向けられたままだった。

しばらく経った。

「その子を解放して、こちらに渡しなさい」

そう告げられた。

ユウは私をティフをその場に降ろして、微笑んだ。

「ほら、お迎えだよ。彩音」

私にはまだよく分かっていなかった。

どうして私たちに銃が向けられているのかを。

どうしてユウの微笑みの中に寂しさのようなものがあつたのかを。

私はたどたどしい足取りで、その人たちの方へと歩いた。

「彩音ちゃん、こっちに」

誰かが私の手を引っ張る。顔を護るためのヘルメットのようなものが邪魔してその人の顔は確認出来なかった。私の後ろをティフがしっかりとついてきている。

後ろを振り向いた。さっきまで一緒にいたユウが遠い。

「ねえ、なんでみんなユウに鉄砲を向けてるの？」

私の手を引く人に訊いてみた。

「それは、悪い人だからだよ」とくぐもった声。

ガチャリと銃を構える音が耳に入る。

「待って——！」

一瞬だった。

鳴りやまない銃声。何度も何度も、辺りを劈く音。それは降っている雨と同じようだった。

振り返ると体に幾つもの穴が開いたユウが、地面に立っている。

「ユウ!!」

その時、私が最後にみたユウの顔は笑顔だった。私に向かって小さく手を振っている。その口が「バイバイ」と動いたような気がした。

そしてユウの体は地面に伏した。ゆっくりと、糸の切れた人形のように。

「なんで撃つの! ユウは悪い人なんかじゃないのにっ!! ユウ! ユウうううう!!」

ユウのもとへと駆け寄ろうとしたが、私の腕を引っ張る手がそれを許してくれなかった。

私はなす術なく、ただ叫ぶことしか出来なかった……。

――あれは忘れられない記憶。

あそこで行われていたのは、ヒトの遺伝子をいじくる実験。生まれる前にあらかじめ遺伝子を操作することによって生まれた、人間よりも幾分性能があがった「強化人間」だ。

「強化人間」を創造し、完成形を「複製」する。

その強靱な肉体を自国の戦力に動員させようと国が秘密裏に行っていた実験。

しかしある日「強化人間」による反乱がおきてしまった。

それにより、実験に関与していた父さんと母さんは死亡。私を助けてくれた強化人間ユウは、私の前で銃殺された。

“ユウは悪い人なんかじゃないのにっ!!”

そう。

ユウは悪い人じゃない。

じゃあなんでユウが殺されなければならないのか。

殺されなければならないのは、国だ。国が作り上げた「裏」だ。

この強化人間実験は複製人間実験から端を発している。

ならば、私が過去の複製人間実験を無かったことにすれば――。

歴史は変わって、父さんと母さんは生きているはずだ。

でもそうしたらユウは生まれない……。

いや、生まれても殺されてしまうんだ。そんなの幸せじゃないに決まってる。

私は歴史を変えるべきなんだ……。

長い長い回想を終え、私は現実へと戻る。

今は学校からの帰り道。

じんわりとした暑さに辟易し、時々聞こえてくる蝉の声はうるさい。

「さすが勇人先輩です！ まさか本当に金賞を取れるとは思いませんでした！」

凜の言葉に少し照れ気味な勇人の姿が目映る。

部活終わりの帰り道。方向が似たり寄ったりな写真部メンバーはみんなでかたまって下校している。勇人が一瞬だけ体調が悪そうな素振りを見せたこと以外では、この日の下校は普段となんら変わらなかった。

みんなと別れそれぞれの帰路についた後、少し時間を開けてから私は再び理衣の尾行を開始した。

理衣は途中から自宅に向かう道から外れた。その不審な行動が気になる、私はしつかりと見失わないように追跡する。

しかし、どうやらこの行動は浅はかだったようだ。

キイイイイッ！！！！

白い車が私の前で急停車し、何事かと思っていたら数人の恰幅の良い男が車から現れたのだ。

「……く、あ、離せっ……！」

その強靱な腕力で私はすぐに取り押さえられ、車に押し込まれてしまった。

この突然の拉致行為に私は混乱していた。

私の口や腕や足が、次々に拘束されていく……。

抵抗も虚しく、私は何も出来ない赤子状態になってしまった。

車が到着した先。それは――。

大都生物学研究所。私がずっと調査を続けてきた研究所だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4490s/>

Re-birth:最後の一枚を

2011年10月8日23時57分発行